七色の探索者

チャーシューメン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法の森に住むアリス・マーガトロイド。

普段は魔法の森に引きこもって暮らしているはずのシティ派の魔女。

だが最近、何を思ったのか、あちこちに探検に出かけているらしい。

以下、注意点です。

・東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作小説です。

・世界観の曲解や登場人物の性格、背景などをいじっていて、設定が崩壊しています。苦手な方はご注意ください。

・一般的と思われる二次創作設定は一部流用させていただいています。すみません。

・作者は二次創作初心者です。

・ご意見を頂けると泣いて這いつくばって喜びます。

目次

闇の中の二人 ―― 1
完璧な天女 ―― 10
「私のホワイト・ラビット」 ―― 20
美しきもの ―― 27
魔女たちのマッド・ティーパーティー ―― 42
ブービー・トラップ ―― 62
愚鈍なる賢者 ―― 80
神の城 ―― 109
血 ―― 122
優雅なる窓辺 ―― 138

闇の中の二人

燐光が燃え上がった。

アリス・マーガトロイドは、漆を塗ったくったようにどす黒い闇の中、儚げな色を放つそれを、自身の吐息で掻き消さぬよう、手で覆った。

この頼りない灯火だけが、今やアリスを照らしている、唯一の光だ。

「マッチか。さすがだな、アリス。用意がいいぜ」

アリスはその声を発した主のほうを見やる。

揺らめく炎に照らし出される、黒色の帽子を被り、金色の髪をした、十代かそこらの年端も行かぬ少女。その小振りなお尻を地面に付け、ぺたりと座り込んでいる。しかしその小さな体躯からは想像も付かないような行動力と意思力、そして魔力とを持つ女。整った、というよりは、何処と無く均整を欠いたその容姿が、逆に強く人を惹きつける魅力を持つ、不思議な女だ。霧雨魔理沙。人呼んで、白黒の魔法使い。もっとも、この闇の中では、纏った白と黒の割合が崩れ、半ば黒に喰われかかっているようにも見える。……いや。もしや、薄衣のように覆い被さるこの闇を、我が身の一部にしようと試みている最中なのかもしれない。霧雨魔理沙は、そういう強かさを持つ女だ。

アリスは燐光に導かれ、周囲を見渡す。揺らめく暖色が照らしだすのは、土、土、土の壁。アリスたちがいる空間は十間ほどの幅があり、両脇に平行して走る土壁が、アリス達に決定的な決断を迫るかのごとく、前後に伸びていた。闇の先はどちらも、燐光の限界に阻まれてしまっている。見上げると、土壁の中に大きく開いた穴がひとつ。アリスたちが落ちてきた穴だ。穴の先は暗く、女の細腕でよじ登るのは、とても無理だろう。

アリスは土壁に顔を寄せて、細かく観察を行う。

砂利や小石、石灰が混じった土壁は、所々から小さく藁がはみ出していた。さらに一定間隔で縦横に筋が入っている。表面に触れてみると、思った以上に滑らかで、ポロポロと崩れた表面のその奥に、ぎっしりと締まった粒子が、試みに突き立てたサバイバルナイフを、いと

も簡単に跳ね返してくれた。
「……版築だわ」
「版築？　それってアレか、古代の城とかで使われていた建築方式だろ？」
「よく知っているわね。でも方式というよりも、工法よ。城壁を作るための。どうやらここは、古城の回廊の中のようね」
「馬鹿な」魔理沙は大仰にかぶりを振った。「魔法の森の地下に、古代の城があったっていうのか」
「おまけに魔力封じのトラップまで仕掛けてある城。穏やかじゃないわね」
　アリスは削った城壁の一部を、傍に浮かぶ上海人形が持つ小瓶に入れた。
「魔力封じで飛べもしないってのに、人形は動かせるんかよ」
「この子は有線だから」
　魔力封じの術は様々に存在する。最も簡単なのは、魔力が指向性を持てぬよう、微弱な魔法を放ち続けることである。これはその類のトラップのようで、空気中に妨害魔法を放つ何かが充満しているようだ。そのため、空気中を魔力が伝搬するような魔法、例えば飛翔術や、精密な遠隔操作を必要とする魔法、例えば使役魔法などを使うことが出来ない。もっとも、この手の妨害は単純な分、対策も容易く、拘束時間は限られる。アリス達が微弱魔法の妨害を回避するための魔術的な「方向」を発見するまで、もうしばらくと言ったところだ。それにいざとなれば、妨害を上回る出力で魔法を使えばいいだけだ。……こんな所でそれをすれば、この古城がアリス達の墓標に変わるだけではあるが。
　魔理沙は飛行箒を杖代わりに、立ち上がった。ケガをしているのか、片足を軽く引きずっている。この妨害の中では、治癒魔法を使えないのだろう。いやひょっとしたら、元々、魔理沙は治癒魔法が使えないのかもしれない。この女は、そういうところに気を回さないから。
「行こうぜ。じっとしてても始まらない」

「どっちへ？」
アリスたちの前後は、ブラックホールのような大穴がぽっかりと口を開けている。
「前に決まってるだろ。後ろを振り返るのは、もっと歳を取ってからでいい」
「前、ってのがどっちか分からなくて、困ってるんだけど」
「向いてる方向が前に決まってるだろ」
言うが早いか、魔理沙はびっこを引きつつ、歩き出した。アリスはため息を一つ吐くと、魔理沙に寄り添うように従った。
百間ほど進んだ所だろうか。回廊はすぐに突き当たってしまった。
魔理沙が指を鳴らす。
「ビンゴだ」
突き当たりの壁には、装飾の付いた門があった。
「どうだか」
魔理沙が鼻歌交じりに門に手を掛けようとした、その時、唐突にマッチの火が消えてしまった。
急に視界が利かなくなり、よほど驚いたのだろうか。魔理沙はバランスを崩してよろけたらしく、一瞬、アリスの腕に、その羽根のように軽い体重の全てを預けた。
すぐに大勢を立て直した魔理沙は、アリスを突き飛ばすようにして離れると、不機嫌そうな声を上げた。
「おいィ、頼むぜ？　見えなきゃ、開く扉も開かないぜ」
「待ちなさい。次のやつ、点けるから」
手探りでマッチを取り出し点火すると、再び周囲が燐光に包まれる。目の前には、眉を吊り上げた魔理沙の顔があった。
「全く、しっかりしてくれよ？」
「はいはい」
魔理沙は門の閂を外し、押したり引いたり寄り掛かってみたり、果ては数発殴り付け、おまけとばかりに頭突きまで入れたが、門は開かなかった。
魔理沙は振り返り、神妙な顔で言う。

「開かないぜ」
その様子が可笑しくて、アリスは吹き出してしまった。
「なあに、それ」
「反対側に進んでみるか」
「後ろは振り返らないんじゃなかったの？」
「今はこっちが前なんだぜ」
魔理沙はびっこを引きつつ、来た道を戻ってゆく。アリスは黙ってそれに従った。
仄暗い回廊の中。アリスの立てる、冷たく乾いた靴音と、魔理沙が足を引きずる音だけが響く。
前方は、見渡す限り闇。
闇の中、二人寄り添うように、ゆっくりゆっくり、進んでゆく。
「痛いのなら」
アリスは、魔理沙を視界に入れないようにしながら、言った。
「背負って行ってあげましょうか？」
きっと、魔理沙は振り返らないだろう。
「ハッ、どういう風の吹き回しだ、お前がそんなこと言うなんてよ」
その声は、とても遠くから響いたように、アリスには聞こえた。
「都会の風は、複雑なのよ」
魔理沙は声を上げて笑った。乾いた笑いだ。きっと魔理沙も、気づいているのだろう。
アリスの腕に触れた時。魔理沙の体は、震えていたのだ。
足の痛みではない。捨食の魔法のあるアリスは、たとえ何日、何年彷徨っても死なないが、未だ人間である魔理沙は、そうはいかない。閉ざされた闇の中、頼りの魔法も使えないこの状況。たとえそれが、たった数刻のことだとしても。死の恐怖を、闇への不安を覚えない人間など、存在し得ないのだろう。まして、年端の行かぬ少女ならば。
魔理沙のいじらしい強がりがたまらなく幼稚に見え、滑稽さに居た堪れなくなったが、きっとその強がりが、霧雨魔理沙という女の、果ては人間という生物の、強さの源であるのかもしれない。既に人間をやめたアリスには、想像するしかないことだった。

「……幻想郷の風も、複雑なんだぜ」
魔理沙はやはり、振り返らずに言った。
アリス達は時折、思い出したように、ぽつりぽつりと会話しながら、闇を掻き分けて進んだ。
千間、いや二千間も進んだだろうか。いつの間にか回廊は終わり、周囲は岩肌がむき出しの、まさに洞窟といった道に変わっていた。舗装されていた道に比べ、ゴツゴツとした岩に足を取られて歩きにくいのか、魔理沙の歩く速度が少し下がる。道幅は、相変わらず１０間弱といったところだった。
分岐に出くわす度、ああだこうだと口論しながら、最終的に箒を倒して道を決め、進んだ。魔理沙はわずかの明かりの中で、その都度、どの分岐をどっちの方向へ曲がっただとか、何歩で分岐に出くわしただとか、細かく記録をとっていた。アリスは、そんなことをせずとも、元来た道を引き返せる自信がある。魔理沙もそうだろう。それでもなお、魔理沙は記録を残す。不安からか、それとも生来の用心深さからか。きっと両方なのだろう。
擦ったマッチも3箱を数えようかという頃。
前方に、かすかだが、燐光以外の明かりが見えた。青く揺らめくその光は、水の存在を予感させた。
同時に、何かが這いずるような音が聞こえてくる。
ずり……ずりり……。
アリスたちの前方から、少しずつ、それは迫ってくる。同時に、妙に生臭い匂いが辺りに立ち込め始めた。
「おい」
「わかってるわよ」
アリスは手にしていたマッチを吹き消した。燐光は止み、代わりに満たされる、青い光の揺らめき。
突然、足元に衝撃が走り、地面が盛り上がると、土中から現れた細長い物体が体に絡みつき、アリスの四肢は自由を奪われてしまう。
「しまった！」
魔理沙が鋭く叫ぶ。魔理沙も同じように、地中から現れたものに巻

きつかれてしまっていた。
アリスは腕に絡みついたそれに目を向けた。
腕に巻き付くそれは、表面はぬるりとしていて、毛が生えておらず、代わりに小さな吸盤が無数についていた。しなやかにのたうつ様を見るに、おそらく、頭足類のそれのように、筋肉の塊なのだろう。力は強く、アリス達には振りほどけそうもない。触腕はギリギリと、少しずつ力を強くして、アリスの腕を締め上げている。徐々に力を強めているのは、わざと獲物に抵抗させ、体力を使い果たさせるのが目的なのだろう。自然界の法則は、万事が万事、非常に論理的で、時につまらないとさえ思うことがある。
前方の光が少しずつ輝きを増し、触腕の持ち主が現れる。
ぎょろりと剥いた巨大な目が二つに、人一人を軽く飲み込めそうな、くちばしの付いた巨大な口。しなやかにうごめく軟性の半透明な体を持つ、思った通りの頭足類の妖怪である。青い光は、おそらく頭足類の後方にあるだろう光源を、その半透明の体で屈折させた結果だろう。目には知性の欠片も認められず、醜悪で、見るに耐えない。アリスは激しい嫌悪感に襲われ、体をぶるぶると震わせた。
「妖怪の餌はゴメンだぜ」
魔理沙は頭を降って、帽子の中から自慢のミニ八卦炉を取り出すと、それを構えた。
「待ちなさい、そんなものを使ったら、私たちまで生き埋めになるわ」
「じゃあどうするってんだ」
「相手が醜悪であればあるほど、私たちは紳士的に振る舞うべきだわ。それがシティ派ってものよ」
アリスがブーツの踵でトントンと地面を叩くと、ブーツの先から白刃が現れる。そのまま足と体を一捻りし、醜悪な触腕を、一つ二つと切り裂いて、アリスは嫌悪の塊から逃れた。ついでに舞を一つ舞い、魔理沙も自由にしてやる。
「上海に頼るまでもないわ」
ひゅう、と魔理沙は口笛を吹いた。
「仕込みブーツかよ。シティ派ってのは物騒だな」

言いながら、魔理沙も魔力を込めた箒を触腕に叩きつけ、その一つをえげつなく引きちぎった。
巨大な頭足類は、痛みを感じる神経くらいは持っていたのか、切れ切れになった触腕を震わせながら、大きくよろめいた。
「なんだよ、もうオネンネか」
魔理沙が箒を担いで、頭足類に近づく。先程まで死と闇を恐れ震えていた少女と同一人物だとは、とても思えない。
意外にも、その頭足類は恐怖も感じることが出来るのか、ズリズリと後ずさりを始めた。
「ヘッ、次からは、相手を見てケンカを売るんだな」
そう言いながら、魔理沙は落ちていた触腕を一つ拾う。魔理沙の小さな手の中で、触腕がビチビチと跳ねていた。
逃れた頭足類と同じ方向に行くのは、アリスの美意識が許さなかったので、アリスたちは再び燐光を手に、来た道を少し引き返し、別の道を進んだ。
頭足類が現れ、光が見えたということは、水脈と出口が近いのかもしれない。
「そろそろ教えろよ。一体全体、なんで突然、探険なんて始めたんだ？」
「あんたからどう見えるかは知らないけど、私はいつだって、旅をしているのよ。世界中の、いろんな色を求めて、ね」
「なにぃ？　じゃ、ただの趣味だってのか。なんかすっげぇお宝の地図とか見つけたのかと思って、ワクワクしてたのに。がっかりだぜ」
「勝手に付いてきてよく言うわ。……てか、その触手、いい加減捨てなさいよ」
「嫌だね」魔理沙の手の中で、触腕が嫌がるようにビチビチと跳ねた。
「帰ったら魔法の材料にするんだ」
アリスはひとつ、ため息を吐く。
「あんたには分からないかもしれないけどね。世界の色ってもの、なかなか、捨てたものじゃないわよ」
アリスたちは、開けた場所に出た。

隣で、魔理沙が息を飲むのが聞こえる。
そこは、巨大な地底湖だった。水の力で出来たのだろう、ドーム状に滑らかに削られた岩肌の、その頂点にポッカリと開いた穴から、真昼の太陽の輝きが一筋、剣のように伸びている。青く透き通った水面に反射した光は、地底湖の湿気で散乱し、美しくキラキラと輝いていた。砂浜に寄せては返す穏やかな波音が、遠い昔に離れてしまった、母の温もりを想起させる。その光景の美しさは、例えようもなかった。
足を引きずりながらも、魔理沙は砂浜を駆け出し、地底湖の波打ち際まで行った。
「すっげー！　キレイだなぁ！」
魔理沙の弾む声も、耳に心地良い。
「ね？　世界の色も捨てたもんじゃないでしょう？」
「ああ！　魔法の森に、こんなところがあったなんてな！」
「それにこういう美しい景色のあるところには」
振り返る魔理沙に、手にした「戦利品」を見せつけてやる。
「美しいお宝もあるものだしね」
「あーっ、やっぱり！　ずるいぜ、アリス！　人が景色に見とれてる隙に！」
魔理沙は、洞窟の入口のすぐ脇に立てられた、古びた小さな社へ駆け寄り、その中を覗きこんだが、時既に遅し。中にあった獲物は、既にアリスの手の中だった。
「いいなぁ、そんなでっかい真珠……！」
魔理沙は物欲しそうに、アリスの右手の平の上にある、直径三寸はあろうかという巨大な真珠を眺めた。
「うふふ。いいでしょ。あんたはその頭足類の足で我慢しなさいな」
「いやだ！　くっそ、他になんかないのかなぁ」
手にした触腕を放り出し、魔理沙は社に頭を突っ込んで、夢中で中を探っていた。
その後ろで、アリスは、祭壇の中にあったもう一つの戦利品を、そっと服の袖の中に隠した。

博麗の紋章が刻まれた、古の血に塗れる、一振りの儀礼刀を。

完璧な天女

レインコートの表面を、ザラザラと雨が滑り落ちてゆく。ビニル質の表皮から浸み出した冷たい雨粒が、アリスの繊細な肌理を、舐るように伝い落ちる。既に下着まで侵食されつつあり、ぐっしょりと湿ったそれが肌にまとわりつく感覚が、アリスを堪らなく不愉快にさせた。やはり、紛い物をつかまされたらしい。香霖堂の店主は今度、しばき倒す事にしよう。

フードを被ったまま首を回して、空を見回す。荒ぶる天の涙が、その蝋人形のような顔に当たり、弾け、アリスは手で庇を作った。雲の中に入ったのだろうか、視界がまるで効かず、一面、巻き荒れる雨粒の乱舞と、紫煙のようにどす黒くけぶる、闇の雲だけだった。まだ昼前だというのに、夜の帳が降りている。後ろを振り返ると、たった今登ってきた筈の道さえも見えない。岩肌が剥き出しの鉛色の斜面に、地に落ちた天の涙が幾重にも折り重なり、徒党を組み、我先に堕天せりと下界へ殺到している。宛ら、滝の如く。下界に儚い夢でも見ているのだろうか、そんなに気の利いた所ではないというのに。

アリスは姿勢を低くし、斜面に手を掛け、這うように登った。吹き付ける風雨は強く、駆け抜ける流れは速く、ぬらりと滑る岩苔乗は鬱陶しいほど生い茂り。いつもの革製のブーツでやって来たことを、アリスは後悔した。駄虫と同じように、汚らしく地面を這いずり回る羽目に陥るとは。おまけに、岩苔乗のぬらぬらとぬめる感触が、白く柔いアリスの指と指とに絡みつき、嫌悪感で気も狂わんばかりだ。胸の谷間に隠した上海も、主のそんな様子に、顔をしかめている。近頃の上海は、情けないアリスを嫌う。究極の人形に近づいているのは喜ばしいことだが、少し釈然としない。

「こんな所で、何をしているのですか」

突然、上から声を掛けられる。知った声だ。這いつくばったまま、情けなく顔だけ上げる。

雨粒を羽衣の様に纏い、風と雷光を従えた永江衣玖、その世にも美しい姿が、ふわりと事もなげに、唐突に絵空事の様に、其処に在った。

風にふくらみ大きくはためく、赤色のフリルの付いた桃色の衣が、名画のワンシーンの様に、いちいちアリスの目に焼き付いた。
「素敵……」
挨拶よりも先に、アリスはそう漏らした。這いつくばった格好で、嵐の山で、風雨の中で。アリスにも場面にも、まるでふさわしくない言葉。たが、アリスにすらそう言わせてしまうような、魔術めいた魅力、圧倒的な美が、目の前の永江衣玖には有った。まさに、天女。今なら橋姫の気持ちが分かるアリスだった。
「下界の方がそのような軽装で、この天界の花果山にいらっしゃるなど、無謀もいいところですよ」
衣玖は嗜める様に言う。しかしその口調は、ゆったりとして優しく、声からも甘い香りが漂うのではないかと思われるほどだった。
衣玖が優雅な手付きで空をなぞると、一筋の光の線が浮かび、見たこともない幾何学模様を作り出した。そのまま印を突き破るように、衣玖が両手を突き出すと、アリス達は輝く雷球に包まれ、風雨は遮られた。魔術に造詣の深いアリスですら、解読不能なそれ。天界の術は、人界のそれを圧倒しているとでもいうのだろうか。単に見た目を格好良くするために、適当にそれっぽい模様を描いたようにしか見えないのだが……。
衣玖は腰を低くし、アリスに手を差し伸べ、顔を優しく綻ばせた。
「さ、どうぞ」
その様に扱われることを、アリスのプライドは許さなかった。
衣玖の手を払って起き上がると、同じ高さまで浮き上がった。
「無粋ね」フードを外し、たっぷり水を含んだ髪を絞る。「折角、不自由を愉しんでいたところだというのに」
短めに切った金色の髪から、じゃらじゃらと水が伝い落ちた。全身、濡れ鼠だったが、あながち強がりという訳でもなかった。
衣玖は気分を害するどころか、逆に嬉しそうにクスクスと笑った。
「その言い方。貴女、総領娘様にそっくりですわ」
「あんなペチャパイと一緒にしないでくれる？」
言ってから、衣玖の胸元に目をやり、しまったと思うアリスだった。

衣玖はそんなアリスに気づいているのかいないのか、
「ここは風雨がひどいですね。一旦、凌げる場所に移動しましょう」
話を変え、雷球をゆっくりと山の上方へ飛翔させた。
ふよふよと優雅に、雷球は飛び行く。
羽衣が揺れる幻想のような後ろ姿に、アリスも付いて飛んだ。
雷球は山を少し登ると、斜面にぽっかりと開いた洞窟の中へと入った。洞窟は長く続いているようで、奥の方は雷光に照らされても暗く、得体が知れなかった。ただ一時、風雨を凌げればよい二人は、奥に進まず、洞窟の入り口近くに留まった。背の高い衣玖が立って歩けるほどの十分な広さがあり、少し雨宿りするには打って付けの場所だ。
衣玖は大きく手を開き、楽団の指揮を執るかのように、腕を振るった。途端、雷光は小さく萎み、いくつかの散光になって、洞窟内に散り、そこで滞空した。明かりを作ったのだ。やはり、天界の術なのだろうか。その格好つけるだけにしか見えない仕草にも、何か計り知れない意味があるというのだろうか……。
衣玖は振り返ると、ニコリと笑った。
「さ。少しお話でもしていましょう」
そう言って、しゃなりと腰を下ろした。膝を折って、女性らしい座り方。アリスはなんだか対抗したくなって、わざと胡座をかいて座った。
洞窟の外は、まだ雷雨が続いている。
「今日はツイているわね。空飛ぶレアアイテムさんにお目に掛かれるとは」
「レアアイテム、ですか。はて？」
衣玖は小首を傾げる。
「貴女のことよ」つい、と衣玖を指差す。「知らないの？　天狗の新聞せいで、貴女、有名なのよ。見かけた日にはいいことがあるって」
「ああ、道理で。何気なく空を飛んでいると、皆様、私を指差されて」
得心がいったように、ポンと手を打つ。「若い殿方など、カメラを乱射するものですから、何事かと思っていたのですよ」

「……それは絶対、別の目的だわ」
天女のローアングルショットなら、さぞかし高値で売れるに違いない。
「今度から、下に人がいるときは、空を飛ばないように気をつけなさいな」
「はあ。左様ですか。まあ、気を付けます」
本当に分かっていないのか、衣玖は簡単に頷いただけだった。アリスは溜め息を付いた。
洞窟の中、妙齢の女性が二人でぼんやりと雨を眺めている。本来なら、画になる光景だったろう。雨が降るのを眺めるのは好きなアリスだが、豪雨は別だ。災害を眺めても面白いことなど何もあるまい。それもまた、アリスは溜め息の種になった。
ふと、かぐわしい香りがアリスの鼻孔をくすぐった。衣玖の方を見ると、キャンプ用のバーナーを炊き、何やら小さな鍋を火にかけていた。鍋の中には、卵とハムが落としてある。さらに、どこから取り出したのか、携帯用のポットから湯気の立つ液体をカップに注いでいた。少し甘酸っぱくて香ばしい香りの源、珈琲だ。
「い、何時の間に」
「丁度、お昼にしようと思っていたのですよ」
鼻歌を歌いながら、衣玖は言う。
「コーヒーはお好き？」
カップを差し出しながら。
「……紅茶派だけど、頂くわ」
おずおずと、アリスはカップを受け取った。
口を付けてみる。
苦味よりも酸味が強い、少し薄めで飲みやすい味だ。温度も丁度いい。何より、香りが心地いい。モカだろうか？　珈琲には詳しくなく、それかブルーマウンテンぐらいしか知らないアリスだった。
「ムカつくわね……」
何時の間にか焼いていたトーストに、出来上がったハムエッグをのせていた衣玖は、アリスの言葉に意外そうな顔をした。

「お口にあいませんでした？」
「いいえ。生憎」
アリスはまた、溜め息を吐いた。カップをもう一啜りする。
「完璧すぎるわ、貴女。まるで私が馬鹿にされているみたい」
「そ、そうですか？」
衣玖は顔を曇らせながら、出来上がった昼食をアリスに差し出した。受け取り、一口噛じる。美味い。パンの焼き加減、香り、卵の半熟具合、全て完璧だ。しかも、ただのトーストだというのに、何故か格調高い味わいがある気がする。
「このパンも卵もハムも、珈琲だって。全部下界で分けてもらったものなんですよ」
衣玖も自分の分のトーストを噛りながら言う。齧り付く様も可愛らしい。ブロマイドにして人里で売りつければ、一財産出来るだろう。
「褒めるなら、これらを作った下界の人々を褒めるべきですよ」
その気遣いもまた完璧過ぎて、アリスの気に障った。天女が伝説に残るのも、仕方の無いことだと思った。
その時、洞窟の奥から、獣の荒い唸り声が聞こえてきた。
衣玖は、眉を潜めた。
「はて。天界には、危険な獣など入れるはずがないのですが……」
自然な反応にしか見えない。
「いるじゃない。花果山には、昔から。危険な獣が、ね」
アリスは言う。
もちろん、衣玖は気づいているのだろう。アリスに花を持たせるために、無知の振りをしているに決まっている。だからこそ、腹が立つ。まるで自分が、釈迦の手のひらの上の孫悟空になったようで。
凶暴な獣の唸り声は、洞窟の奥の方から、次第に入り口の方へ、アリス達の方へ近づいてくる。
衣玖は怯えるように、身を捩ってアリスの方に身を寄せた。
アリスは溜め息を吐いて立ち上がり、衣玖の反応に乗ってやることにした。

指を弾き、白色の糸を洞窟の壁に打ち込み、結界を作る。
やがて、洞窟の奥から、唸り声の主が現れる。
猿だ。しかし、大きい。洞窟の広さ一杯に使ってもなお体が余るようで、にじり寄るように、もぞもぞとアリスたちの方に這いよってくる。全身毛むくじゃらで、土の中を這いまわっていたのか、汚泥にまみれた醜悪なその姿。瞳は赤く輝き、知性の輝きは感じられない。あるのは獣欲だけだろう。アリス達の肢体を狙っているのだろうか。一瞬、この汚らわしい猿公に蹂躙される己の姿を想像してしまって、アリスの体が熱病に浮かされたようにガクガクと震えた。吐き気も酷い。
アリスはぺっ、と込み上げた反吐を吐き捨てる。
化猿は猛々しい牙を剥き、怖気だつ涎を撒き散らしながらアリスたちの方に手を伸ばし、アリスの仕掛けた糸に絡まった。
「気をつけて！　花果山の猿は、仙丹を飲んで怪力を持っています！」
言葉の通り、化猿はアリスの糸を引きちぎって、手を伸ばしてきた。が、途中で躊躇するように、手を中空で止めた。
その隙に、アリスはスカートの中から折畳式のボウガンを取り出すと、矢を番え、化猿へと放った。矢は化猿の瞳に当たり、化猿のけたたましい悲鳴が、狭い洞窟内に響き渡った。
「いけません！　花果山の猿は……！」
「不老不死だってんでしょ。知ってるわ」
アリスはボウガンを連射する。その度、化猿の悲鳴が響き渡る。
そのうち、化猿は動かなくなった。
「どうして……」
衣玖は不思議そうに首を捻った。
「矢に毒を塗っておいたのよ。象も昏倒するような、強力な麻酔薬をね」
アリスはボウガンをスカートの中にしまいながら言った。アリスは、化猿がいる事を予想していたのだ。
「悪いわね、上海。また出番がなかったわ」
胸元の上海は、しかし、満足気に主を見つめていた。

洞窟の外へ目をやると、何時の間にか、雨が止んでいた。
「外へ出ましょう。こんな汚らわしい場所、一秒だって居たくないわ」
アリスと衣玖は、広げた昼食をすぐに片付け、洞窟の外へ出た。
洞窟の外には、輝く太陽が在った。先ほどの嵐が嘘のように、穏やかな風が吹いている。衣服はまだ濡れて不快だったが、さわやかな風は心地よかった。
「上がりましたねぇ」
衣玖は髪を押さえて、涼しい顔をしている。天空の山に、風の中で微笑む美しき天女。全く、妬ましくなるほど絵になる光景だ。
アリスは洞窟の中へ、スカートの内側から取り出した手榴弾を二、三個放り込む。
「ひぇっ！　そんなものまで持っていたんですか！」
慌てて物陰に駆け込む衣玖。もちろんアリスも続く。
ド・ドオン！　と大きい音がして、汚らわしい化猿のいた洞窟の入口が潰れた。
「五百年もすれば、お釈迦様が出してくれるでしょうよ」
アリスも涼しい顔で言う。
衣玖は唖然としていたが、やがてクスクスと鈴が鳴るように笑った。
「面白い方ですね」
アリスは山頂を指差した。
「山頂はもうすぐよ。ここまで来たんだから、ちょっと付き合ったら？」
「ええ」衣玖は輝くような笑顔で。「喜んで」
二人は山頂を目指して歩いた。衣玖もアリスに合わせ、自分の足を使って登った。
険しい道。しかし、傍らの衣玖は顔色を崩さない。
「やっぱり貴女、ムカつくわね。こんな道で、顔色も変えないなんて」
「貴女だって、変わっているように見えませんよ」
「変えないように努力しているだけよ。私はクールなシティ派だからね」

「私も、シティ派ですから」
「ふん、気を使っちゃって。貴女、余計なお世話がお好きなようね。さっきの洞窟の中でだって」
化猿が手を止めたのは、衣玖が風の塊を投げつけたからだ。
「変わってるわ、まったく」
「貴女だって、相当な変わり者じゃなくて？　こんな不自由を、自分で買ってやっているんだから」
「そんなことは無いわ」
アリス達は、山頂へ到着した。
開ける視界。輝きに目を細める、アリスと衣玖。
真白の雲海が、眼下に広がっていた。
太陽の輝きを受けて、白光弾ける雲の波が、風が吹く度、さざめき立つ。遠く、空の青を背に。飛び出せば、何処までも飛んで行けそうな程に。
幻想郷にも、海は在った。美くしく清らかな、純白の海だ。
「綺麗ね……」
「本当に」少し息を弾ませながら、衣玖は言った。「こんな風に雲海を見たのは、初めてです……」
アリスは衣玖を振り返って、ニヤリと笑った。
「不自由も、たまには悪くないでしょう？」
衣玖もニコリと笑った。
衣玖は右手で天を差し、左手を腰に当て、さらに腰を少し撚るポーズを取った。雷光が、衣玖の指先からほとばしり、触発された雲海の雲々の間で、イルミネーションのように、青白い雷光が小さく光った。天女の粋な計らいだろうか。美しく、幻想的で、絵空事のような光景……。
アリスは、ずっと訊ねてみたかったことを、素直に訊いてみた。
「もしかして、そのポーズ。ただカッコイイからやってるだけ？」
「あ、ようやく気づいてくれました？」ほっ、としたような顔で言う衣玖。「反応悪いから、ウケてないのかと思って不安でしたよ」
アリスは、声を上げて笑った。

「……けれど貴女」アリスは笑いながら、意地悪く言った「殿方には、モテないでしょう？」
　途端、衣玖は腐った。
「実は……、そうなんですよ。何故なんでしょうか……？」
「そりゃ貴女、殿方のやるべき事を全部自分でやっちゃってるんだから、当然じゃないの」
「ええっ、そ、そうなんですか？」
「きっと、女にだったらモテるわよ。いっそ男になれば？」
「ううん……永遠亭に行って、噂の薬を処方してもらったほうがいいんでしょうか……」何時になく真剣な顔で、衣玖は言う。「でも私、オムコさんより、オヨメさんになりたいんです！」
　アリスは腹を抱え、呼吸困難になって涙が出るほど、笑い転げた。こんなに笑ったのは久しぶりだった。
「もうっ、ホントにムカつくわね！」涙を拭い、ひぃーひぃー悲鳴を上げながら。「そんなんじゃ私、貴女のこと、嫌いになれないじゃないの」
「いや、ごめんなさい」ペコリと頭を下げる衣玖。「お気持ちは嬉しいんですが、やっぱり私、そのケはないです！」
「私だって無いわよ！」
　二人、顔を見合わせて笑い転げる。
　ひとしきり笑いあって、腹が痛くなった頃、ふと山陰に目をやった衣玖が声を上げた。
「あら？　何かしら、あれ」
　指差した先。
　山頂にぽつりと、古びた小さな社が、寂しげに佇んでいた。
「あんなの在ったかしら？　人間がここまで来れるはずはないですし、天界の人間が、こんなところに社を作るとも思えませんが……」
　アリスと衣玖は、その社に近寄ってみる。
「まあ、博霊の紋章だわ。霊夢さん、案外マメなんですね。天界にも社を建てていらっしゃったとは」
　アリスは小さな祭壇の扉を開いて、中から一振りの儀礼刀を取り出

した。
「御神刀ですか。あれっ、その赤いものは……」
衣玖が追求する前に、アリスはそれを、懐に隠した。
「これは、私が霊夢に渡しておくわ。ちゃんと手入れしとけって、注意しておく」
「はぁ。そう、ですか」
衣玖は首を捻ったが、アリスが背を向けると、それ以上、何も聞かなかった。

「私のホワイト・ラビット」

「おや」
　白い月光の中。驚いたように、因幡てゐが顔を上げた。
「あんたはたしか、姫様の茶飲み友達の」
「アリスよ。人形使いの、アリス・マーガトロイド」
　アリスはスカートの裾をつまみ、ワルツを踊るように、優雅に礼をした。傍に侍る上海も、ぎこちなくアリスの真似をする。近頃の上海は、すぐにアリスの真似をしたがる。もっと自立心を持ってもらいたいものだが。
「これはご丁寧に、どうもウサ」
　てゐは手にしていた砧を地面に突き立て、アリスと同じようにして返した。完璧な所作だ。一分の隙も無い。アリスを真似ただけでは、こうも滑らかには出来ない。因幡てゐには、明らかに教養が有った。
「珍しいウサね。私に何か用ウサか？」
「いや……」
　アリスが口籠ると、てゐはいたずらっぽく笑った。
「ははぁん。さては、てゐ達が搗いたお餅が目当てウサね？」
　ぺったんぺったん。
　迷いの竹林の中にある、広場の一角。てゐの周りには沢山の妖怪兎が集まり、餅つきをしていた。
「一つ搗いてはダイコクさま～、二つ搗いてはダイコクさま～」
　闇空の下、妙な歌を歌いながら。
　アリスは首を振った。
「いいえ。残念だけど、朝食は済ませてきたの」
「それは残念ウサね。てゐたちのお餅は美味しいのにな～」
　ニヤニヤと笑うてゐ。しかし。
「おや。それじゃあなんでまた。貴女はここにいらっしゃるウサ？」
　てゐはアリスの方へ視線を投げかける。
　疑うような、楽しむような、何も考えていないような。その小さい体からはにわかに想像しがたい、重く、刺さるような視線だ。

このあどけない仔ウサギは、その実、アリスの何十、何百、何千、何万倍と生きて、その身に業を背負い続けているのである。纏った白毛とは裏腹に、抱える闇は暗く、深い。因幡てゐ。白面の夕闇。実を為す虚構。輝く紅蓮の双眸に射られ、蛇を前にした蛙のように、身が竦んで動けなくなってしまう。わなわなと震えだす体を必死に抑えて、アリスは平静を取り繕った。ひととき呼吸を忘れるほど、夢中に。

「それじゃあ」てゐの視線が外れる。アリスはほぅと息を吐いた。「迷子ウサか？」

問われて、アリスは逡巡した。

「――ええ。ええ、そう。そうね。迷子よ」

強がるように、アリスは笑った。

「ふーん？」

てゐは訝しげに眉を寄せるが、ついと指を突き出して言った。

「妖怪のあんたに幸運はあげられないけど、出口なら教えてあげられるウサ。来た道を引っ返しなさいな」

唇を噛む。少しの間、アリスは俯いていた。

やがて顔を上げると、礼を言って、てゐに背を向けた。先に続く道は、闇に飲まれて見えない。それでも、アリスは一歩踏み出して行った。てゐはアリスの背の向こう側で、首を捻っていることだろう。

迷いの竹林の中。アリスはてゐの指差した方角へ、歩き続けた。

朧げな月明かりだけを頼りに。

どこまでも同じ景色の中。どこまでも続く竹林の迷宮を、手探りで歩く。先も見えない。出口も分からない。帰るべき場所も見つからない。ここは幻想郷の縮図だ。

息も荒く。

足も重く。

心は鉛のように。

「なぜ私はここにいるのだろう……」

思わず独り言ちた――しかし、アリスの問い掛けは虚しく空に消える運命にあるのだろう、答える者も無く。たった一人の嘆きで埋め尽くすには、この空は広すぎる。

竹林が嘲笑する。ざわざわ、ざわざわと葉を擦り、その身を逸らし。大地に根を張る彼らからすれば、根無し草のアリスの苦悩は分からない。ただ手を叩き、他者の悶え苦しむ姿を肴に、今宵も夜を明かすのだろう。ここは、地獄に相違ない。

慰めるように、上海はアリスの肩にしがみついてその体重を預けた。

私がいる、上海はそう言っている。

「そうね……上海」

勇気をもらったアリスは、博麗の儀礼刀を抜き払った。

妖しく光る『もう一つの月』の輝きを受け、白刃が赤く濁った光を放った。

オオ……おめくように、畏れるように、竹林共は騒ぎ出す。幻想郷の有象無象にとって、博麗とは正に神に等しい力であり、世界そのものである。博麗大結界とはそういうものなのだ。

「怖ろしいか。だが私は……」白刃の輝きを、鞘に収める。「それを畏れることのほうが怖ろしい」

アリスは再び歩みを始める。

竹林の有象無象はアリスを嫌うように、ざらざらとした向かい風を吹かせる。逆風が頬を打ち、アリスのスカートが翻った。四面楚歌……惰眠を貪る者達にとって、アリスという探索者の存在は邪魔なのだ。もしも、同じ立場なら。アリスもそうするだろう。それが正しいのだとも思う。それでもアリスは、歩みを止めるつもりはなかった。

彼女はきっと、こんな私の姿を見ているのだろう。嗤っているのだろう。

彼女……八雲紫によって作られたこの世界は、幻想を日常に変え、日常を幻想に変える。それは、人間が妖怪になり、妖怪が人間になることを意味する。幻想郷にある限り、両者はいずれ融け合い、混ざり合う運命。その末に生まれるもの……それはきっと、在り方を誤ったものだ。八雲紫はそれを止めたがっているのだろう。この儀礼刀は……博霊の巫女の血は、そのためのものなのだ。

ふと、竹林は途絶え、靄に包まれた、小さな広場に出た。

何処に出たのかと周り見渡していると、脇から声が掛けられる。
「おや。また来たウサか」
靄が晴れると、因幡てゐの屈託の無い笑顔がそこにあった。
「三つ搗いてはカグヤさま～四つ搗いてはエイリンさま～」
ぺったん、ぺったん。兎の餅つきも元気よく。
「貴女達……」
竹林に嫌われた挙句、元の場所に引き戻されてしまったらしい。
「なんだか、疲れたわ……」
アリスはドッと疲れが出て、手近な木の幹に腰を下ろした。
「なんだい、若いのに、だらしないウサねぇ」
ころころと笑うてゐ。ちょこん、とアリスの隣に腰を下ろした。
「どうしたウサか？」
「――なんでもないわ」
「嘘ウサね。嘘はてゐの専売特許ウサよ。そんな幼稚な嘘は、まるっとお見通しウサ」
てゐは、アリスの顔をのぞき込んだ。
紅蓮の瞳。しかし、先ほどのような重さはなかった。アリスを包み込むように、優しい光を放っていた。
「困ったことがあったら、お姉さんに言ってみるウサよ」
上海が、背中を押した。アリスは、意を決した。
「それじゃあ一つだけ、質問があるわ」
「何ウサか？」
アリスは、てゐの瞳を見据えて言った。
「ここには、博麗の社はあるのかしら」
「博麗？　何をボケているウサか、博麗神社は……」
てゐは言葉を切った。博麗の儀礼刀が目に入ったのだ、アリスの手の中の。
アリスは繰り返す。
「――博麗の社は、あるのかしら」
「嗚呼、此処にも無謀なる者がまた一人……」てゐは悲しげに首を振り、背を向けた。「止めておくウサ。それに関わったところで、碌なこ

とにならないウサ」
　嘆くてゐの背に言葉を突き立てる。
「やはり貴女は、賢者達の内の一人なのね」
「賢者？」てゐはしかし鼻で笑った。「あいつら、今はそう名乗ってるウサか。八雲紫の太鼓持ちの癖に。救いようもない連中ウサ。話題にする価値も無いウサよ。本当の智者はほんの一握り……あの畏れるべき向日葵の妖怪か、白玉楼の亡霊姫くらいだろうに」
「そう……やはりね」
　てゐは振り返り、アリスを責めるように言う。
「今すぐそれを捨てて、帰るがいいウサ」
「帰るべき場所など、此処には無い。既に私は、後戻りできない」
「馬鹿なことを言うんじゃないウサ！」
　突然、てゐは強い口調で言った。
「貴女はまだ若い。生きている限り、やり直せないなんてことは無いウサ。さ、それを渡すウサ。てゐがしかるべき場所に返しておくウサ」
　てゐは強い目をして、アリスに手の平を差し出す。
「――違うのよ」
　アリスは首を振る。
「私は最初から……、違うの。私は、迷子なのよ」
　てゐはその意味に気づいたのか、その視線は憐れみに変わった。
「そうか。貴女は……」
　お互い、言葉を失う。
　てゐは、頭を優しく撫ぜてくれた。慟哭するアリスを、そっと抱きしめて。
「おうちに、帰りたいウサね」
　頷く。
　アリスの、その蝋人形のような頬に、ポロポロと大粒の涙が伝い、てゐの胸を濡らした。てゐもまた、震えていた。
「酷なようだが、帰っても、きっと碌なことにはならないウサ」てゐの声は、凛としていた。「過去に道は無い。ただ歩いてきた人生がある

だけ……喜びも哀しみも救いも、未来にしかないものウサよ」
「それでも私は……もう一度、戻りたいの」震える声を絞り出す。「父さん達のいた、あの家に……」
「そう……そうだよね……」
てゐの温もりが、懐かしき日々を思い出させ、ただ、涙が流れた。
「――てゐは」
アリスの青い瞳を見つめて、紅蓮の双眸が瞬いた。その炎の奥……喜、怒、哀、楽、憎、怖、あらゆる感情、あらゆる業を超えてきた闇の先に、今なお灯る情熱の炎。幾億の夜を超えて。今もまだ、若々しく。因幡てゐは、強かった。アリスはその生き方を素直に尊敬し、畏れた。
「てゐは、貴女の白兎になってあげることは、できないウサ」
てゐは悲しげに言うが、アリスは嬉しかった。
「優しいのね」
心から、そう思う。
「既に幻想になってしまった貴女に、幸運はあげられないウサ……けど、人間だった頃の貴女になら」
てゐは、首にぶら下げた人参の首飾りを外し、アリスの首に掛けた。
「貴方に、幸あれ」
てゐの満面の笑み。自然と、アリスも笑顔になった。
「てゐ～？　何してるの～？　さぼるな―！」
餅つき場の方で、長いうさぎ耳を持った少女が手を振る。
「わかってるウサ！　今行くウサよ―！」
まったく鈴仙はやかましいウサ。てゐは愚痴をこぼしつつ立ち上がり、手を差し伸べた。
差し伸べた手を取って、アリスも立ち上がる。
また、靄が出てきた。
「貴女の着眼点は中々、的を射ているウサ。今代の巫女、博麗霊夢は、非常に『上手くやっている』。貴女が求めるものは、その先にあるかもしれないウサ」
つい、とてゐの指が博麗の儀礼刀を差す。

「それを上手く使うウサ。それは賢者共のアキレス腱ウサ。でもそれだけじゃ、きっと足りない。例え八雲紫でさえも、貴女の望みは叶えられないウサ」
「そう……か。私には、新しい白兎が必要なのね」
　てゐはコクリと頷く。
「時を待つウサ。必ずいつか、風は吹く。待てば海路の日和ありウサ。生きていればきっと、いいことあるウサよ」
　励ますように、てゐは言う。
「ありがとう」
　思えば、心の底からこの言葉を言ったのは、今が初めてかもしれない。
「てゐ～？　いい加減にしろー！」
　うす靄の向こう側で、優曇華院が手を振る。
「じゃあ、てゐは行くウサ。また泣きたくなったら、ここへ来るといいウサ」
　いたずらっぽく、てゐが笑う。
「ええ。その時はまた、胸を貸して頂くわ」
　走って行くてゐの後ろ姿、その丸くて白いふわふわの尻尾が、いつまでもアリスの目に焼きついた。
　上海は、アリスの胸元に寄って、人参のペンダントを羨ましげに見つめている。
「駄目よ、これは私の、幸運のお守りなんだから」
　ペンダントを手にとってみる。不思議と、力が湧いてくるような気がした。
　てゐが私のホワイト・ラビットだったら良かったのに……。そう、アリスは思った。
「死に急ぐつもりは無い。――私は必ず、この幻想の中から抜け出すわ」
　天上の月は、煌々と光を放っていた。

美しきもの

神霊廟への入り口は、博麗神社の敷地内にある。

「次から通行料取るから」

今代の博麗の巫女、博麗霊夢は、いかにも面倒臭そうに境内を歩いて行った。アリスは黙って従う。ゴツゴツとした石畳は、それでも手入れはされているのだろうか、割りと小奇麗であった。暇を持て余した霊夢が、いつも隅々まで掃除しているのだろう。巫女というより、掃除婦のようである。

「諭吉だかんね、諭吉。五枚だから。まかんないわよ」

相変わらずの業突く張りである。差し入れてやった紅茶葉の存在をすっかり忘れていると見える。それとも、緑茶派の霊夢には喜ばしくない贈り物だったのだろうか。こんなことなら、衣玖にくれてやればよかった。

「時々居るのよねぇ。あんたみたいに、神霊廟に行きたいって奴がさ」

霊夢はポンと手を打つ。「あ。観光名所として売りだしてみるのもいいかもなぁ。仙人生活、一日体験ツアーとか。仙人饅頭とか、仙人煎餅とか、銘酒『仙人』とか、作れば売れるかしら。布都とか屠自古とかのアホ共は、見てるだけで面白いから、漫才でも演らせれば客入るかも。青蛾と芳佳には邪魔されない様に賄賂でも渡しておけば……」

何を言っているのだ、この巫女は。

馬鹿の話に付き合っているとこちらまで馬鹿になりそうなので、霊夢が空に向かって皮算用を語る間、アリスは黙然としていた。秋空の下、神社を囲う、赤く色付く木々が誠に美しい。ここは人寂れた神社だが、風景は誇るべきものがある。変わった巫女と四季の風景が、この神社の醍醐味である。

「しかし、あんたも物好きねぇ。あんな変人のところに行きたがるなんてさぁ」

妄想を語り終えた後、霊夢は振り返って言った。

「仙術というものに興味があるのよ」

嘘ではなかった。いやそれこそ、核心と言っても過言ではない。

博麗大結界の隙間を縫って、神霊廟という異物を創りだした、豊聡耳神子の仙術。隙間妖怪の隙間を狙うなど、そこいらの有象無象には思いつきもしないだろう。この幻想郷で唯一それをやってのけた、豊聡耳神子……その人とその術とに、自身が求めるものの一端があるような気がして。

アリスに必要なものは新しい『白兎』だ。そう因幡てゐは言った。

アリスは、豊聡耳神子その人が、自分の新たなホワイト・ラビットではないかと考えたのだ。

「仙術て、不老不死の薬とか言って、水銀とか食むやつでしょ。あんな胡散臭いの信じてるの？　ばっかみたい。あんたにしては低俗だわねぇ」

生来整ったその刃のような面をゆるりと弛緩させ、あっけらかんと言う霊夢。考えるより先に口が動いたという感じだ。きっと悪意は微塵も無いのだろう。

この霊夢……天衣無縫が服を着て歩いているようなものだ。カラッとした晴天の様な口調で語られると、胸の悪くなる様な悪言も、涼やかなる初夏の微風となる。同じく不思議な人間である霧雨魔理沙ともまた違った、爽やかな魅力を持った人間である。例えるなら、そう。空を渡るつばめの様に自由な女だ。

「何事も体験しなければ語れないわ。その貴賤も、その是非も」

アリスは静かに言うが、赤いつばめはにべもなく。

「是も非も無いわよ。変なものは変じゃない」

一刀両断。まるで自分が幻想郷の価値観の基準だとでも言わんばかりである。その傲慢も、最早心地良いとさえ言える。

「あたしも華仙の奴にやらされた事があるけど、もう懲り懲りだぁね」

「何よ、個人的な怨みを言ってるだけじゃない」

「怨み、結構じゃない」

女は感情で動く生物だと言うが、この霊夢は、正しく女だった。

「ま、いいわ。ほら、ここよ」

霊夢が指差した先を見ると、なるほど、石畳の一部に四角い亀裂が入り、青く変色している部分が在った。丁度、人一人が通れるくらい

の大きさだ。身を屈め、亀裂に指を掛けて力を込めると、石畳の一部は蓋の様に開き、中から黄金色の光が溢れ出した。
覗いてみると、下は別世界だった。
眼下に広がる世界には、緑青々と萌え、胡蝶は舞い、野ネズミが駆ける草原が広がっていた。草原を横切るように小さな川がさらさらと流れ、素朴な木造の橋が架かっているのが見える。どこからか陽光が降り注いでいるのか、水は陽を反射してキラキラと輝いている。ふと、何かが横切った。鳥だ。目で追ってみると、見たこともない極彩色の鳥が優雅に飛び去って行く後ろ姿があった。その飛び去って行く先には小高い山があり、その向こうには青空まで見える。山紫水明、全てに色が濃い。
「これが神霊廟……？」
想像していた無骨で殺風景な仙人の修験場とは違い、あまりにも長閑で美しい風景に、思わず疑問符をあげてしまう。しかし、この幻想郷に似合わぬ牧歌的な世界を創りだした神子の力、確かにそれを実感する事ができた。
アリスは立ち上がり、霊夢を振り返った。
「行ってくるわ」
「お土産ヨロシク」
霊夢は相変わらず締まりのない顔で、この上さらに物を強請った。アリスは苦言を呈する気力も無く、ただ溜息を吐いた。
「――仙人饅頭とかでいい？」
「金目の物をば」
「強盗に行くんじゃないんだから」
苦笑しつつ。
スカートを押さえ、穴の中へ飛び込む。
何だか、懐かしい思いがする。あの時とは違い、白兎の背は見えない。あの時とは違い、アリスはもう子どもではない。あの時とは違い、今は空だって飛べるのだ。
がらんとした霊堂の中、アリスは一脚の椅子を勧められた。辞する理由も無いので、素直に席に着く。

「しばし待たれよ。今、太子様を呼んで来るのでな」
物部布都はそう言って部屋を出て行った。
霊堂の中は薄暗い。ロウソクやランプの類は少なく、自然光を主な光源としているようだが、それにしては窓が小さいからだ。朱を基調とする見慣れない模様が描かれた壁は、この薄暗さの中では少し不気味だった。文化の違いなのかもしれない。
目を巡らせると、珍しい調度品の数々が、部屋のあちらこちらに分けて展示してあるのが見える。幼児の頭ほどもある翡翠の原石、煌めく宝石で飾られた宝剣、神獣が彫られた銅鏡。いかにも古代の豪族の趣味と言った感じだ。その中で、「もののべふと作」と説明書きのある、犬やら猫やら分からない形をした不細工な粘土細工が、一際異彩を放っている。何だか微笑ましい。不気味な部屋の中にあっては清涼剤の如く、一気に親近感が湧いた。
見上げると、天井画が描いてあった。後光を背負い、紫雲に乗り、ミミズクを頭に乗せた凛々しい女性。……いや、あれは髪か。つまり、豊郷耳神子、その人である。手に笏、腰に七星の剣を佩き、半眼を地上に向けている。その視線の先には、救いを求める民の無数の手が群れていた。アリスには、いささか悪趣味なように思えるが、宗教家にとっては普通なのだろうか。
大きく開いた霊堂の入り口からは、神霊廟の境内が見える。
廟内に着いてまず驚いたのは、その人の多さだった。老若男女問わず、無数の人々が境内に集まり、神子の姿を一目見ようと本堂にひしめいているのだ。修行装の人間もかなりの数がおり、境内の掃除や参拝者の誘導など、神霊廟内の雑事を処理しているようだ。時間帯による一時的なものなのだろうが、その賑わいは人間の里の目抜き通りに引けを取らない。
神霊廟の造りは大陸文化の影響を強く受けており、神子が生きていた当時の風俗を想起させる。外周は城壁に囲まれ、さながら小さな城塞都市のようである。街路は碁盤の目状に規則正しく整備され、往来を牛車がゆったりと行き来していた。修験者や支持者の住処だろうか、街路に沿って沢山の住居も立ち並ぶ。神霊廟内部には、博麗神社

から見えた小川が引き込まれているようで、川縁で釣りをする老人なども見られた。さらには城壁内に小さな山まであり、あの極彩色の鳥の住処となっているようだ。
豊かな自然、外敵からの守護、そして神子という巨大な精神的支柱。ここは此処だけで完結している場所だ。人が生きて行くのに、他のものなど必要ない。幻想郷の中にあって、ここは独立国家の様相を呈していた。恐るべき、この完成度。一朝一夕で造りあげられるものでは決してない。何処からか持って来たものか、もしくは、神子がアリスの想像を超える化け物なのかのどちらかだろう。
不意に、後ろから頭を抱き抱えられた。
「きゃっ！」
反射的に悲鳴を上げてしまう。
頭の後ろに、何か柔らかいものが二つ、押し付けられるのを感じた。
「待たせたね」
女性の声だ。
ということは。頭に押し付けられたものを想像して、アリスは身震いした。
あわてて振り解き、無礼を働いた相手に対峙する。
後光を背負っても、紫雲に乗ってもいないが、天井画の中から抜け出てきたような人物がそこにいた。
翼を広げたミミズクのように優雅にふわりと広がる髪。切れ長の目に、白く透き通る肌をした美しい女性。ひと目で上等だと分かる衣をさり気なく着こなしている。腰帯には、高価だろうが主張しない玉を嵌め込み、その帯に差された名だたる七星剣が、燦然と輝いている。玉光が弾けるような笑顔を浮かべて、アリスを見つめているその目は、いたずらな猫のように、キラキラと輝いている。天井画と違うのは、妙なヘッドフォンを付けていることだ。
想像していたような威圧感やオーラのようなものは感じず、むしろ神子の姿に自分が嫌悪感を催していることに、アリスは少し驚いていた。もちろん、先程の神子の所業の所為だ。
「君がアリス・マーガトロイドかい。ようこそ、神霊廟へ」

その牡丹のような口を開いて、朗らかに神子は言った。
「何の真似かしら」
乱れた髪を直しながら、アリスは敵意をもって神子を睨んだ。
傍らの上海が、神子とアリスの間に陣取って仁王立ちする。主人を守ろうというのだろうか。いいぞ、上海、かっこいい。
「おや。私の歓迎はお気に召さなかったかな？」
「いい気分ではないわね」
「そうかね。喜んでくれると思ったんだけどな」
神子はつまらなさそうに口を窄めた。本気で言っているのだとしたら、お目出度い奴だ。
「喜ぶわけないでしょう。デリカシーがなさすぎるんじゃなくて？」
「どうして？　君は私の寵姫になりに来たんだろう？」
「――寵姫？」
一瞬、アリスはポカンとしてしまった。
本当に何を言ってるんだ、こいつは。
「寵姫って。あんただって女じゃないのよ」
アリスの問いに、神子はその薄い胸を張って答えた。
「大丈夫。私はどっちもイケる口だ！」
うわっ……、と声を漏らして、アリスは一歩引いた。先ほどの威勢もどこへやら、上海も怯えて、アリスの胸元に帰ってきてしまった。
昔の豪族は同性愛など日常茶飯事だと聞いたことはあったが……。他の国、他の時代の文化を云々する気はないが、正直、気持ち悪いと思うアリスだった。
「なぜ引くのかね」
「生憎、私は片方しかいけない口なんでね。それ以上近づかないでくださる？」
「なんだ、君は寵姫になりに来たのではないのか」
神子は残念そうに首を振った。
「君のように美しい人なら大歓迎だったのになぁ。片時も離さず、朝から晩まで毎日愛してやったものを。残念だな」
「だから近づかないでってば」

差し出された神子の手を払った。
アリスの中で、聖人のイメージがガラガラと音を立てて崩れてゆく……。
「それじゃあ君は一体、何の用があって私に会いに来たんだ？」
神子は不思議そうに聞いた。
アリスは正直に言った。
「この神霊廟を作った仙術について、教えてもらおうと思って」
「――なるほどな」神子は椅子を引いて、無造作に座った。「まあ、掛け給え」
手で席を示す。アリスも黙って神子の向かいの席についた。
「七色の魔法使い殿は、仙術に興味があると。魔法使いから仙人に転向する気かね？」
机の上に両肘を突き、その手の上に自分の顎を乗せ、神子は馴れ馴れしくアリスに顔を近づける。吐き気を覚えたアリスは、椅子を引いて少し距離を置いた。
「そんなつもりは毛頭無いわ」
お前のせいで仙人のイメージ最悪だしな、とは流石に言わなかった。
「そうだろう。何故なら、君は既に不老不死の魔法使いだからな。仙術の目指す最高を、君は既に手に入れている」コツコツ、とヘッドフォンを叩きながら、神子は言う。「私が分からないのはそれなんだ。古今東西、人々の求めるものと言ったら、それしか無いはずなのだよ。私の時代でもそうだった。西は羅馬から東は我が国、果ては大洋の向こうの大陸まで。それを求めない人間などいないはずなのだよ」
「死ぬのは、怖いですからね」
神子は頷く。
「まさにそうだ。死ぬのは怖い。それは生物としての基本的な欲求だろう。だからこそ、人はそれを克服する力を求めるものなのだよ。しかし……」
神子は瞑目した。その美しい面が能面が如く闇の中に浮かび、神子の体が抜け殻のように色を失くした。

「それを満たされた人間は、一体どうなるのだろうか」
アリスの目の前で、それは突然に起こった。
神子に光背が現れたのだ。
抜け殻の後ろに現れた光背は、威圧とも慈愛とも違う、まさに威厳ともいうべき迫力を見るものに与えた。揺らめく光は、神子の感情を象徴するかのように、色を失くした神子の代わりに、荒々しく周囲へ迸る。一筋、伸びた光に巻き抱かれ、アリスの視界が輝きで満たされてゆく。
アリスは、息を飲んだ。
「そのとき人は、幻想になるのだろうか。幻想になった人は、果たして人なのだろうか。人は幻想になったとしても、なお何かを願うものなのだろうか……」
上海には見えていないのだろうか。目を見開いて身動きできないでいるアリスを、心配そうに見上げている。
直感した。このままでは、神子に取り込まれると。神子の胸に抱かれたが最後、二度とそこから抜け出せなくなる。先刻から抱いていた嫌悪感の正体を、ようやくアリスは悟った。
だから。渾身の力を振り絞って、言葉を紡いだ。
「――迂遠な方ね。お聞きになりたいことがあるのなら、そうなされば よろしいでしょう」
かすれた声でそう言うと、神子は半眼を開いた。途端、光背は消え去り、アリスは肩で大きく息をした。
「いや、すまない。私の自問などはどうでもよいことだったな」
何事もなかったかのように、神子は涼し気な顔をしている。
アリスは取り繕うように溜め息を吐いたが、きっと顔は引きつっていたことだろう。
「――知よ」
アリスが強がって言ったとき、神子はきょとんとしていた。
「人間が幻想になってなお欲するもの。それは知に他ならないわ」
「なるほど。だから君は、ここに来たということかい」
はっはっは。神子は声を上げて笑った。

「永遠に生き続けてあらゆる知を貯めこみつづけるとは。君たち魔法使いは、もはや人間とは言えないな」
　その言葉にムッ、とするほどには、アリスの自我は回復していた。
「それなら私たちは、一体、何だと言うのかしら」
「そういうものを差す言葉を、君も私も彼も彼女も、いや生きとし生けるもの全てが知っているだろう」
　神子はアリスに指を突きつける。
「神だ」
　責めるように突き立てられた指先を見つめながら、アリスは震える声で応えた。
「――私は、それほど傲慢ではないわ」
　神子は笑って、突きつけた指をぐるりと巡らせ、霊堂の入り口の方へ向けた。
「外へ出よう」
　粗末な牛車に揺られながら、ゆっくりと神霊廟の大路を行く。
　道行く人々は地に平伏し、神子が乗った牛車に向かって手を合わせていた。
　神霊廟の中では、豊聡耳神子は正に神であった。
　その神はと言うと、隣で青ざめた顔をしている。
「どうしたのよ？」
「う、うむ……。実はこの牛車というもの、昔から苦手でね……。どうにも気分が悪くなってしまうんだよ」
　……どうやら乗り物酔いをしたらしい。怖ろしいのか、それともただの変態の阿呆なのか、区別がつきにくい奴である。
「酔のツボでも押してみる？　手首の関節中央から、肘の方向に一寸あたりがそうらしいわよ」
「そんなことをせずとも、君が膝枕してくれれば、すぐにでも回復するんだが」
「それをしたら、今度は私が吐きそうになっちゃうから駄目よ」
　牛車は悠然と、美しく整備された質素な街路を行く。傅く人々の群れ。これは畏れの、信仰の道だ。もしお姫様にでもなったら、このよ

うな気分なのだろうか。しかしこれは、清々しいというよりは、どこか苦々しい。
「気になるのかい？　どうやってこの神霊廟を作り上げたのか」
　青ざめた顔の神子が、息も絶え絶え聞く。
「それもあるわね」
　アリスの興味は、既に別に移っていた。
「仙人の技を教えることは出来ない。一朝一夕で学べるものではないからね。習得したければ、道教を信仰する他ないだろう」
「そう言うと思ったわ」
　ガタゴト、ガタゴト。牛車は走る。
　小高い山の脇を通りぬけ。
　簡素な橋を超え。
　やがて城壁へとやって来た。
「少し風に当たらせてもらいたい……」
　牛車を降りると、神子はフラフラしながら、階段の方へと向かって行った。
　石造りの階段を登る神子の背を追い、アリスも登った。
　城壁はどのくらいの高さがあるのだろうか。二十間ほどの高さがあるようにも思える。壮大な高さだ。一体、いかなる外敵を想定して造ったのだろうか。しかし確かに、神子の威容にこの外壁があれば、神霊廟を害そうなどと並の妖怪は考えないだろう。
　城壁の階段は真新しく、ここが造られて時間が建っていないことを示している。壁に目をやると、一定の間隔で縦横に筋が走り、固く締まった土砂が敷き詰められている。魔法の森の遺跡、あの古城でも見た、版築だ。
　神子は階段を登り終える頃には回復していたようで、アリスが上に着いたときは、元の涼しい顔をしていた。
「神霊廟を創った仙術が知りたいのだろう？　教えてあげよう」
　訝しんで、アリスは訊いた。
「でも、さっき、教えられないって……」
「ご覧」

神子は指差す。
導きに沿って、神霊廟内を見渡してみる。
規則正しく整った美しい町並みが見て取れる。
「美しいと街だと思うかい？」
「そりゃあもう」
しかし神子は言い放った。
「私は思わない」
「何故？　こんなにも完璧に出来上がった街を、私は他に知らないわ」
アリスは神子の美意識を疑ったが、神子は爽やかに笑って応えた。
「それ以上に美しいものを、私は知っているからさ」
神子は笏を構え、祈るように目を閉じた。。
「ここを創るとき。幻想郷の隙間に居場所を造った私は、まず地に線を引いて、付き従う人々に示した。風水に従わなければ、地の神のご機嫌を損ねてしまうからね。郷に入りては郷に従えという。これはその土地に暮らす人、そして暮らしていた人々の心、歴史を尊重することを言うのだ。そして私は、風雨に強い家の建て方を、丈夫な橋の掛け方を、高い城壁の作り方を教えた。私がしたのは、それだけだ」
神子は静かに、淡々と話した。
「馬鹿な」からわれていると思い、アリスは声を荒らげた。「ならばどうやって、この神霊廟を創った。わずかの間でこれだけの都市を築けるはずがない」
「だが、出来た。理解できないかね？　それでも、出来たんだ。人間が、ここを創ったんだよ」
アリスはもう一度、神霊廟を見渡した。城壁に手をやり、乗り出すようにして。
あの霊堂も。
人々の賑わう荘厳な本堂も。
縦横に走る街路に、林立する家々も。
あの小川に掛かる橋だって。
あれもこれも全て、か弱き人間の手で造られたというのだろうか？
「見なさい」

神子は笏で大路を行く小さな人影を差す。
「薪を背負う青年が見えるだろう。彼は与作と言う。老いた母や妻子を養い、よく働き、よく信仰する。立派な青年だ」神子はまた別のところを指差す。「次はあの老人を見給え。あの者の名は源次郎と言い、石工を務めている。既に一線を退いた身ながら、今でも城壁の修復工事に従事してくれている。彼の仕事ぶりは繊細で、恐ろしく早い。またあれを見給え。あの少女は名を壱といい、女性ながら勉学を志し、昼は人里の寺子屋に通い、夜は僅かな蝋燭の明かりで勉学に励んでいる。詩歌の才能があるのだが、本人は医師になると言って聞かない」
神子は次々に人を指し、その名と人となりと美点を挙げていった。
次を、また次を。
大路をゆく人々全てを示さんばかりである。
アリスは言葉を失っていた。
一体、神子の小さな頭の中には、何人の人間の顔を名前が詰まっているのだろうか。
「この世で最強の力は、仙術だろうか。はたまた、貴女が嗜む魔術だろうか。それとも大山に住むという神の力か？　もしくは名高い鬼の剛力？　まさか、彼岸の裁判官達の権力か？　あるいは月に住むという者達の科学力か？　それともやはり、あの八雲紫の力なのだろうか」神子は首を振る。「私はそうは思わない。例えどんな力を持ってしても、人々のこの営みには勝てはしない。この美しさは不滅である。見給え。くわ持ち大地を耕す人々の勇姿を。例え、悠久の時の流れの果てにも。見給え。日々を懸命生きる人々のひたむきさを。例え、宇宙が滅びようとも。ここにそれが在った、その事実だけは決して変わらない。こんなにも美しい力が、人間にはあるのだ。和をもって尊しとなす。その時、人々の営みは、何者にも勝る美になるのだよ。人は……強い」
三度、アリスは神霊廟を見渡した。
今は、神霊廟の人々の顔までも見えるよう。みな生き生きとして、日々を暮らしている。

そこに、途方も無い力を感じた。
幾千、幾万もの人間の寄せる思い、願い、信仰……それは、たった一人の人間には重く、熱すぎる力だ。
「貴女は……」アリスは、畏れを抱いて神子を見た。「どうして、こんなにも大きな力を受けて、平気でいられるの……」
神子は、笑った。
「幻想の住人にも望みはある。貴女が知を求めるように。私は、ただ人々の求める声に応えるばかりである。人間をやめて、幻想になっても。……いや。そのために私は、幻想に成ったのだ」
青空の下。
太陽の下。
神子の背には、はっきりと後光が差していた。
確かに、神子は聖人だった。人々の祈りを受けて、人を超えたのだ。
「まいったわね……。とても、敵わないわ」
アリスは頭を垂れた。
「知を得た魔法使いは、やがて神になるのだろう。しかし私は、そうは願わない。君と私の違いは、そんなところにあるのだろう。もちろん私も、神の如き力は欲しいがね。それだけ人々の生活が豊かになるというものさ」
人を導き、食わせ、生かす。神子の思想は、徹頭徹尾それしかない。神子は純粋に為政者だった。
「認めるわ。貴女はたしかに、聖人だわ」
アリスは頭を垂れたまま、言った。
「では、寵姫になるかね？」
「――訂正する。貴女はたしかに聖人で、変態だわ」
はっはっは、と偉そうに神子は笑った。
「そうか。私は君の白兎にはなれないか」
驚いて神子を見ると、神子はヘッドフォンをコツコツと叩いていた。
そういえば、豊聡耳神子は欲を見る能力を持っていたのだ。神子は最初から、アリスの目的を知っていた。最初から最後まで、からかわ

れていたのだ。
「嫌な奴」
苦々しげにアリスは言う。
「そうでもない。私は親切だよ。特に寵姫にはね」
「あ、そっちは本気なの……？」
「もちろん。君のような美人はいつでも大歓迎だからね」
やはりアリスは、一歩下がって。
「貴女は、私の白兎じゃなさそうね。貴女は大きすぎる。私一人じゃ、追いかけ切きれないわ。貴女はもっと多くの人の白兎だ」
「そうありたいと思っている」
さらりと答える神子。
涼しい顔が小憎らしい。
手玉に取られたこともあり、なんだか頭に来たアリスは、神子に意地悪をしてやりたくなった。
「さすがは、外の世界でも有名人さんだわね」
「ほう、そうなのかい」神子はころころと笑った。「まあ、私も色々と伝説を残したつもりだからな。今でも信仰があるのはいいことだ」
上機嫌の神子に、アリスは一枚の紙片を渡した。魔理沙の蒐集品から、弾幕勝負の掛け金として拝借したものだ。無縁塚で拾ってきたと言う。
「おや？　……誰だい、これは」
紙片を覗きこんで、神子は首を捻った。
「その人、どう思う？」
意地悪く、アリスは聞いた。
神子は額に眉した。
「ううむ……こう言っては何だが、そこはかとなく不細工な男だなぁ」
「それ、あんたよ」
「へ？」
「外の世界での、あんたの肖像画」
アリスが渡した旧一万円紙幣を、深刻な顔をして見つめていた神子は、突然、大声を上げた。

「誰だこれはっ！　私はこんなに不細工じゃない！」
「あら。お帰り」
霊夢は相変わらず暇そうに、縁側で茶を啜っていた。めずらしく、その茶の色は紅樺色をしていた。
「紅茶、飲んでるのね」
「なんか、いつの間にか戸棚の中にあったからさぁ」
今朝アリスが贈ったことを、既に忘れているらしい……。
「あ、おみやげ。おみやげは？　ちゃんと金目のモン取ってきた？」
「無理に決まってるでしょ。仙人饅頭で我慢なさい」
「ちぇっ……。まあいいわ。腹が膨れるなら合格点ってことにしといてあげる」
アリスが渡した『希望』と書かれた箱を、取っ散らかすようにして開ける。
中には、神子の顔を模した饅頭が詰まっていた。しかも微妙に形が崩れて、おどろおどろしい顔になっている。
「うわ……」霊夢は明らかにイヤそうな顔をした。「何、これ……」
「神霊廟名物のミコマンだってさ」
「食欲失せるわ、こんなもん！」
「じゃ、渡したから。それ、処分しといてね」
「あ、ちょ、このやろ、自分もいらないからって！」
喚く霊夢を後にして、アリスは博麗神社を後にした。
――神霊廟内部に、博麗の社は無かった。
「霊夢……上手くやったのね」
あの畏れるべき豊聡耳神子を、犠牲なしで調伏してのけた博麗霊夢も、もはや人間とは言えないのかもしれない。

魔女たちのマッド・ティーパーティー

「結論から言えば」

動かない大図書館は、痩せっぽちなその身体からは想像も付かないような、強くハッキリとした声で言う。言葉とは裏腹に、小さな鼻眼鏡を細く白い右中指で押し上げるその仕草は、十分に勿体振っていた。

三つ覚悟の無い者は、この魔女、パチュリー・ノーレッジと会話をしてはならない。即ち、複雑怪奇かつ難解至極の言葉を無意味に脳に刻み付ける覚悟と、その堪え難い苦痛に長時間耐え忍ぶ覚悟と、その間湧き起こり続けて止まない、目の前の女を殴りつけてやりたくなる衝動を抑え続ける覚悟である。

円卓の向こう側で、紫色の衣を纏う魔女は、はぁ、と息を吐き出すと、文字で濁ったその紫瞳を手許に開いた本の上に落とした。結論はどうした、結論は。早くも湧き上がった暴力衝動を、髪を掻き上げる仕草で誤魔化すアリスだった。

パチュリー・ノーレッジはそのまま魔道書のページをめくった。白く滑らかな陶器のような指先が、ゆっくりとした動きで色褪せた羊皮紙を摘みあげ、反対側へと倒す。指先は舐めるように、愛撫するように紙面の上を滑り、また摘み上げる動作を繰り返す。その度、アリスの奥歯を噛みしめる力が強くなる。ギリリ、と音が鳴るほどに。

たっぷりと時間を掛けて四十六頁ほど捲った後、ようやくノーレッジは……、

本を閉じた。

パタン。

乾いた音が、静寂の図書館を駆け巡った。

一体、何の為に四十六頁も本を捲ったんだ、この紫もやしは。嫌がらせか？　気紛れか？　其れともその行為は何か秘密めいた儀式の一部だとでも言うのか？

空しい疑問がアリスの脳内を駆け巡る。湧き上がる暴力衝動を飲み込むように、アリスは深く息を吸い、それを共に吐き出しながら

言った。
「それで」
その時、背後で扉が開く音がした。
「おや。いつもの白黒かと思いきや、五月蠅い色の方かい」
幼い子供のカン高い声と、それに似つかわしくない大人びた物言い。扉を開けて入って来たのは、この館の主であり吸血鬼、レミリア・スカーレットその人だった。このレミリア・スカーレット、容姿こそ幼いが、アリスよりも遥かに長生きで、五百歳を数えるほどらしい。
「あら。こんな時間に起きているなんてね」
アリスが会釈しながら言うと、レミリアは眠そうに目を擦った。
「いやぁ、朝更かししちゃって」
「レミィ、客の前ではしたないわ」
一色の魔女が言うとおり、レミリアは薄白のネグリジェ姿で、一言で言えば、あられもない姿だった。レミリアの裸など欠片も興味は無いが、吸血鬼の誇りとやらは何処へ消えたのだろうか、それは少し気になる。
寝間着のままのレミリアは、つかつかと円卓のへ近寄ると、アリスの隣の手近な椅子を引き、その小さな尻を無造作に落とした。
「今は人形は頼んでいなかったはずだがな」机の上に置かれた、彼女の従僕が作った焼き菓子を頬張りながら言う。「しかし、丁度良い。夜会用のドレスを新調して欲しかった所だ。小さくなって来てしまってね。成長期だからさ」
レミリアの体格をさっと目で測ってみても、以前と寸分違うことはない。薄い胸板、短い手足、痩せぎすの首、相変わらずの身長。涙ぐましい程の見栄張りである。
「成長ね……」
アリスは嘆息した。見栄と誇りで成り立っているのが吸血鬼という妖怪だが、こうも程度が低いと、呆れを通り越して微笑ましくもある。
「日々是躍進さ。レミリア・スカーレットの辞書には衰退の二文字は無いのだよ」

精一杯気取っているつもりなのだろうが、焼き菓子の屑を口の周り一杯に付けながら格好付けられても困る。
「レミィ、物を食べながら本を読むのはやめてって、いつも言ってるでしょう」
焼き菓子片手に机上に積まれた本へ手を伸ばしかけた五百歳児は、紫色の出不精に機先を制せられて、すごすごと手を引っ込めた。普段はノロノロしている癖に、こういう時だけ妙に素早いのだ、この引き籠もりは。
レミリアは頬杖ついて、焼き菓子をカリコリと食べる。吸血鬼の癖に、この幼女が血を飲んでいる所を見た事が無い。人間と同じ食物を好んで食べているようにも見える。噂では此処の食事に人間の肉が混じっていると言うが、アリスは嘘だと見抜いている。この間、アリスが捌いてやった鹿肉とその残骸を見て、悪魔の従僕が今にも卒倒せんばかりに顔を青くしたのを知っているからだ。
レミリアは気だるそうに、焼き菓子を頬袋に入れたまま言う。
「おパチェさん、おパチェさん、何か面白い本はなぁい？　最近、寝付きが悪くてさぁ」
おパチェさんはいつものように、手許の本から目も離さずに、つっけんどんに言う。
「その手に持ったカロリーの塊を処分して、清潔なナプキンで口元を拭ってくれたら、今すぐにでも教えあげるのだけれど」
「今度はちゃんとした奴を貸しておくれよ。前に寄越したのは絵本だろ、あれ」
「あら、稀代の吸血鬼殿は、どの様なご本をお探しなのかしら」
「そうねぇ……。やっぱり、挿絵がたくさん付いてるやつかしら」
「人それを絵本と言う」
吸血鬼の威厳も何もあったものではない。レミリアの様子は腑抜けきって、種族由来の圧倒的なカリスマ性すら影を潜めている。だるそうに「退屈だ」と連呼する姿は、博麗霊夢のそれにも似ていた。惰性は伝染するらしい。
有り体に言って、普段のレミリアはただの大人ぶった子供だった。

その点、正直に言って、アリスはレミリアを見下している……いや、手の掛かる妹分くらいに考えている。きっとそれは、パチュリーも同じなのだろう。

それでもアリスは、レミリアが幻想郷でも指折りの危険人物であることを弁えている。殊、単純な闘争に関してだけ言えば、レミリアが最凶でまず間違いない。彼女の有名な狂った妹など、比べるべくもない。あの八雲紫ですら相手にならないだろう。博麗霊夢がスペルカードというお遊びを作ったのも、彼女を安全に調伏するためなのかもしれない。本気の闘争に臨む彼女を一度だけ目撃したことがあるが、その様は老婆のように老獪で、勇者のように勇敢、猛獣のように獰猛かつ君子のように己を律し、将帥のように的確な判断を下す、魔王のように怖ろしい姿だった。彼女の瞳が黄金色に輝く時、何者も行く手を塞いではならぬ。幻想郷の実力者達の、暗黙のルールである。

尤も、目の前でダルそうに焼き菓子を貪る幼女の姿は、そのような脅威を微塵も感じさせることは無いのだが。

閑話休題、レミリアが来たことで、ジェリーフィッシュプリンセスの出した結論とやらは益々遠ざかってしまった。

「ところで」

アリスが口を開いた途端、大きな音がして図書館の扉が威勢良く開け放たれた。

「おっス、邪魔しに来たぜ」

入って来たのは、黒白のトンガリ帽子のシルエット、霧雨魔理沙だ。

「おっ、アリスもいるのか」

魔理沙は目をぱちくりとさせて驚いた様に言った。

「足はもういいのかしら」

「何の事だ」

ドカドカと喧しい足音を立てて円卓までやって来た魔理沙は、アリスの隣、レミリアの反対側に陣取ってドカッと座った。足を組んで、腰深く。我が物顔、ひと動作でそう思わせる能力を持つ人間も、そう多くは居るまい。魔理沙はその幻想郷代表と言ったところだ。

ヒョイ、と焼き菓子を宙空に放り投げ、落ちて来たそれにパクリと

食いつく。もちろん、館の主には断り無しだ。霊夢が天衣無縫なら、この女は傍若無人が服を着て歩いていると例えられよう。
「ンまいな、流石、咲夜だぜ」
ボリボリと下品な音を立てて、魔理沙は焼き菓子を食べた。見ているだけで嫌な気分になる食べ方だ。普段はそうでも無いが、人が大勢集まる場所では、魔理沙はつとに豪快に振る舞う。よせばいいのに。アリスは見るたびそう思う。
「泥棒が正面玄関から堂々と入って来るなんて、世も末だわ」
いつもの様にクラゲ女が悪態を吐けば、
「正面から入って来たのなら泥棒じゃないだろ。客だ、客。オラ、茶を振る舞え、茶を」
これもまたいつものように魔理沙が悪態で返す。最早、様式美である。
「パチュリィ様。お紅茶が入りました」
呼ばれて飛び出て、なのかはさて置き、本棚の影からハイカラな着物姿の小悪魔が、銀のトレイに白いカップとポットを載せて現れた。長い赤髪をひっつめにして、丸眼鏡など掛けている。その姿を見て、パチュリィは頭を抱えていた。
「今日は大正浪漫？」
アリスが尋ねると、小悪魔は満面の笑み。
「はいっ！　どうです？　似合ってます？　ます？」
「そ、そうね」
機嫌を良くした小悪魔は、鼻歌を歌いながら紅茶をカップに注いだ。アリス、魔理沙、レミリア、パチュリィの順で。格好はアレだが、何だかんだで主の顔を立てる事を忘れない小悪魔だ。……毎度毎度思うのだが、この娘の真名は何と言うのだろう？
「お、気が利くな、小悪魔」
要求通り茶が出てきたので、魔理沙も上機嫌だ。
一方、パチュリィは肝でも舐めた様に顔をクシャッとさせた。
「小悪魔、そんな犯罪者に茶なんて出すことないわ。塩撒きなさい、塩」

主の後ろに下がった小悪魔へ言う。
「はい、パチュリィ様」
小悪魔は小さな壺から白い粉をひとつまみすると、手を高く掲げ、魔理沙のカップにファサ～ッと振りかけた。小悪魔のふっくら柔らかそうな指から零れ落ちて広がる粒子は、灯火の光を受けて、キラキラとプリズムの様に輝く。しかし一粒も余すことなく、カップの中に吸い込まれていった。美しく見事な技だ。
「ますます気が利くな、小悪魔」
手を叩いて喜ぶ魔理沙。言うまでもなく、小悪魔が振りかけたのは砂糖である。パチュリィの顔が岩になった。
「魔理沙が来ると、パチェ之助の表情がコロコロ変わって、楽しいな」
レミリアがニヤニヤ笑いながら言った。旧友であるレミリアにとって、普段は能面のパチェ之助が、福笑いの様に顔を崩す様は、丁度良い暇つぶしになるのだろう。霧雨魔理沙には、人の『本当』を引き出す力があった。
確かに。確かに、見ていて退屈だと言ったら嘘になるし、暇つぶしにも持って来いではあるのだが。
「で。話を戻すのだけれど」
無意識のうちに手揉みしながらアリスは言った。日陰女の出した結論を前に暇つぶしをしていられるほど、アリスは悠長ではない。
アリスの視線を受けると、ラクトガールは元の仏頂面に戻って、サッと視線を図書館の入り口へ注いだ。
「ノーレッジ」
多少、語気を強めて言う。無意識ではない、意図的にである。
突然強い声を出した事に驚いたのか、視線が一斉にアリスへと集まった。小悪魔は胸の前で銀盤を抱いたまま身構え、魔理沙は何気無く帽子へ手をやった――八卦炉を取り出せる様にしたのだろう。レミリアは両手で焼き菓子を抱え、それにかぶりついたまま、目をまん丸くしていた。げっ歯類みたいでかわいい。
と。
図書館の扉から、控え目なノック音が響き渡った。

「入りなさい、咲夜」
待っていたとばかりに、パチュリーが言う。
果たして、十六夜咲夜が一礼をしてから、図書館の中へ入って来た。この時間、門番の美鈴は寝ているだろうし、この館でノックをするような存在は、あとはこの悪魔の犬くらいしかいやしない。
「パチュリー様。お客様がいらっしゃいました」
「……お邪魔するわ」
咲夜の背から、静かな声を発する者が居た。咲夜の陰から歩みでたその存在は、張り詰めた図書館の空気を更に引き絞った。
「アリス。久しぶりね」
チェック柄の赤いツーピースに植物の蔓のように伸びた緑暗色のショートボブ、その隙間から覗く切れ長の目が、長く整った睫毛の間から理性の煌きを放つ。優雅な白い傘、曰く「幻想郷で唯一枯れない花」を持つ、花と暴力と生命を象徴する妖怪。
「風見……幽香……」
予想だにしていなかった人物が現れたことで、アリスはしばし呆然としてしまった。
風見幽香は、慈愛に満ちた、悪く言えば人を見下したその目を円卓に向け、微笑した。
「ゆ、幽香？　珍しいな、お前がここに来るなんて」
魔理沙が上ずった声を出す。
「――幻想郷最強を決めようってハラかしら？」
レミリアが吸血鬼の目をして言う。その瞳は、今にも黄金色に輝きだしそうなほどだ。
パチュリーはそれを手で制した。
「レミィ、私が招待したのよ」
「パチェが？　なんだって、こいつを？」
レミリアの疑問はアリスの疑問でもあった。
「あのね」ノーレッジは少し面倒くさそうに言う。「レミィは知らないかもしれないけれど、ウチの庭の花は幽香に分けてもらっているのよ。ねぇ、咲夜？」

「はい。その辺りは美鈴が詳しいかと。よく美鈴と一緒に、庭の手入れを手伝って頂いておりますし」
「マジか。まったく知らなかったわ……」
レミリアは机に突っ伏してへコんだが、一瞬で立ち直って顔を上げた。
「まあ、カチ込みに来たんじゃないならいいわ。お座りなさいな」
ニコリと屈託無く笑う。その無邪気さは容姿相応のそれなのか、はたまた主人としての度量の広さを示すのか。アリスとしては前者だと思う。
レミリアは自分の隣の席を引いて幽香を誘おうとしたが、そこには既に先客がいた。
「うわっ！　い、いつの間に！」
「はっひひっしょひ」
焼き菓子を頬袋いっぱいに頬張った霊夢が、いつの間にか円卓についていた。焼き菓子が乗った皿を腕で囲って、誰にも渡さない！　と威嚇の視線を配している。食い意地の張った巫女だ。
「先客万来だな」
苦笑する魔理沙。そういうお前も客の一人ではあるのだが。
例の微笑を湛えたまま、風見幽香はアリスのすぐ隣に来ていた。
「ここ、いいかしら？」
「――いいわ」
一瞬の逡巡の後、アリスは答えた。
アリスは風見幽香が苦手であった。その微笑が、慈愛の眼差しが嫌いだった。アリスの全てを見透かすような目が、堪らなく不快なのだ。涼やかなその物腰が、強者であるというその自負が、何者にも対等に接するその余裕が、全てを児戯だと見下すその傲慢が、あらゆる命を我が子と見做すかのような博愛が、アリスの自我を強力に攻撃するのだ。
風見幽香を見る度、アリスは疑問に思う。こいつは本当に花の妖怪なのだろうかと。本当はもっと大きな力の化身なのではないかと。風見幽香の持つ力は、種族名の無い一妖怪としては突出しすぎてい

る。地獄の神である閻魔とも渡りあったと言うその力、とても測り切る事は出来ない。夜の帝王、レミリア・スカーレットと並び、幻想郷屈指の危険人物である。
それに。
因幡てゐの言葉を信じるのならば。風見幽香は、幻想郷の呪われしシステムを作り上げた、賢者達の一員だという事になる。
「なら、遠慮なく」
アリスの思いを知ってか知らずか、風見幽香は涼しげな顔でアリスの隣の席に着いた。
胸の間に控えていた上海が、トコトコと円卓の上を歩き、風見幽香に向かってお辞儀をする。それを見た幽香は嬉しそうに顔を綻ばせ、人差し指で上海の顔をくすぐった。上海も幸せそうに、幽香の指にもたれかかっていた。どういうわけか、上海は幽香に懐いているのだ。まったく、主の心、人形知らずである。
「私の顔に何か付いている？」
幽香の横顔を睨み付けていたアリスは、不意の反撃を食らって、内心、狼狽した。
「別に。似合わないなと思って」
咄嗟に嫌味で返す。しかし直ぐに気付く、それは、
「まるで魔理沙みたいね」
恥部を言い当てられて、アリスは自分の頬が紅潮するのを感じとった。あれだけみっともないと小馬鹿にしていた魔理沙と同じことをしてしまい、しかもそれを指摘されてしまうなんて。恥辱以外の何者でもなかった。だから、風見幽香は嫌いなのだ。
それを見ていた魔理沙は、声を上げて笑った。
「真っ赤になってら。おい幽香、あんまり虐めてやるなよ。そいつには人形くらいしかオトモダチがいないんだからさぁ、嫉妬しちゃうのも無理ないぜ。返してやれよ」
「ふふ」幽香は意味ありげに笑った。「そうね。さ、上海。一番好きな人の所に戻りなさい」
上海は幽香にぺこりとお辞儀をすると、アリスの胸元に帰ってき

た。
「で、お前は何しに来たんだよ？」
魔理沙は幽香に話しかける。話題は変わった。アリスは悔しさと情けなさで血の気が引く思いだった。魔理沙に助けられる形になってしまったのが許せない。完全に分かっているのに、わざと惚けて、他人の自我に立ち入らない様にする。霧雨魔理沙はそういう気の使い方をする女だ。組んだ腕に爪を立てて、恥を痛みに変えた。
幽香は魔理沙の問いに答えず、小悪魔が淹れた紅茶に口を付けた。ルージュを引いた唇に、高貴な赤樺色が吸い込まれて行く。香りと余韻を楽しむようにカップを顔の前に少し止め、涅槃の向こう側にたゆたうような表情。その気取り様は、やはり気に入らない。
「んがくっく！」
突然、頬袋をパンパンに膨らませた霊夢が、胸の辺りをドンドンと叩き始めた。
「れ、霊夢、大丈夫～？　十枚も一気に食べようとするからよ～」
涙目のレミリアが霊夢を見上げている。どうやら、霊夢が焼き菓子を詰まらせたらしい。
溜め息を一つ付いた後、アリスは自分のカップを霊夢の方に差し出した。霊夢は引っ手繰るようにカップを手にし、慌ててそれを一気飲みする。と、
「あっつー！」
今度は盛大に紅茶を吐き出した。巫女汁が、図書館の床に散乱した。
魔理沙と咲夜と小悪魔が、大爆笑しながら、
「いきなり何やってんだ、霊夢、馬鹿みたいだぜ」
「誰が片付けると思ってるのよ」
「霊夢さん、汚いです」
それぞれ言った。珍しくパチュリーも口に手をやって、真っ赤になって笑いを堪えている。レミリアはのたうち回る霊夢にすがりついて泣いていたが、一人、幽香だけは例の微笑を湛えたままだ。
「っていうか、喉詰まらせた奴に、あっつあつの紅茶を渡すなんてない

ぜ、アリス」
「え？　ああ、そうね、失念してたわ。ごめんね、霊夢。でも、あんたが悪いのよ」
　床上でびくんびくんと痙攣する霊夢に放った言葉は、一層高まった魔理沙の下品な笑い声に半ば掻き消された。
「貴女に会いに来たのよ、アリス」
　喧騒の中で、独り言のように幽香が言った。アリスの耳にだけ届いたであろうほど、密やかに。
　魔理沙の問いへの答えだろうか。その言葉の真意を測りかね、アリスは眉を顰めるばかりだった。
「おぼろろろろ……」
「うわっ、こ、こいつも吐きやがった！」
「お、お嬢様ー！」
　魔理沙と咲夜が叫んだ通り、レミリアがもらいゲロし始めた。巫女汁と混じり合う、お嬢汁。その色は鮮血の真紅……ということもない。やっぱり血なんて飲んでいないのだろう、吸血鬼とは一体何だったのだろうか。
　霊夢とレミリアは、吐いて体力を使い果たしたのか、ぐったりとしていた。やがて、魔理沙と咲夜に引き摺られ、それぞれ図書館から出て行った。吐瀉物塗れの衣服を替えにでも行ったのだろう。何時の間にか、床からは吐瀉物が消え去っていた。瀟洒なメイドが時を止めたに違いない。
「全く、騒がしいわね」
　溜め息混じりに言うと、すかさずノーレッジが言う。
「半分は貴女のせいじゃないの」
　そうでも無いと思う、と言い訳するのも面倒である。アリスは反論を控えた。
　ようやく邪魔も無くなったので、アリスは花曇の魔女の方へ向き直った。
「話を戻すけれど」
「小悪魔」

アリスの言葉を遮って、置物のような魔女は、従者へ声を掛けた。
「茶菓子が切れたわ。新しいのを作って、持って来なさい」
「はいっ、パチュリィ様。腕によりを掛けてっ」
従順な従者は、ハイカラな着物をはためかせながら、嬉しそうに図書館から出て行った。この魔女は滅多に食物を口にしないので、手作りの菓子を要求されたのが嬉しいのだろう。パチュリィの意図は別にあるだろう事は明らかなので、その健気が少し気の毒に思う。
「何のつもりよ。人払いまでして」
問い掛けても、来た時と同じ様に本の虫。
「私も席を外しましょうか」
席を立ちかけた幽香を引き留めるように、ノーレッジが鋭い声が響いた。
「結論は」
薄汚れた羊皮紙の本に目を落としたまま。
「既に、示している」
パチュリー・ノーレッジは静かにそう言うと、またもや口をつぐんでしまった。
イライラに耐えかねて、遂にアリスは平手を机に打ち付けた。思った以上に大きな音がした。
「それじゃあ分からないわ！　私は覚妖怪じゃない！」
そして、思った以上に荒げた声を出していた。
一度出した怒りを飲み込むように大きく深呼吸した後、もう何度目だが分からない責めの視線を、もやしの妖精に叩きつけた。もやしは素知らぬ顔で、羊皮紙の頁をめくっていた。
「落ち着きなさい、アリス。貴女らしくもないわ」
「お生憎様、十二分に私らしいわ」
なだめる幽香への言葉も、自然、刺々しいものになってしまう。
「いいえ、貴女らしくないわ。こんな簡単な事に気付かないなんて」
「簡単な事？」
「沈黙は金なり、その格言を知らぬ訳ではないでしょう。沈黙は時に弁舌よりも能弁だわ」

幽香に言われてアリスは気付いた。
ノーレッジは結論を示していると言った。提示されたものが沈黙だというのなら、それは、
「つまり……、解無し、分からなかったって事?」
紫の魔女は否定も肯定もせず。ただ頁をめくるばかり。
「分からないって……何よ、それ」アリスは無意味なやり取りに時間を割かれた事を怒っていた。「ご自慢のこの図書館には、宇宙の全知識が集まっているんじゃなかったの? 聞いて呆れるわ!」
アリスがまくし立てると、知識の名を冠する魔女はようやく顔を上げ、アリスを見据えた。
「本当にどうかしているわ、アリス。何を焦っているの。シティ派の余裕は何処へ行ったのかしら。冷静になりなさい」
流れる様な滑らかな口調で、本の魔女は冷静そのものだった。
「私は冷静だわ!」
激昂しているのは自覚していたが、それでも判断力は平静のつもりだった。
「いいえ、冷静じゃないわ。平常の貴女もよく理解しているように、この図書館には凡そ凡ての知識が集約している。調べようと思えば、それこそ全宇宙のあらゆる知識が手に出来る。此処で、しかもこのパチュリー・ノーレッジが調査をして 、何らかの解を得られないなんて事はあり得ないのよ」
「でも、分からなかったんでしょう?」
「そうよ。そして貴女はこの事実をもっと冷静に捉えるべきだわ。無知の知という言葉があるでしょう。分からないということは時に、分かるという事よりも、多くの情報を含んでいる」
「どういう意味よ……?」
風見幽香が口を挟んだ。
「これは」
その手の中には、小瓶があった。魔法の森の地下、版築の古城から採取した土粒の欠片を封入したものである。アリスがパチュリーに分析を依頼したものだ。

「この地上の物質ではないわ」
フラワーマスターはそう断言した。
「やはりね」
パチュリーは予想していたのか、アリスとは違い、表情を変えなかった。
「ど、どういう事？　ただの土粒じゃない、未知の物質だっていう事？」
予想と異なる方向に分析結果が示された事で、アリスは少し動揺していた。アリスの予想では、大陸の黄砂の成分が検出されるはずであったのだが。
「いいえ」パチュリーが首を振る。「既知の物質よ。ただの鉱物、石英や長石などの塊。だけどその組成や魔術的構造は、この図書館のあらゆる文献を紐解いても、完全一致するものはない。微妙に違うのよ。もちろん、外の世界のものでもないわ」
「なら宇宙から来たとでも言うつもり？」
或いは、あの月の都から？　そう考えたアリスの思考は、パチュリーの言葉で掻き消された。
「アリス。まだ理解していないようね。私は、この図書館には宇宙の凡ての知識が集約していると言ったのよ。この図書館の知の範囲外にあるという事は、つまり」
七曜の魔術は、その独活の様な滑らかな指先で、アリスの身中を指し示した。
「この物質の出処は、貴女と同じ、妄想の世界からという事になるわ。不思議の国のアリスさん」
アリスは、息を飲んだ。そしてようやく、全てに気付いた。
パチュリー・ノーレッジは、アリスの真実に辿り着いていた。今更ながら目をやれば、パチュリーが瞳を落としていた古書、そのセンテンス一つ一つに見覚えがある。原題『アリス・イン・ワンダーランド』。この幻想郷に来てから、諳んじれるほど読んだ物語、その写本だった。
アリスは脱力して、豪華な椅子の上に体重を預けた。
秘してきた事実を暴かれてしまった虚無感からではない。

寧ろ肩の重荷を降ろしたように感じ、安堵で力が抜けたのだった。
「その呼び方は不適切よ。私はアリス・リデルその人ではないわ。彼女と同じ妄想をした、ただの女よ。リデルと違って、私はそのまま幻想に飲み込まれてしまったけれど」
他者にこの話をしたのは初めてだった。
「ホワイト・ラビットを深追いして、幻想から抜け出せなくなったのね」
「私の身の上話など、どうでもいいわ」
今のアリスにとって重要なのは、新たな白兎を探すこと。今はそれだけだ。
「妄想の世界に戻るつもりかしら」
パチュリーはなおも聞く。
「逆よ。私は人間になりたいの。幻想のまま消えるつもりは無いわ」
「幻想郷に詳しいフラワーマスターなら」パチュリーは幽香へ目を向けた。「白兎の行方を知っているかしら？」
幽香は。
「茶番は止めなさい。無意味だわ」
相変わらず、例の微笑を湛えたまま。
「茶番？　貴女にとっては茶番でも、私にとっては人生そのものなのよ。軽々しく言われると、腹が立つわ」
ムッとして、アリスは幽香を睨んだ。
「私にカマを掛けようとしているようだけれど」幽香はアリスを見ていなかった。「無意味だわ。私には隠し立てする義理も理由もないのだから」
幽香は、パチュリー・ノーレッジを見据えていた。
「結論から言いましょう。貴女の予想は、全く正しい」
幽香は怒るでもなく、哀しむでもなく、朧気で捉えどころのない、まるで隙間妖怪のそれに似た口調で、しかしはっきりと言った。
途端、パチュリーはまたもや手許の本に顔を正対させた。だが、その本を持つ手が小刻みに震えるのが見えた。本を読んでいるのではなかった。顔を伏せ、感情を隠そうとしたのだ。

およそ、普段は図書館の一オブジェに成り下がっているこの魔女をして、この様な激情を発する事は稀有である。その隠そうとした激情は、憤怒か憎悪か、はたまた喜悦か。零れ出した感情が震わせるその手を見ても、判別がつかない。あるいは、それはパチュリー本人にすら分からないのかもしれない。

「予想……？」

反芻したその言葉。パチュリーは一体、何を予想したというのか。

幽香は手の中で件の小瓶を弄ぶ。

「大地は世界の一部。その大地の一部である砂粒もまた、世界の一部だわ。ならば、この世界のものではないこの砂粒は、貴女達の話すように、妄想の国、夢の国、不思議の国のものでしょうか」

さらさらさら……。

小瓶を開け、幽香は中身を円卓の上に静かに撒いた。

「答えは調べるべくもないわ。これは妄想の産物などではない。歴とした、大地の一部。そう、歴とした。この砂粒には重ねてきた過去があり、幻想郷での未来がある。何故、こんな物が此処に、この幻想郷にあるのかしら」

砂粒から、にょきりと緑色の小さな植物が芽を出した。

芽はみるみる伸び、葉を付け、蕾をふくらませ、やがて真っ赤な花を咲かせた。赤い鉤十字の花弁が特徴的だが、今まで見たどの図鑑にも載っていないような姿形をしていた。

これが、この砂粒がかつて咲かせていた花の形なのだろうか？　だとしたら、こんな形の花は一体、どこで咲いていたものだと言うのか？

それに。

「貴女、さっき自分で、この砂粒はこの大地のものではないと断言していたじゃない」

幽香の言葉は、自身で矛盾していた。

「そうよ」

幽香が手で触れると、不可思議な赤い花は、灰のように色を失って崩れ、砂粒の中に混ざってしまった。

「これは、この世界の物質ではない。ならば……」
くるぅり。
風見幽香は、アリスの過去でも覗きこもうとしているかのように、深紅の瞳を爛々と輝かせた。赤い月のようなまんまるの瞳の向こう側には、濁った混沌が広がっている。
――汝が深淵を覗きこむ時、深淵もまた等しく汝を覗いている。
ふと、その言葉が頭を過ぎて、アリスは我知らず、体を震わせた。風見幽香は「それ」だと、直感的に感じ取った。あの畏れるべき神子や因幡の白兎とも違う。もっと根源的な、本能的な脅威、恐れ。あるいは、毒草に当たった時の白昼夢のような。あるいは、子どもの頃に見た悪夢のような。あるいは、そう、あの時、あの場所で見た、あの白兎を追って行き着いた、あの不可思議な……。
息も出来ない。体中の筋肉が痙攣し、強張り、ひきつけを起こしたようにアリスの体が震える。
視界が深紅に染まってゆく。全てが、風見幽香の赤に飲み込まれてゆく。
幽香の真っ赤な唇が開く。発せられる言葉は、断頭台の刃。
「答えは、既に出ている。これは――」
「博麗」
幽香を遮ったその言葉に驚いたのは、ほかならぬアリス自身だった。
知らず、アリスの右手は、胸元に伸びていた。
人参のペンダント――てゐの贈り物を、握りしめていた。
「それが、あんた達の創りだしたシステム、全ての原因だわ」
風見幽香は目を細めた。すると、視界を包んでいた赤い闇は、解けるようにして消えていった。
「因幡てゐを味方に付けたのね」幽香はうふふ、と小さく、嬉しそうに笑った。「あの子は悪戯好きで性格が捻くれているけれど、困っている人は放っておけない子だからね」
因幡てゐをすら子ども扱いして。
風見幽香は、席を立ち、アリスの前へと歩いてきた。

「お話は、終わり。今日は貴女に会いに来たのよ、アリス。おいたが過ぎたわね」
ぬっ、と白く滑らかな絹のような手の平を突き出して。
「儀礼刀を返しなさい」
毒花のように怖ろし美しい微笑みを浮かべて。
風見幽香は有無を言わせぬ迫力を放っていた。アリスはやむを得ず、袖に隠した一振りの血塗れた儀礼刀を取り出して、幽香の手の中に置いた。
「もう一振り」
下唇を噛みつつ、もう一振りも取り出し、渡す。
風見幽香は二振りの儀礼刀をまじまじと眺めると、ふっ、と息を吐いた。
「――いいでしょう」
そう言って背を向け、図書館の扉へ向かった。
「レミィは」
ノーレッジが顔を上げて、幽香の背に声を投げつけた。
「あんたより、強いわ。レミィが全てを知ったら、どうなるでしょうね。あの子が本気になったら、幻想郷なんて一夜で破壊できるわよ」
まるで負け犬の遠吠えである。
幽香は歩みを止めたが、振り返りもしなかった。
「だから？　私には関係無いわ。破壊も虐殺も一時の遊戯にすぎないでしょう。形あるものは、いずれ滅びるのだから」
「あんたは賢者達の一員じゃあないのか」
「さあね……。興味が無いのだけは、確かだわ」
風見幽香は、再び歩みを始めた。
扉に手が掛かった、その時。アリスの脳裏に、ある考えが閃いた。
「幽香」
立ち上がって、アリスは言った。
「形見の品は、確かにあんたに渡したわ。隙間に取られるんじゃあないわよ」
振り返った幽香に、初めて、感情の影が見えた。

無垢な少女のような驚く顔と、その頬を伝う水晶のような涙が、アリスの言葉を裏付けていた。幻想郷に執着しない風見幽香が、儀礼刀に執着する理由は、それしか無いと思ったのだ。
幽香は手で涙を隠すと、早足で逃げるように図書館を出て行った。
「あいつがあんな顔するなんて……」
パチュリーは意外そうに言った。さもありなん、アリスも意外だった。恐るべき風見幽香の意外なる一面。ブン屋に売りつければ高い金になりそうだが、これ以上幽香を怒らせるのは怖い。やめておくことにした。
「しかし、見逃してもらえたようで、何よりね」
「ツイていたみたいね。二本とも取られていたら、困ったことになっていたわ」
アリスは、懐から二振りの儀礼刀を取り出した。
パチュリーに複製を依頼していたのだ。
しかし、風見幽香に渡したもののうち、一本は本物だった。風見幽香は偽物だと気づいていたようだが、目的の「形見の品」を手に入れたので、見逃してもらえたのだろう。二つの本物のうち、どちらを渡すか迷ったが、直感が当たっていたらしい。緋想天で手に入れた儀礼刀が、幽香の「形見の品」であるようだ。
「これは、八雲紫との交渉に必要だから」
風見幽香がそうだったように、八雲紫の弱点も「博麗」というシステムにあるに違いないのだ。
「そういえば。パチュリー、貴女の予想ってやつは、一体なんだったのかしら」
紫色の魔女は、既に冷めているであろう紅茶を啜った。
「貴女は」相変わらず、手許の本に目を落としたまま。「一人じゃあないってことよ」
「はぁ？」
意味がわからず、アリスは不機嫌な声を出した。やはりこの紫もやしと話しているとイライラする。
「パチュリィ様ぁ！　クッキィが焼けましたよ！」

顔中ススだらけのミニスカパティシエ小悪魔が、扉を蹴破るようにして図書館に突入してきた。またお色直しをしたらしい。
そのまま、山盛りの山盛りの焼き菓子を、ドン、とパチュリィの目の前に置いた。胸焼けするほど美味しそうだ。
「さ、たんと召し上がれ」
ニコニコと屈託の無い笑顔を浮かべる。小悪魔というより、小天使のようだ。
パチュリィは見ただけで吐き気を覚えたのか、青い顔をして口へ手をやり、哀願するようにアリスを見た。
「じゃ、私はこれで」
儀礼刀を回収して、アリスはそそくさと図書館を出た。
背にノーレッジの恨めしげな視線を感じたが、無視する。
今日のイライラの分のささやかな仕返しだった。

ブービー・トラップ

暑い。

羽織ってきたケープをかなぐり捨て、アリスは額に流れる汗を拭った。

地上は秋口で吹く風も冷たいというのに、噴出する地獄の蒸気のせいだろうか、地の底へと続く坑道は、梅雨中に訪れた真夏日のようだった。近頃、寒暖差に鈍くなっているアリスであるが、そのアリスをすら辟易させる程の、地獄のような暑さだ。……なるほど、此処は地獄の入り口だった。思考回路も鈍り気味。

地上と地底を繋ぐ巨大な縦穴。

それが、封印されし妖怪たちが住まう忘れ去られた都である旧地獄、いわゆる地底へ行く為の唯一の道だ。

地上の妖怪と地底の妖怪の間には、一種の不可侵条約が有り、一部を除き、以前は全く交流が無かった。地上の妖怪が無許可で地底に立ち入れば、食い殺されても文句は言えない。そんな場所だったのである。今代の博麗の巫女、博麗霊夢が地底で大暴れしてからは、その条約も緩和されつつある……、と言うより、無視されつつあり、地底の妖怪が博麗神社や紅魔館の酒宴に参加することも多い。対立する理由すら大半の妖怪が忘却し始めている今となっては、当然の時流なのかもしれない。

しかし、それを快く思わない勢力がいる事も確かだ。

まして、アリスの目的が目的である。害される可能性は十二分にあった。

だからこそ今、往路の確立された涼しい風穴でなく、敢えて道を逸れ、灼熱の横穴を通って地底に向かっているのだ。

以前、魔理沙を唆して地底へ向かわせた時には分からなかったが、地底というのはやはり苛酷な環境である。人妖の通り道として整備された公道以外は、旧名の示す通り、まさに地獄だった。無理に通ろうとすれば、入っていった生物と同じ質量の屍の山が出来上がるだろう。

横穴は狭く、立って歩くには少し背を屈めなければならないほどだ。奥の方からは絶えず蒸気が吹き出し、視界は白い闇の中。さらに、縦横無尽に道が分かれ走り、天然の迷路となっている。なるほど、ここは地獄だろう。こんなところで死んだ日には、死んでも死に切れずに怨霊となって永久に惑い続けるに違いない。

久しくかいていなかった汗を拭い、首元をはだけ、袖を捲る。進めば進むほど、温度が上がって行くように思える。並の人間ならば血液が沸騰して死んでいることだろう。持って来たカンテラの重みはまだしも、放つ光熱が鬱陶しい。胸元の上海が小さな団扇で扇いでくれる風だけが、唯一の快事だ。

ふと、蒸気の吹き出す音に混じって、バシャバシャと水の音がした。音は狭い坑道内を反響し、何処から聞こえたのか分かり難い。が、どうやら前方からしたようにアリスには思えた。それきり聞こえないが、聞き間違いとは思えない。つまり、近くに一定量の水が有り、さらにそこには何者かがいるということになる。

歩みを緩め、聞き耳を立てながら、アリスはスカートの中から折り畳み式ボウガンを取り出す。上海も団扇から小さな剣に持ち替えた。

大量の汗を流しながら、摺り足でそろりそろりと進んで行く。

地底の妖怪がどんなものか、アリスは知らない。しかし、この地獄の熱気の中に好んで住むような妖怪も居るかもしれない。戦闘体制を崩さないよう、気を張り続けた。

そうして二十間ほど進んだ時、また水音が響いた。アリスはその音の出所を探ろうと、聴覚に全神経を集中した。そこで歩みを止めなかったのは、軽率だったと言える。

あっ、と思った時には遅かった。踏み出した足は空を切り、バランスを崩したアリスの体は、パックリと口を開けた亀裂の底へと落下してしまった。

しばしの落下感の後、衝撃、そしてその次に襲ってきたのは、体中があらゆる方向から圧迫される感覚だった。

それが全身水に包まれる感覚だと理解できたのは、開けた目に水が入り込んで起こる、濡れているのに乾いたような、矛盾したあの痛み

を感じてからだ。
その次に感じたのは、全身を包む鋭い冷気。
灼熱の洞窟から一気に凍える水底に叩きこまれ、温度差でアリスの肌理が悲鳴を上げた。高温で開ききった毛穴が一気に閉じるの感じる。体中を引き絞られるが如く。皮膚表面に亀裂が走るような痛みを感じ、アリスは水底で呻いた。
夢中で手足を動かして、なんとか水面までもがき上がり、呼吸をする。灼熱の空気は去り、しんと染み入るような静寂と凍気が、濡れた顔と喉とを刺激した。
見上げた先に、落ちてきた岩の裂け目が小さく見えた。かなりの距離を落ちたようだが、それでもこの気温差は異常だった。地底は地上の物理法則と異なる法則が適用されているとでもいうのだろうか、そんな馬鹿な。独り言ちたその言葉が、がらんどうの洞窟内部を木霊した。
左右を見渡す。
近くの水面にカンテラが浮いているのを見つけた。魔理沙から分けてもらった発光茸を使ったカンテラ。落下の衝撃で破損していて、直接空気と水に触れた発光茸は輝きを失っていた。凍みる水を掻き分けカンテラに近づき、回収する。破損したとはいえ、直せばまだ使える。無駄と浪費を嫌うのは、シティ派の美徳というものだ。
気付けば、ボウガンを失っていた。落ちた時に手放してしまったらしい。カンテラは見つかったが、ボウガンは周囲を見回しても見つからなかった。何処かへ流されてしまったのだろうか。
視線を上げると、その先に寄る辺が見えた。縮こまった手足を動かし、岸まで泳いで這い上がる。
体を軽く振るい、水気を落とす。
どうやら、水に塩気が含まれていたらしい。身体中が不快なベタつき纏って、アリスは舌打ちした。上海も顔を顰めていたが、上海本体には金属部品が無いのでその点は安心である。
一方アリスの方は、全身塩水に浸かったせいで、装備の殆どが水没して使い物にならなくなっていた。サバイバルナイフ、仕込み靴など

は手入れすればすぐに使えそうだが、スカートの中に仕込んだ手製の手榴弾や発煙筒、信管などの火器類はもちろん、ポシェットに入れた応急キット、鎮痛剤や止血剤などの薬品類、水に携帯食料、マッチにロウソク、ハンケチーフとポケットティッシュにナプキン、それに上海の武器防具はとても使用に耐えそうにない。中でも一番痛いのは、携帯用ソーイングセットと予備パーツをやられたことだ。これでは上海が怪我をしても治す事が出来ない。ポシェットを防水性の物にしておけば良かったと後悔した。あの古道具屋の店主の口車に乗ってデザイン性重視にした事が仇となった。あの店主、もう一度しばき倒さなければ気が済まない。

洞窟内は、原理は不明だが、壁それ自体がほんのりと発光しているようで、手許は見える程度の光量があった。とは言え、十分かと言うとそうではない。瓶に詰めていたお陰で難を逃れた裂傷用のオリーブオイルを、破損したカンテラ内に注ぎ、上海が持っていた起爆用の小さな火打ち石を使って火をつけ、当面の明かりを確保する。

服を軽く乾かし、装備の点検を終えた後、周囲の探索をしようと、アリスは破損したカンテラを持って立ち上がった。

視線を上げたとき、あっ、とアリスは声を上げてしまった。

光の向こう、視線の先に、博麗の社があった。苔生して、緑の斑になった灯籠の側には、真新しい幾つもの花束が置かれている。まるで墓前の様に。

やはり。

アリスの頭の中で、様々な事実が交錯する。

古城の砂の成分。魔界の森の地下や緋想天にあった博麗の社。因幡てゐの言葉。図書館の魔女が仄めかしたこと。風見幽香の涙。そして、博麗の血にまみれた儀礼刀。

なぜ神霊廟に博麗の社が無かったのか。

博麗霊夢は、上手くやったのだ。

逆に言えば。博麗の巫女が調伏に失敗した場合、そこに博麗の社が出来るのだ。血に染まった儀礼刀を残して……。

アリスは社に近づき、祭壇の扉を開けた。

祭壇の中には、何も無かった。
先を越されていたのだ。
「八雲……紫……」
無意識に、その名前を口にしていた。
幻想郷を創った最強の妖怪。博麗大結界の管理者。境界を操る存在。そして、アリスの友人でもある。不安定とナンセンスを好み、常に道化めいて人を煙に巻き、放たれる言葉は出鱈目で曖昧で嘘八百、真実と幻想の間で四六時中綱渡りをしているような女。
これでいよいよ確信が強まった。アリスの行為は、八雲紫の弱点を的確に突いている。だからこそ、紫が妨害をしてくるのだ。
そう思ってみれば。地下の古城で遭遇したあの頭足類や、花果山の汚らわしい猿など、まさに紫好みの「生理的に悍ましい」化け物共である。
そして、今まさに襲い来る者も、きっと。
横っ飛びに避けると、直前まで居た場所で爆発が起こった。いつも嗅いでいる火薬の匂い。
カンテラを掲げ、背後から近づいた攻撃者の方へ顔を向ける。
砂利を踏みしめる音。
カンテラの放つ炎の輝きの中、ぬらりとそれは現れた。
そいつの姿を見た途端、アリスは呻いた。頭部を鈍器で殴られたような衝撃を感じ、意識が飛びそうになる。胃液が逆流して、胸が業火に焼かれるよう。あまりの嫌悪感に、視界が定まらなくなり、そいつの悍ましい姿が右へ左へ、節操無く揺れ動いた。
「……うふふ。何を動揺しているのかしら？」
更に不快なことに、そいつは言葉を放った。
聞き覚えのある声。
当然だ。自分の声なのだから。
金色の髪と瞳、頭に巻いた青いリボン、フリルの付いた白い服に青い吊りスカート。そして手にした「グリモワール」。
そいつは、かつてのアリスの姿をしていた。同じ顔に同じ服、同じ声に同じ表情。唯一違うのは、その周りに剣や斧などで武装した上海

人形達を侍らせていることだ。
「ゆ、紫……よくも、こんな……、こんな……」
さらに強まる、脳を直接揺さぶられるような激しい目眩。耳鳴りの大オーケストラ。目の前にはバチバチと火花が散り始め、視界がホワイトアウトしてゆく。アリスの足は自重を支えられないほど弱り、膝を折り地面に手を付いてしまう。呼吸は過ぎて酸素を取り込むことが出来ずに、全身の細胞一つ一つが悲鳴を上げ、体が小刻みに震え始めた。
単なる嫌悪感だけではない。敵の攻撃だ。既に術中に嵌ってしまっていたらしい。
「私を偽物だと思う？　なら、幻視してみれば？　したって無駄だろうけど。だって私は本物のアリスだもの」
張り付いたような笑みを浮かべながら、そいつが手を差し伸べると、上海人形達がアリスに向かって殺到する。
よろめく手足を何とか動かし、アリスは地面を転がって伏せた。突撃した上海人形達はカンテラに激突して爆発し、炎で焼かれた人形たちの苦悶の表情が、四散し転がった物言わぬ首に張り付いていた。
揺れる視界を気力で制し、アリスは敵を睨みつけた。
そいつは嘲笑うようにして、傍らに侍る人形を無意味に爆発させた。
「なあに？　その顔は」
次々と爆発してゆく人形達。従順に佇むその姿はしかし、アリスには怯え助けを求めている様に見えた。
爆影の中に、狂気に狩られた少女の笑みが鮮やかに浮かび上がる。
「気に入らない？　でも、あんたもやっていることじゃないのさ」
そうかもしれない。
そうであったのかもしれない。
しかし、アリスは狂女のその行為を鼻で笑った。
「私はあんたみたいに下品で不器用じゃあないわ。私の美しい人形だったら、そのくらいの爆発、平気で耐えている」
金色に濁った瞳を睨みつけながら言い放つ。

「さすが私、減らず口も一級だわ！」
狂った少女はタガが外れたかのように声を上げ、ひとしきり笑った。
「あんたは、私じゃあない」こんな悍ましい化け物が、この美しき世界に存在していて良いはずがないのだ。「紫が創った偽物だ。狂った化け物の幻影だ」
「くっ、ふふふ」腹を押さえて、心底楽しげに。「これを見ても、そう言えるかしら？」
狂女は恐るべきあの「グリモワール」を開き、呪文を唱え始めた。聞き覚えのある旋律。七色の音階、これは……、
「そうよ。私達が見つけた、究極の魔法」
詠唱が進むにつれて、狂った少女の髪が七色に輝き始める。間違いない、あの魔法だ、アリスは確信した。
「馬鹿な、なんでそれを紫が……」
「あはは、だから言ったでしょう、私は本物のアリスだよ、アリス・マーガトロイド」その細く白い指先でアリスを指す。「偽物はあんたのほうだわ」
「何……？」
「私はあるべき姿のアリスだわ。魔法の国の死の少女アリス。でもあんたは？　今のあんたは、父親の妄執に囚われた、只のしがない人形使いじゃないか」
虹色の髪をした少女は、アリスの手をグリグリと踏みにじりながら言う。
「魔法使いとしても未熟者、人形師としても父親を超えられない。無様に惑い、叶いっこないユメを追いかけるだけ」
人を貶し、傷つける事に快楽を見出しているのだろうか、恍惚の表情を浮かべながら少女は言う。その姿はまさに、かつての自分そのものだった、
「諦めなさい、あんたの前に、二度と白兎はやってこないよ」
「くっ……」
アリスは呻いた。

狂った少女の言葉は、的を射ていたからだ。アリスは反論の術を持たなかった。それは、心の奥底で確かに感じていた焦り、劣等感だった。アリスはまだ、何者でもない。大地に根付かぬ根無し草、妄想の国を彷徨う異邦人、帰るべき場所を探し求める迷い子。体は大人になっても、力は他者を凌駕しても、人である事を捨ててさえ、それは変わらなかったのだ。

「半端者には半端な死がお似合いだわ、偽物のアリスちゃん」

いまや全身虹色に輝いている少女は、その手を眼下のアリスの方へ向け、究極の魔法を放つべく、指先に七色の死の旋律を凝縮する。

その時、胸の間に隠れていた上海が飛び出し、狂った少女の鼻っ面を、手にした小さな剣で切りつけた。

一瞬の出来事で、少女も不意を突かれたようだ、仏蘭西人形のように整ったそのあどけない顔に、真一文字、血傷が走った。狂った少女は怯み、一歩下がって呻いた。

「こいつ！」

アリス自身が弱っていたからだろう、上海の動きが遅れ、狂った少女の手の内に捕まってしまう。

少女は上海を右手でぎりぎりと締め上げ、上海の部品が破損する、悲鳴にも似た音が、洞窟内に無慈悲に響き渡った。

「上海！」

アリスは、絶叫した。

「あはははっ、パパの創ったお人形がそんなに愛おしいのかしら？」

狂った少女は、上海もてあそぶように手の内で握りしめ、苦しげな上海の表情と歯噛みするアリスを交互に見ては笑った。

「あんたの迷いの源を、優しい私が掻き消してあげるわ！」

虹色の煌きを、上海を掴んだ右手に集中させて。

「やめなさい！」

アリスは声の限り叫んだ。かつての自分の姿をした少女と同じように、アリス自身の体からも、虹色の輝きが発せられた。あの魔法。魔界を飛び出す時に封印した、究極の美を司る七色の禁断呪文。アリスの虹は、色の狂った少女の華奢な体を弾き、その体を包む虹の膜を

吹き飛ばした。
　同時に振り上げた足が、仕込んだブーツの白刃が、上海を掴んだままの少女の右手首を切り落とす。
　右手を落とされた少女は、失った手の先を見て、信じられない、という顔をした。そのすぐ後に、この世のものとは思えない、耳を劈く悍ましい叫び声を上げた。
　アリスは、切り落とされた手首に掴まれたままの上海の、その上に覆いかぶさって、上海を隠した。
「悪あがきを！」
　ボドボドと大量の血が垂れるのにも構わず、再び虹色を纏った狂女は、上海を庇うアリスに対し、容赦なく蹴りを入れた。
　壊れた自動人形のように、アリスの顔と腹を狙い、執拗に蹴りを入れる。ヒステリーを起こしたのか、口元から泡を飛ばし、罵詈雑言を吐き飛ばしながら。
　アリスは血を吐きながらも、その様を笑った。
「聞いてあきれるわ。その下品さで何処が魔法の国の死の少女なの、何処がアリス・マーガトロイドだって言うの」
　血を失い顔色に青みを増した虹色の少女は、その言葉を聞くと、ピタリと止まった。大きく肩で息をすると、微笑を浮かべた。
「そうね。でもそれは、あんたが心配することじゃないのよ」本当に自分の声かと疑う程の、この上なく冷たい声で少女は言い放った。「あんたはここで死ぬんだからね」
　狂った少女は、アリスに止めを刺すべく、虹色の煌きを残った左手に集中させた。煌きは集まり、凝縮し、実体を持った一振りの剣を形作った。
「今度こそ、さようなら、アリス」
　少女がそう言って虹剣を振りかぶった瞬間、その頭にボウガンの矢が突き立った。
「あ？」
　少女は、何が起こったのか分からない、という顔をした。頭に刺さった矢を引き抜こうとしたのか、手先を失った右腕を頭へやる。途

端、だらりと鼻血を流して、少女は卒倒した。剣が落ちる、がぁらんという音が、虚しく響いた。
アリスはしばらく呆然として、倒れた少女を見ていた。虹色の輝きは次第に失せていった。死んだのだろう。落ちた剣も魔力を失い、溶けるように消えた。
ボウガンの矢が放たれた先を見やると、そこに立っていたのは、見たことのない女性だった。
肩にかかる程の流れるような金髪に、瑪瑙色に煌めく瞳。尖った耳を持ち、首元には上品なスカーフを巻いている。どことなくオリエンタルな服装をまとった美しい、しかし無表情な女性。アリスの折り畳み式ボウガンを右手に構え、左手にはなぜか花束を持っている。
「危なかったわね」
女性はボウガンを下ろしながら言った。その声には、聞き覚えがあった。
「貴女は、あの時の……橋姫か」
以前、魔理沙をけしかけた時に道を阻んだ、地上と地底を結ぶ道に掛かる橋の守り神。名は水橋パルスィ。嫉妬心を支配する能力の持ち主だと言う。
「上流からこれが流れてきて、何かと思って来てみたのだけれど。これ、貴女の？」
「え、ええ」
パルスィはアリスを抱き起こして座らせると、そのそばにボウガンをそっと置いた。
アリスの額にパルスィ手を当てると、耳鳴りと目眩が消え、なんとか手足を思い通りに動かせるまでに回復した。嫉妬心を支配する能力を応用すれば、脳内物質の操作もできるのだろうか。
パチン、と指を鳴らすパルスィ。緑色の優しい光を放つ蛍達が集まって来て、アリス達の周りをくるくると回った。洞窟内の仄かな明かりは、この子達とお陰だったようだ。
「その人形、なんとかなりそう？」
「ええ……上海は丈夫だわ」

蛍光の中、上海の具合を見たアリスは、ホッと胸を撫で下ろしながら言った。外側はかなり損傷しているが、内部機構は生き残っている。

しかし、いくら丈夫な上海とはいえ、究極魔法を食らってただで済むわけはない。今すぐに手当をしたいが、ソーイングセットや予備パーツは塩水でやられている。地獄の旧都で調達出来るはずもない。今は撤退するしかなかった。折角ここまで来たのに、調査の道半ばで引き返すことになろうとは。すべては自分が迂闊だったからだ。アリスは自分を責めた。

「帰るのなら、送るわ。アリス」

パルスィは立ち上がりながら言った。

「なぜ、私の事を?」

「なぜ?　馬鹿を言わないでよ」パルスィはニコリともせずに言う。

「魔界の姫、魔法の国の死の少女を、地底の私達が知らないとでも思ったのかしら」

「そう……」

アリスは目を伏せた。

余り思い出したくない思い出だった。幻想郷に迷い込んだ当初、アリスは魔界で暮らしていたことがある。その時に魔神に師事し魔法を修め、人間を捨てた。元々、妄想の世界を彷徨い続け、人間であるかどうかも疑わしかった身だ。そのことに迷いは無かった。しかし、魔界に元人間の少女がいるのは珍しかったようで、なにかとちょっかいを出されることが多く、その都度、実力で叩きのめしてきた過去がある。そのときに付いた渾名が「死の少女」であった。

「魔界には戻らないほうがいいわ。今の貴女じゃ、殺されるだけでしょう。こんなモノに頼っているようでは」

ボウガンに目を落としながら、パルスィは言う。

「力は、今のほうが強いわ」

それは、アリスの精一杯の強がりだった。

「心はどうかしら」アリスの心を見透かしたようにパルスィは言う。

「昔の貴女の伝説が本当なら、あんな幻影にやられるわけがないわ」

パルスィが指し示す方には、かつてのアリスの姿をした少女の死体がある。
いや。いつの間にかその姿は、牛馬ほどの大きさもある、翼を持った緑色の水蛇の姿に変わっている。
「あれが私に幻影をかけていたのか。それでも、まったく本物と遜色がない力だったわ。地底には怖ろしい化け物がいるのね……」
「あれは私が仕掛けた罠よ」
「えっ？」
驚いてパルスィを見やる。
相変わらず、パルスィは無表情だった。
「あの社を守るために、私が仕掛けたのよ。あの祭殿に近づくと発動するように仕掛けたの。近づいた者の最も嫉妬している相手の姿に変身するのよ」
その話を聞いて、アリスは複雑に思った。
罠を仕掛けたパルスィに対する怒りからではない。
自分自身が、かつての自分に対して嫉妬を抱いていたなどとは……。確かに、あの頃は何も考えず、手に入れた力に溺れているだけで良かった。魔界での生活は楽しかったし、充実もしていた。少なくとも、妄想の国をさまよっていたあの頃よりは。
しかし、アリスは思う。自分の過去は嫉妬するものではないと。憧れるものでもないと。
今はもう、ただ無邪気に力を振るっていたあの頃とは違う。アリスにとって、過去は今の自分を形作る重要な足跡だが、出来れば目を逸らしたいものでもあった。あの頃の自分は、正気を失っていたから。
「でも、ちょっと脅かして、祭壇に近寄らせないようにするだけのつもりだったのだけれど……そこまで危害を加える気はなかったのよ。謝るわ」
パルスィは頭を下げた。相変わらず、無表情だったが。
つまり、とアリスは脱線しかけた思考を遮った。
溜息を一つ吐く。
「……社の中には、何があるの？」

アリスも立ち上がって聞いた。
返事は、聞く前から分かっていた。
「儀礼刀よ」
答えた瞳は、無表情。
ああ、そうかとアリスは思った。この人は、自分に似ているのだ。
それは、容姿や仕草ではなかった。
「そうだ。帰る前に、お参りをしていっていいかしら」
「ええ」
パルスィは社の前に行くと、手にした花束をその下に備え、しゃがみこんで手を合わせた。初めて表情を変え、辛そうに、少し涙を滲ませていた。
「花束を供えていたのは、貴女だったのね」
「ええ。昔……ここで、友達が亡くなったの。いい奴だったのに……」
アリスもしゃがみ、一緒に手を合わせた。
「お墓も無いから、ここがお墓代わり。本当は間違ってるんでしょうけど」
「いいえ。正しいわ。どんな形であれ、祈る心が供養になるって、知り合いの巫女が言ってた。魔術的観点から言ってもそうよ。人は二度死ぬ。体が死んだ時と、そして大切な人に忘れられた時に」
「……ふふ、ありがとう」
少しはにかんだように笑うパルスィ。美しい。普段無表情な分だけ、笑った時により際立つ。緑の蛍に囲まれた、異国の地の姫君。なるほど、確かにパルスィには嫉妬心を支配する能力があった。アリスの胸の内にも、なんだかもやもやしたものが生まれてしまったから。
パルスィは社に供えられた花束のうち、古くなってしまったものを回収し、社に積もった埃を払った。
おそらく定期的に手入れをされているであろう灯籠は、それでも苔で斑になっている。それが指し示す事実は、一つしかない。
「そのお友達……私、名前、知ってるわ」
アリスが切りだすと、パルスィは少し驚いたように言った。
「えっ。でも、かなり昔のことよ?」

しかし、きっと彼女も答えを予感をしていたことだろう。
「博麗、でしょ」
アリスがその言葉を発すると、パルスィは無表情に戻ってしまった。
それは、アリスには悲しんでいるように見えた。
「そう。アリス、貴女も、探索者なのね」
「貴女も、そうだったのね」
パルスィは虚空を見上げる。
蛍舞う幻想的な中空に、昔の情景を見出しているのだろうか。
「昔……本当に昔。旧地獄が幻想郷に併合されたころ、私も探索者だった」
「ま、待って。今、なんて?」
驚いて、アリスは話を切った。
「へ、併合?」
パルスィは意外そうな顔をする。
「そこまでは知らなかったのね。幻想郷は他の妖怪勢力をその土地ごと吸収することで、領土を拡げて来たのよ。最近の紅魔館や山の上の神社、噂の聖人が造った神霊廟なんかもそうでしょう?」
「なんてこと……」
アリスは絶句した。
「それが幻想郷に張られた『幻と実体の境界』の力なのよ。土地の境界すら曖昧にしてしまう」
パルスィの話に、アリスは肌が粟立つのを感じた。八雲紫の力は予想を遥かに上回っていた。大地の接合、従属、支配など、正に神にも匹敵する力だ。
「そして」パルスィは話を続ける。「異なる文化を持つ勢力同士が出逢えば、必ずそこに摩擦が起きる。それを解決するのが、博麗の巫女というわけ」
それは、アリスも予想していたことだ。
「お友達の博麗の巫女は、地底の異変解決に失敗したのね」
パルスィは涙を堪えるように目を細めた。

「ええ……」
何代前かは分からないが、その巫女は地底の併合という大異変に立ち向かったものの、力敵わず、調伏を果たせなかったのだろう。そしておそらく、異変解決に失敗した巫女は、儀礼刀によって……。
「私が調べたのは、それだけ」
「貴女はこの幻想郷の在り方に疑問を持たなかったの？　そんな、継ぎ接ぎだらけの世界に」
アリスは責めるように言ったが、パルスィは首を振った。
「いいえ。それでも私達が、此処以外の居場所を亡くしてしまったのは事実だもの。今の私が出来ることは、地底と地上の交流に祝福を与えることだけよ」
「貴女の友達は、死んでいるのよ」
「彼女は戦ったのよ。自分の居場所を守るために、自分の意志で。そして命を賭して守ったの。それは、立派なことだわ」
アリスは唇を噛んだ。
狂っている、とは言えなかった。守り戦う、それもまた、人の営みの一つだろう。
神霊廟で見た、人々が造った高い城壁。自分たちの営みを阻害するものが現れれば、平穏な街に暮らすあの人々も、剣を手に戦うだろう。いや、豊聡耳神子は、それを見越して城壁を造らせたようにも思える……。あの城壁は、まったく使用されることが無くても、修復と整備がされ続けている。戦うことで、人は人であることが出来るとも言えるのかもしれない。
しかし。
「そうね。それは立派なことだわ。でも私は、探索を止めない。貴女のようには、ならないわ」
アリスは、パルスィを拒絶した。
アリスには帰るべき場所があるのだ。根無し草は、地に落ちなければ根を張れない。迷い子は家に帰る、それがあるべき正しい道のはずだ。
「そう」

パルスィは声を落として言った。しかし、それでもどこか、嬉しそうだった。
アリス達は怪我をした上海に包帯を巻いてポシェットに入れ、岸辺を歩いて、大きな橋の袂までやってきた。
パルスィが守護する、地底と地上とを繋ぐ風穴から続く深道の終わりにある橋だ。朱塗りの見事な欄干を持ち、ゆるいアーチを描いている。幾つもの橋脚を持ち、その全てに精巧な百鬼夜行の彫り細工が施されていた。全長はどのくらいあるのだろうか、遠目には五百間以上あるようにも見える。地上では類を見ない大きさだ。仄かな緑光の中にぼんやりと浮かぶその姿は、見るものに威厳を感じさせる。手放しで美しい。きっと名のある名工が創ったに違いない。
脇に設置された階段を登って、橋の入口までやってくると、パルスィは立ち止まった。
橋を通って旧都へ行くか、風穴を通って地上へ戻るかの分かれ道。
今は、選択の余地は無い。
「ここまでね」
「助かったわ」
「いいえ、私が撒いた種だし。私のほうこそ、ごめんなさい」
パルスィはまた頭を下げた。
「お詫びにもう一つ、情報をあげる。さっき思い出したんだけれど」パルスィはやはり無表情のまま。「私の調べた限り、一番最初に幻想郷へ併合された土地は、魔法の森よ」
「魔法の森……」
あの古城のあった洞窟。アリスは思い返した。魔法を無効化するトラップが仕掛けられている辺り、ただの遺跡ではないとアリスも感じていた。魔理沙が頭突きしたあの閉ざされた扉の中には、何が眠っているのだろうか。
「まだ探索を続けるつもりなら、調べてみたらいいわ。何か手掛かりがあるかもしれない。でも、気を付けなさい。幻想郷の賢者達は、探索者の存在を快く思わない」
「ふふ。知ってるわ。心配はいらない」

アリスは胸元の人参のペンダントに手をやった。
パルスィはそれを見ると、得心がいったように嘆息した。
「良かったら、最後に一つ、質問をしたいのだけれど」
「別に、いいわよ」
「なぜ、そんな武器に頼るのかしら」アリスの手の中にあるボウガンを指さしながら、パルスィは尋ねる。「あの魔神に師事していた貴女なら、いくらでも強い魔法を使えるでしょうに」
アリスは首を振った。
「そんなの簡単よ。私はね、人間に戻るために探索をしているの」
「人間、か」
「そうよ。だから私は、この探索の間は人間として戦う。魔法は使わない。ま、たまに空くらい飛んじゃったりするけど、それはいいでしょ。あの霊夢とか魔理沙とかもやってるしね」
パルスィは、ふふっ、と声を上げて笑った。
「可愛いわね。まったく、妬ましいわ」
「貴女に言われたくないわよ」
つい憎まれ口が出てしまう。橋姫に嫉妬心を煽られているのだろうか、そうに違いない。
「前へ進む力を持っている貴女には、この死んだ都は似合わないわね。貴女は既に人間だわ。幻想は、夢は見ない。私はここから離れるわけにはいかないけれど、せめてここから、貴女の夢が叶うように、祈らせてもらうわ。貴女の前途に、祝福を」
パルスィは別れの言葉を口にすると、緑色に光る蛍達とともに、長い橋の向こう側へと歩いて行った。
小さくなるその背に、アリスはそっとつぶやいた。
「ありがとう」
風穴の中を登る間、アリスは思考する。
パルスィは、罠を仕掛けたのは自分だと言った。
だが、明らかにあの怪物は、敵意以上のものを持ってアリスを迎えた。そしてその姿は、アリスが目を逸らしたいと思っている、過去の自分の姿をしていた。人の嫌がることをするのがあの化け物に与え

られた能力だったのだ。無意味に人形達を爆発させたことや、封印した虹色の魔法を使ったことがそうだ。
アリスの確信は揺るがない。あれは、八雲紫の仕業だ。あんな悪趣味は、紫以外では考えられない。
あれは、アリスが地底へ行くと確信した上で紫が仕掛けた罠だったのだ。博麗の儀礼刀が社の中に無かったのが、その証左だった。おそらく紫は、パルスィの仕掛けをより攻撃的に、より悍ましく改造したのだろう。アリスに警告を与えるために。
「紫……この借しは、高くつくわよ」
上海を傷つけてくれた礼はきっちりさせてもらう。アリスはそう心に誓った。

愚鈍なる賢者

その人形師、名前をアリス・マーガトロイドと言った。
普段は魔法の森の中に住んでいるようだが、頻繁に人里にやって来ては、子供達に人形劇を披露する。元人間であるから、歴とした妖怪、幻想の中の魔女となっても、人間との繋がりを断ち切れないのだろう。知り合いの骨董屋はそう評価していた。その点、その言葉を発した半妖の骨董屋自身や、幻想に片足を突っ込んではしゃぐ彼の妹分霧雨魔理沙、そして幻想それ自体である、他ならぬ自分自身とも似ている。だから、普段は決して人当たりのよくないアリスのことも、嫌いではなかった。ある種の共感を持てるのだ。
昼休みの休憩中、叩かれた戸を開いた先にその人形師が立っているのを見ても、笑顔を崩さなかったのはそういう理由だ。
「何よ、気持ち悪いわね」
西洋人形のように整ったその面からは、辛辣で容赦のない言葉が吐かれる。誰にでも平等に刺々しいその態度は、逆に好感が持てるというものだ。
「会うなりそれか。相変わらずだな」
苦笑しながらそう言うと、アリスはしれっと言ってのけた。
「思ったことを口に出しただけよ。仕方ないじゃない、根が正直なんだから」
……普段は決して、人当たりは良くない。
「何の用だ」
「貴女が呼び出しておいて、何の用だもないでしょう」
「そうだったか？」
「呆けるにはまだ早いわよ、慧音」
降神によって半人となった自らの身の上は、元人間の魔女アリス・マーガトロイドのそれと重なる。
慧音が寺子屋の中へ招くと、アリスは黙ってそれに従った。不機嫌そうな表情を顔に貼り付けているが、それはアリスのニュートラルだ。「以前、道に迷った旅人を泊めてやったとき、精一杯にこやかにも

てなしてやったのに、陰気で不気味で恐ろしいって言われたわ。ちょっと泣きそうなんだけど」酒宴の席でアリスがそう洩らしていたのを思い出して、慧音はクスリと笑みをこぼした。
「何笑ってるのよ、気持ち悪いわね」
「いや、かわいいなと思ってな」
「かわいい？　私が？　何言ってるの、そんなの当然じゃない。まさか、本当に呆けたの？」
「その減ら口がなければ尚更なんだがな」
　卓袱台の上には、先程まで行っていた学業試験の採点作業が中途半端のままで放り出されている。慧音は試験紙や採点用具を隅に追いやって席に座り、アリスには向いの席を示した。
「おや？　いつも持っていた本はどうした」
「ーー今は必要無いから、置いてきたわ」
「そういえば、文が探していたぞ。何かやらかしたのか？」
　射命丸文は、高位妖怪の天狗の中でも一際強い力を持つくせに重役に就かず、気ままに人里に出入りする、変わり者の妖怪である。新聞記者であるから当然なのかもしれないが、下らないゴシップが大好きで、お家芸とも言えるその突撃取材という名の無差別破壊行為には、慧音も閉口している。
「ちょっと前、妖怪の山に登ったのよ。それを根に持ってるんでしょ、天狗にアポ取らなかったって。知るかってのよ、そんなの」
　アリスは煎餅みたいに薄い座布団の上で足を伸ばす。処女雪ように細く白い足が、少しはだけたスカートの裾から露わになる。同性とはいえ、つい目が行ってしまう。アリスの容姿は性や生を超越した美しさを匂わせる。並の人間ならば、空恐ろしいと感じる程に。
「この畳って奴、どうにも好きになれないわ。直に座るには固すぎるし、椅子を置くには柔すぎるのよね」
　十二分に弛緩した表情をしながら文句を言う。この娘は自分をポーカーフェイスだと勘違いしている節がある。
「昼食は？」
　慧音が聞くと、アリスは首を振った。

「そういうあんたは？」
「まだだ。もうすぐ届くころだが、一緒にどうだ？」
「ものにも寄るわね」
「今度、その減らず口を弾幕に応用してみたらどうだ」
慧音がそう言ったとき、丁度、寺子屋の職員室の戸が叩かれた。
「あいてるよ」
入ってきたのは、言うまでもなく。
「慧音、弁当……って、なんだ、人形師も居たのか」
もんぺに軍手にほっかむり、いかにも今まで農作業をしていたという出で立ちの、藤原妹紅。服は泥で汚れ、頬には幾つも擦り傷を作っているというのに、輝くような笑顔を見せる。
色褪せたほっかむりを取ると、錦糸の如き銀髪が微風を含み、ふわりと柔らかく広がる。その髪一つ一つが神秘の宝物のように、窓から差し込む真昼の陽射しを反射して煌めく。身なりは薄汚れても、品の良さは隠せない。妹紅は野に咲く薔薇だ。
どっか、と風呂敷に包んだ重箱を卓袱台の上に置く。
「丁度良い、今日は少し作り過ぎちゃったんだ、お前も食べて行けよ」
ガサツな言葉使いとは対照的に、妹紅の声は細く高い。
「今日は茗荷のいい奴が手に入ってさあ。それで炊き込みご飯を作ってみたんだ」
そそくさと重箱の蓋を取りにかかる妹紅。心底楽しそうだ。慧音と出会った頃の妹紅は死んだ魚のような目をしていたものだが、人は変われば変わるものである。
開かれた重箱の中には、妹紅自慢の五目飯で作ったお結びが並ぶ。ほのかな醤油色をした五目飯は、隠元や牛蒡などの具をたっぷりと含んで、見た目にも色鮮やかだ。作りたてなのだろうか、湯気と一緒に茗荷の爽やかな香りが立つ。重箱の別の段には、これまた妹紅お得意の甘い卵焼きと、迷いの竹林の竹炭で焼いた雉肉の串焼き、そして河童連中からせしめたのだろうか、胡瓜と蕪のお新香が盛られている。確かに、二人で食べるには少々量が多い。
「汚らしいわねぇ。田舎の料理ってのは、どうしてこうも土気色なの

かしら」
　憎まれ口を叩くアリス。
「ああ？」
　楽しい気分に水を差されて本気で腹を立てたのか、妹紅は声を荒げた。
「嫌なら食うんじゃねーよ」
「別に嫌いだとは言ってないわ」
　スッ、と取り出したるマイ箸を誰よりも早く構える、準備万端のアリス。流石の妹紅も怒る気を失くして、ケラケラと珠が転がるように笑った。
　食事というものは、人間にとって重要な意味を持つ。活力を得るためや快楽のためだけではない。ある種の儀式的要素も含んでいる。一つの食卓を囲むと言うことは、相手を自分のテリトリーに迎え入れるという事であり、愛情や友好の印でもある。定期的に食卓を囲む事は、だから人間にとって重視されるべき行事であり、それが遂行されない家庭は十中八九、崩壊する。それが慧音の持論である。
　人間の生活を続ける慧音たち人外も、それは変わらない。美味いものを一緒に喰えば、あらゆるわだかまりも融解するというもの。
「見た目の田舎臭さの割には、上品な味付けじゃない」
　卵焼きを箸でつまみ上げながら、アリスは言う。
「分かってるじゃねーか。やっぱ卵焼きは甘くなきゃな」
　アリスの減らず口に妹紅が一々目くじらを立てなくなったのも、食卓を囲む事で生まれる連帯感のおかげだろうか。
　弁当はかなりの量があったのだが、結局、三人でペロリと平らげてしまった。……と言うより、ほとんどアリスと妹紅で食べたのだった。この二人、華奢な体をしている割に、食は太い。食べても太らないというのは妬ましい限りである。人生というのは不平等に出来ているのだ。
　妹紅は空になった重箱を見て、満足げに茶を啜った。今日のは会心の出来だったようだ。料理は妹紅の趣味の一つで、時々、祭りなどで屋台を出す程の腕前を持っている。

「で？　悩み事は何かしら？」
　湯呑みを片手に、アリスが慧音に言う。その顔はいつもの仏頂面に戻っていた。
「何故悩みがあると思うんだ？」
「牛女の癖に、食がやけに細かったじゃない」
「嫌味符『毒舌仏蘭西人形』とかどうだ？　お前の新スペルカード」
「冗談じゃなくて」その無表情は唯の仏頂面ではなく、真剣故なのだと気付いた。「あんた、一目で分かるほど、やつれてるわよ」
　ハッ、として顔に手をやる。荒れた肌と少しこけた頬、枝毛混じりの髪。自分でも分かる程に。きっと目の下には隈も出来ているだろう。
「そこの蓬莱人の気遣いを無駄にしないほうがいいわ」
　アリスの言う通り。妹紅が弁当を必要以上に多く作って来たのは、少しでも多く慧音に食べさせたかったからだろう。結局、慧音はあまり箸を付けることが出来なかったが……。
「何か私に頼みたい事があるんでしょう」
「うむ」
　慧音は小さく溜め息を吐いた。自らの不甲斐なさを恥じたのだ。自己管理すら出来ないようでは、人里の守護など、とても出来はしない。
「実はな」
　事件それ自体は、幻想郷では良くある事だった。人の失踪、即ち、神隠しである。
　神隠しは一般に人身売買や口減しの言い訳として使われる事が多いが、それと同じくらいの割合で、妖怪による誘拐、食害も含んでいる。しかし、各勢力の力関係が拮抗し安定した現在の幻想郷では、人里と不可侵条約を結ぶ妖怪達も多い。条約は、人間にとっては妖怪による無差別の被害を軽減出来、妖怪にとっては自分達の支配領域を人間の開発から守り、さらには人間達に自分達の存在とその恐ろしさを認めさせるという、一石三鳥の効果がある。条約を締結している主な妖怪と言えば、妖怪の山の天狗や河童などが挙げられる。河童の一部

が人間の事を盟友などと呼ぶのは、そういう背景もあるのだ。
だから、無秩序だった昔に比べ、今の幻想郷では、妖怪による神隠しは激減している。無秩序に神隠しを起こす妖怪は、勢力に属さない一匹狼か、それ程の知能を有さない原始的な妖怪、もしくは極一部の跳ねっ返りくらいなのだ。
今回の事件の特殊性として、まず一つに、短い期間中に連続して発生している点が挙げられる。通常、条約を締結するような妖怪が神隠しをする際、人里への警告と脅迫を目的に行われる。例えば、自分達の縄張りを侵犯した事に対する警告だとか、行き過ぎた開発を止めさせるための人質などである。そのような目的を持って行われる、妖怪達の政治活動としての神隠しは、連続して発生することはない。彼らの目的は人間を怖れさせる事であり、行き過ぎた活動は怖れよりも敵意を生むことを知っているからである。幻想郷の妖怪は、人間と本気で戦争をしようとは考えない。人間が居なければ、妖怪も存在出来ないからだ。人間を滅ぼして一番困るのは、妖怪自身なのである。
では野良妖怪や一部の跳ねっ返り達の仕業かと言うと、その可能性も低い。一般に人間というのは一個の弱小妖怪にとって高栄養価すぎ、連続して食害出来ないものなのだ。さらに大きな理由として、条約によって成り立つ秩序を乱されて一番困るのも、妖怪である点が挙げられる。前述の通り、妖怪による神隠しとは、一種の政治活動であり、一定の統制の下に行われるものだ。その統制が破られれば条約は破綻するだろうし、妖怪達の主張も通らなくなる。人間との戦争の危険も増す。だから、必要以上に混乱を招く行動をとる妖怪は、妖怪自身の手によって速やかに排除される。妖怪の山の哨戒天狗などは、実はその役割も負っている。
特殊性の第二は、その神隠しが昼間、太陽の輝く間に多く行われている点だ。一般に妖怪は夜を好む。夜の暗さは人間の恐怖心をより煽ることが出来るし、さらに重大な理由として、妖怪の妖力の源である月が出ているからだ。月の無い昼に活発な活動を行えるのは、人間の近くに暮らす人に近い比較的無害な妖怪か、強力な妖力を蓄えた妖怪だけだ。

第三の特殊性としてーーそしてこれが最も厄介であるのだがーーこの神隠しは時と場所を選ばないということだ。夜の森の中や川縁などの危険な場所ではなく、文字通り人里の中心にいた人間が、ほんの一瞬、目を離した隙に消えていた例も報告されている。並の妖怪の出来る事ではない。

「なら、紫でしょう」アリスは直ぐさま断言する。「そんな事が出来るのは、紫以外に居ないわ。何と言っても、神隠しの主犯だからね」

「だが八雲殿には、動機が無い」

「あんな何考えてるか分からないような奴の動機を考えたって無駄よ。どうせ楽しいからとか、そんなんでしょ」

「確かに、事件現場周辺では八雲紫らしき人物の目撃例もあるんだよな」妹紅が頬杖つきながらいう。「だけどな、多分、違うと思う。八雲紫じゃあないよ」

「何でそんな事分かるのよ」

「勘だよ、勘」欠伸をしながら、面倒臭そうに言う。「お前みたいに若い奴には分からないかもしれないけど、長く生きてると、分かるんだよ。これは八雲紫のルールじゃあない」

「ルール？　何よ、それ」

「人間てな多かれ少なかれルールに縛られて生きてるもんだ。妖怪もそう。長く生き強い力を手にして、誰にも束縛されなくなっちまった妖怪は、今度は己で課した制約に縛られるようになるんだよ。あの八雲紫がこんな分かりやすい痕跡を残す事を良しとするかいな」

「そういうものかしら」

「お前もその内、分かるようになるさ」

千年以上前の姫君であった妹紅の口から語られるその言葉は、さしもの毒舌アリスも反論を諦める程の説得力がある。理論は、良く分からないが。

「八雲殿が犯人ではない事は、私も同意見だ。何と言っても、霊夢が居るしな。ちょっかいを出すなら、先にそちらだろう」

八雲紫は博麗霊夢の後見人でもある。

「なら天狗かなんかの仕業でしょ。誘拐なんてあいつらの十八番じゃない」アリスは脳を止めた様に惚けた顔で言った。「あの下らないゴシップ新聞書くあいつ、射命丸文ならできるでしょ。幻想郷一の疾さがご自慢なんだからさ。文字通り、人間の目には止まらんでしょうよ」
「文はそういう事はしないよ。政治はあいつの嫌いな話題だ。あいつなら、もっと低俗で卑猥でしょうもないことをやらかすだろう」
アリスは何か言いたげに口角をキュッと上げた。が、何も言わなかった。
妹紅は茶を一つ啜ると、口を開けた。
「まあ、天狗も一枚岩じゃないだろうしな。アリスの言うとおり、文の他の、所謂、天狗連の政治屋連中が今回の事件に噛んでいる可能性もある。むしろ文がいるから、そういう事が起こりそうな気がする」
「何故だ、妹紅」
「決まってら。出る杭を打つ為だろうよ」
ブスっ、とデザートのよもぎ団子を串刺しながら言う。
アリスがクスクスと鈴が鳴る様に笑った。
「存外、怖いのね。平安の姫君の物の見方っていうのは。物騒なくらい鋭いじゃない」
「待て」慧音は両手を開いて二人を制した。「決めつけて掛るのは危険だ、視野を狭くする」
「じゃあ、一体誰がやってるって言うのよ」
「分からん」
「分からんて、あんた」
「分からんから、こうしてお前を呼んだんだろう」
「忘れてたくせして良く言うわ」
「兎に角。今、人里は神隠しの脅威にさらされている。対応に協力してくれないか」
「何をやれって言うのよ」
「今は警備を増やす以外の対応が思い付かない。何か良い案を出して貰えると有難い。単純に警備シフトに入ってくれるだけでも助かる」

「嫌よ」
「そうか。お前ならそう言ってくれると思っていたよ」
慧音には確信があった。アリスは人里で子ども達に人形劇を披露するのが日課だ。口には決して出さないが、相当の子ども好きである。人里で問題が起これば、必ず力を貸してくれるはずだ。魔理沙と一緒に度々異変解決に出向くのも、
「嫌ぁ？」
あまりに予想外過ぎて、慧音の声が裏返った。
「そりゃそうでしょう。私にメリット無いじゃない」
茶を啜りながら、アリスはしれっと言い放った。
信じられなかった。アリスは紛れもない妖と言えど、元々は人間である。里の人間にも友好的で、過去には人里で起こった事件解決に奔走してくれたこともあった。魔理沙と一緒に度々異変解決に出向くのも、異変の影響を人里まで波及させないよう、早期解決を図るためだと信じていたのに。
「利のない話には、誰も食いつかないわ。私は忙しいのよ」
非情にも、アリスは言う。声の調子は淡々とし、照れ隠しや嘘を吐いている風でもない。
「貴様……」
妹紅が目を怒らせて、アリスを睨みつけている。その瞳は今にも真っ赤に燃え上がらんばかりだ。
危険を感じた慧音は、妹紅を手で制した。
「力を貸してくれないのか、アリス」
慧音の問いかけには答えず、アリスは立ち上がった。
「話が終わりなら、私は行くわ。ご馳走様、お弁当、美味しかったわよ」
「おい、待てよ！　薄情者！」
妹紅が怒って吠える。慧音は妹紅の手を握り、争いにならぬよう、妹紅を抑えた。
「……意外と嘘が上手いのね、慧音。私は」怒号に答えるようにアリスは立ち止まったが、振り返ることは無かった。「真実を見て来たわ。此処を出て行くつもりよ」

それだけ吐き捨てると、アリスは寺子屋を去って行った。金色の波が引くように、後には彼女の甘い香りだけが残った。
「あいつ、あんな非情な奴だったとは」
妹紅は目を怒らせて、アリスの出て行った扉を睨んでいる。
「……仕方がない。人の考え方はそれぞれだからな」
頭痛を覚えて、慧音は眉間に手を当てた。
「真実って、一体何を言っているんだ、アリス……」
がらんどうの寺子屋に、蝉達の最期の大合唱だけが喧しく響いていた。

「あややや、これは珍しい、旅芸人の方とは。どうぞ一つ、お話を聞かせて頂けませんか？」
アリスは溜め息を吐いた。喧しいのは覚悟していたが、その覚悟が揺らぎ始める程の鬱陶しさだ。
射命丸文。
妖怪の発行する新聞である「文文。新聞」の記者にして、妖怪の山に住む鴉天狗の一人。里に最も近い天狗の異名を持ち、人妖問わず広い顔を持つ。ネタを求めて幻想郷を所狭しと飛び回り、取材という名の迷惑行為を行い、インタビューという名の挑発行為を繰り返す、幻想郷きってのトラブルメーカーである。
「団扇を下ろしなさいな。あんたと争う気は無いわ」
アリスはそう言って諸手を挙げた。
射命丸文。
鴉天狗の中でも飛び抜けた力を持つ、天狗の異端。千年天狗の異名を持つ、長い長い時を生きた妖怪。空を裂く烈風をまるで自分の手足の様に操り、その団扇の一閃は大嵐を巻き起こすと言う。かつて幻想郷を支配していた鬼達すらも恐れたという、底知れぬ実力を秘めた恐るべき女。
「おや、素直ですね。殊勝なのは良いことです。ジャジャ馬の跳ねっ返りだと聞いていましたが、なかなかどうして。聞き分けの良い子は好きですよ」

射命丸文。
それほどの力を持ちながら、一天狗の地位に甘んじる、巫山戯た妖怪。身分格差が激しいと言われる天狗社会にあって、剥き出しの特異点となって里を駆ける、爪を隠した鷹。
「最初に言っておくけど、私は旅芸人では無いわよ」
「なら、チンドン屋か何かですか」
「こんなに地味で質素で静かで上品で奥ゆかしくて気品溢れる美しいチンドン屋がいますか」
「十分喧しいし、十分派手な色をしていますよ、人形師さん」
ようやく団扇を下ろしながら、射命丸は言う。気を抜くように息を吐くと、その背から伸びた二対の巨大な黒翼が、するりと解けるようにして消える。
鉛色の曇天を背に、自身の黒い羽根の舞い乱れる中、射命丸はゆったりとした動作で地上へ降り立った。その様は、さながら堕天使。鋼嘴のように端正なその顔をするりと崩して、ニヤニヤ笑みを浮かべるその不真面目面をアリスの方に向けた。片方の高下駄で大地を抉り、もう片方の高下駄は戯けるように膝の横で揺れている。天狗特有の高足立ち、戦闘態勢を示す姿勢だ。顔はだらし無く笑っていても、油断なくアリスを警戒しているのだろう。無理もない。あまり親しくもない人間が自分の家に土足で入り込んでいるのを見れば、誰だってそうする。まして射命丸は、縄張り意識の強い、自負と自惚れだけは一人前の天狗の一人である。
妖怪の山の山中には今、風吹き荒び、木々ざわめき、有象無象の叫び声が木霊している。低い天を覆う分厚い戦雲が渦巻き逆巻き、とぐろを巻いた龍となって飛翔し駆け抜けて行く。雨も無いというのに、パラパラと水が降り注いだ。巻き上げられた小川の水が大地に還る、その帰り道にアリスの肌理を選んだのだろうか。緑色の針葉樹の葉がちぎれ飛び、風車のようにくるくると回り乱れ飛びながら、天へと登ってゆく。荒ぶる自然を前に、まるで場違いとも思える、美しい少女が一人。首からフィルム式のカメラを下げ、楓の葉型の団扇と分厚い文花帖を手に、ニヤニヤ面に殺気を込めて立つその嘘のような、幻

想のような光景。御伽噺の中の妖山。狂気の山脈。
まともな神経の人間なら、一秒だってこんな場所には居られまい。今更ながら、自分が妖である事をアリスは実感した。そう、死線の際に立つ今この時をすら、冷静に風景観察などしている自らの精神構造にこそ、戦慄している。
「今日は良い天気ですねぇ。空も低くて、風も気持ち良い。こんな日は、空を一掴みに出来そうな気がしてきませんか」
射命丸は紅い楓の葉の団扇でゆったりと空を扇ぐ。その度生まれ落ちる風龍の爪の閃きが、宙にばら撒かれ、触れるもの総てを捻り斬る破壊空間を形成している。それは、射命丸の戦闘半径にしては狭い。射命丸はアリスに似ているのだ。隠した爪の大きさは、アリスよりも大きいかもしれないが。
「ほらっ」
天高く、手を掲げる射命丸。
雲が割れ、血のように赤い夕陽が射命丸を照らしだす。
気象をすら支配するその恐るべき力。その威圧感に、胸に抱えたグリモワールをすら重く感じる。
「こういう天気の日は、古来より絶好の日とされています。絶好の、戦日和です」
射命丸がそう言ってにっこりと笑うのを、アリスは視界の端で捉えた。
行く手を遮る大妖怪の、一挙手一投足を注視し警戒しなければならないこの状況。なのに、アリスの視線は射命丸の股間付近を離れる事が出来ない。嘘のように短いそのスカートが刻む激しいフラメンコを、開いたその足の、肉付きの良い太ももの、揺らめくその肌色の影を、その先を。
射命丸が何か言って動く度に、ピクリピクリと跳ねるスカート。しかし、この強風の中でも決してめくれ上がったりせず、下着が露わになることも無い。さっき上空に居た時にも、チラリともしなかった不思議なスカート。
「前から聞きたかったんだけど、あんた達のそれ、どうなってるの？」

アリスが射命丸の股間を指さすと、千年天狗は慌ててスカートの裾を押さえた。
「あやや、ど、どこを見てるんですか！」
顔を赤らめて、一歩下がる。わざとらしいくらい若々しい反応だ。
「ホント鉄壁ねえ。それどうやってやってんの？　今度教えてよ。そうすれば、弾幕ごっこのとき、ドロワ履かなくて済むじゃない」
「何の話ですか、何の！」
針葉樹の葉の乱舞の中、射命丸は団扇を脇に挟んで文化帖を開き、サラサラと万年筆を動かした。
「えーっと、里の人形師は視姦が趣味、女子の皆さんはご用心、と」
「ちょ、ちょ、ちょっと！　何意味不明な事書いてるのよ！　事実無根よ！」
「現行犯じゃないですか。流石はガチ百合の総本山」
「勝手な渾名を付けるな！　私はノーマルよ！」
「嘘おっしゃい。野獣のような眼光をして」
「誰がそんなものしますか！」
くるりくるりと回る針葉樹の葉。天に昇るその道の最中、アリスの近くをふわりと舞ったそれは、次の瞬間、張り巡らされた鋼鉄の極細ワイヤーによって、バラバラに切り刻まれ爆散した。
アリスの結界である。
それと同時、弾かれたように射命丸がアリスの方へ突っ込んで来る。文化帖も万年筆も投げ出して、砲弾すら止まったように見える程の速度で。魔法で強化した動体視力によってその姿を捉えたアリスは、右手を突き出して、前方にワイヤーの防御壁を集中させる。
それを認めたはずの射命丸はしかし、そのままの速度で防御壁に突っ込んだ。
すわ、射命丸の五体がバラバラに四散する……その寸前、射命丸の姿がどろりと溶けて中空に消えた。
「残像です」
背後からその声が響いた瞬間、アリスは手を開いてワイヤーを後方へ殺到させたが、間に合うべくもなく。ワイヤーの結界をすり抜けた

射命丸は、全体重に幻想郷一の速度を乗せてアリスの背を蹴りつけた。アリスの背骨がミシミシと音を立て、身体全体が弓状に大きく湾曲するほどの衝撃。事前に予想して張った魔法障壁による緩和がなければ、確実に即死している威力だ。

もちろん、アリスに掛る重力と摩擦力は、その衝撃を受けてもアリスの体を拘束し続けられるほど強くはない。風塵の中の木の葉のように、アリスの肢体は吹き飛ばされた。

その前方には、アリス自身の張ったワイヤー結界がある。射命丸はそれを狙って残像を使った攻撃を仕掛けたのだろう。そしてそれは、アリスも予想していたことだ。

途切れそうになる意識を気力で手繰り寄せる。足を突き出し、鋼鉄を仕込んだブーツの踵で結界のワイヤーを蹴った。反動を使って跳ね返った速度そのままに、反対に射命丸へと突っ込む。握った銀色のナイフの切っ先で、空を切り裂きながら。

切っ先を嫌ったのか、射命丸は身体を躱してアリスの突撃をいなした。

無防備な側面に回り込まれた形だが、しかしそれは並の魔法使いであればの話だ。アリスに死角はあり得ない。なぜなら、アリスには強力な味方がいるからだ。

射命丸が団扇から発生させた風の牙を振りかぶったその時、伏せ隠していた無数の武装人形達が射命丸へ殺到し、反射的に防御に回った射命丸のその態勢を崩した。ワイヤー結界の中ならば、人形達は自由自在に移動する事ができる。結界の中に飛び込んだ射命丸は、蜘蛛の巣に掛かった蝶に等しい。アリスはそのまま、態勢を崩した射命丸を、手にした切っ先で狙う。射命丸は人形の攻撃を無視し、風の牙をアリスへと向けた。

白刃と風刃が交錯し、閃光が爆ぜる。

発生した強力な衝撃波に、人形達が吹き飛ばされ、張り詰めたワイヤーが弛む。

その瞬間、アリスの胸の谷間に隠れた上海が飛び出し、射命丸の喉元へ剣を構えて突撃した。

しかし、射命丸の身体は再びどろりと溶け消える。後には焔の軌跡を残し、結界の外側で高足立ちする射命丸の姿が、視界の端に映った。ワイヤーの弛みの隙間を抜けたのだ。素早く的確な判断。速度自慢は、飛翔だけではなかった。

手強い。

分かっていた事ながら、そう思わずにはいられない。

「ほら、しているじゃないですか、その眼ですよ」

喉元からだらりと血を流しながら、射命丸は言う。

「氷の微笑と言って欲しいわね」

はだけた胸元を直しながら、アリスは言う。その言葉は、吐き出した血反吐で濁った。鈍痛が連続的に続く。背骨へのダメージは大きいようだ。次は射命丸の速度に追いつける自信が無い。

アリスは、上海と一緒に深呼吸をして、気脈を整えることに努めた。

「息が上がっているようですね。運動不足ではないですか？」

「そういうあんたは、貧血なんじゃないの？」

射命丸の高足立ちも、小刻みに震えている。上海の付けた傷は、浅くは無いようだ。

「どうやら、私は貴女の実力を過小評価していたようですね。たかが魔法使いごときが、ここまでやるとは。正直、侮っていましたよ。その点は謝罪しましょう」

射命丸は、手にした団扇を放り投げた。両足で大地を踏みしめ、大きく両手を広げると、その背から再び、巨大な二対の黒い翼が広がる。

風が、濃くなった。

天に空いた穴より差し込む赤光に紛れ、空気の塊がごうごうと音を立てながら射命丸へと流れ落ちて行くのが見える。圧縮された空気の流れが光を歪め、ぐにゃりと景色が揺らめく。

ひしひしと、危険が迫っている気配を感じる。

気づけば、全身の産毛が逆立っていた。

射命丸から発せられるドス黒い気配は圧倒的で、千年天狗の名に相応しい。ただ在るだけで国の一つや二つは統べることが出来そうなほどの威容。アリスすら、ひれ伏しそうになるほどの。かつ、それで

もまだ、射命丸の業には深みを感じる。隠した爪は、アリスよりも大きい。
しかし、今、一つの決意を胸にしたアリスには、相手の爪の大小など関係は無かった。
アリスはグリモワールを開く。
封印していた禁呪、七色の旋律を口ずさむと、アリスの身体から七色の虹が発せられ始める。
それは七つの色、即ち美を支配する魔法。一つ間違えれば世界を滅ぼしかねない、恐ろしい毒を含んだ旋律。
「む。その魔法は、一体……」
流石、危険性を見ぬいたのか、射命丸は一歩、距離を取った。
アリスは、十指に絡みつく、人形たちの紐を切り捨てた。アリスの愛しい人形たちを、この禁呪に巻き込みたくなかったからだ。力と命令の供給が止まった人形たちは、がらがらとその場に落ち崩れた。ふわりと風になびく白い糸が、虹色に輝くアリスの髪に触れ、炭屑のように色を失い、風に舞い消える。
ふと、糸が切れたはずの上海が、もぞもぞと動くのが視界の端に映った。風に靡く糸を掴み、自力で糸を繋ぎ直して、再び飛び上がる。その身は虹色の旋律を纏っても炭にならず、むしろその輝きを増している。
父がアリスのために創ったこの人形は、どこまでもアリスとともに行こうとしてくれている。
「最初に言ったように、私はあんたと争う気は無いわ。だけど、ここで死ぬつもりも無い。そして」
全身を覆い始めた虹色の輝き。糸を通じて、上海へも七色の毒が回って行く。
刮目する射命丸に指を突き付け、アリスは宣言する。
「あんたと争う気は無いが、天狗たちには滅んでもらう」
射命丸は、鼻で笑った。
「ハッ、無謀な。たかが一個の妖怪が、我等全てを皆殺しにするなどと、馬鹿げた夢想も良いところです。気でも触れたのですか。貴女は

もう少し理性的な人だと思っていましたが……一体何が貴女をそうさせたのですか」
「自分の胸に聞いてみなさい」
「……はて？」
「最早、言葉を交わす必要は無い」
虹色の光を纏った上海を、射命丸へ突撃させる。射命丸の二つの結界、風龍の爪と圧縮空気の壁をいとも簡単に切り裂いて、上海は射命丸の懐へと飛び込んだ。
射命丸は真横に飛び退いてそれを躱し、地に落ちていた団扇を拾い上げて、同じく射命丸へ突撃を掛けていたアリスへと投げ付ける。
紅い楓の葉型の団扇は、アリスを覆う虹色の光の膜に触れると、見る見る色を失い、モノクロになって崩れ落ちた。紅色は七色に吸収され、光の膜の上を生き物の様にうねる。いや、生きているのだ。色とは、美とは、命そのものなのだから。
アリスは手に入れた紅色を紐状に伸ばして、射命丸へと投げ付ける。
「これはあの伝説の、色を奪う！」
禁呪の正体をその豊富な経験から察知した射命丸は、瞬時に複雑な印を組むと、小さな竜巻を生み出し、アリスへと投げ付ける。素早く的確な判断である。色の無い竜巻は、七色の禁呪では殺せないと読んだのだろう。
放った赤い糸は竜巻によって千切れ飛んでしまった。竜巻はそのままアリスの方へ向かって来たが、間一髪、アリスはそれを躱した。掠めただけで、服がズタズタにされ、アリスの肌理が切り裂かれる。竜巻の中には真空の刃が仕込まれているらしい。並の防御壁ならば余波だけで死んでいただろう。オーロラバリアの上からでもこの威力。一瞬でこれ程の攻撃力を放つ射命丸はやはり、恐るべき大妖怪である。七色の光の風の中に、アリスの血煙が舞い行く。
竜巻の余波で吹き飛ばされたアリスは、転がりつつ体勢を整え、意識を失う事を防いだ。地面に這いつくばった手足を突っ張り、上体を起こす。

眼前には、射命丸の揺れるスカートがあった。
「正気ですか？　その虹は、一度暴走すれば周囲凡ての色を奪い、壊し奪い殺し尽くすまで止まらない、貪欲なる美の魔法だと言います」
射命丸の声に、天から降る射命丸の声が重なる。上空を見上げると、其処にも射命丸がいた。
「かつて光あふれた魔界を、生命の住めない暗黒の世界に変えたのも、暴走したその魔法だと言うではありませんか」
アリスの後ろからも輪唱が聞こえる。
「そんな魔法を地上で使うとは、貴女はどうやら本気で狂ってしまったようですね、アリス・マーガトロイド」
右にも、左にも。
無数の射命丸が、アリスを見下していた。
天狗の十八番、影分身である。
無数の射命丸は、その指先で一斉にアリスを責め立てた。
「貴女はこの世界の調和を乱す源だ、生かしておくわけにはいかない。ここが貴女の墓場と心せよ、アリス」
アリスは、笑った。
高らかに、腹の底から。
訝しむような、憐れむような射命丸の視線が突き刺さる。
射命丸の言う通り、アリスは狂っているのかもしれない。だが、此処に、この幻想郷に、いまだ正気を保ち得る者など存在するのだろうか。刹那に生きる人間ですら狂気に狩られ、妖へと身を落とす。況や、妖怪をや。世界自体が狂っているのなら、アリスの狂気は寧ろ健全であろう。
しかし。
それでも。
だから。
なお。
恥知らずの「真実」には、激しい怒りを禁じ得ない。アリスを今突き動かすのは、純粋な憤怒だった。
アリスは大きく息を吸い、そして吐いた。

ゆっくりと立ち上がる。
虹は感情のうねりを現す。乱れる髪、裂ける服。アリスの全身の毛孔から、七つの色が迸る。くねりうねる虹の糸は絡まり集まり、巨大な八つ首の龍の姿を形取る。
上海が手にした剣が煌めいた。それは、虹を固めて作った、美しき生命の剣。
上海がそれを高々と掲げると、八つ首の貪欲なる邪龍が呼応するように咆哮する。天が、地が、七色の極光に満たされて行く。
その力の表現を目の当たりにしても、射命丸はなお毅然と立つ。
「……最後に聞きましょう。貴女は、天狗の里に侵入して、一体何をしていたのです？」
降り注ぐ極光の中で、射命丸達が今更に問う。
「真実を、見てきたわ」
「真実とは人々の心の中にある妄想の最大公約数を言うのです」
「賢者らしい、穿った物言いね。反吐が出るわ」
アリスの感情の昂ぶりを反映して、一匹の巨大な虹龍が射命丸達の一人に飛びかかった。
射命丸はそれを片腕で往なし、砕き、拉ぎ、屠る。事も無げに、どうということもなく。それは、水が上から落ちて下へ流れてゆくが如く。宇宙の法則、絶対真理、逃れ得ぬ運命のように。出来て当然、そう思って疑いもしないその意思の強さこそが、射命丸の射命丸たる所以。
「賢者？　ああ、そう言えば、今日は丁度あれの日ですね。成る程、見てきたんですか」
射命丸は皮肉めいた笑みを浮かべた。
「ふ、ふ。ま、怒る気持ちは分かりますがね。老人達のごっこ遊びに、そう目くじら立てる事もないでしょう」
「……ごっこ遊び？」
「賢者達の集いなど、実際には意味の無い戯れです。八雲紫も十分に承知している。この幻想郷で、統一された意思決定機関の存在など不可能でしょう。ましてそれを構成する者たちが、あんなに愚かで私欲

に塗れているようでは」
「……まさか」
「一部の愚か者共を理由に全てを破壊しようなどと、それは飛躍しすぎた考えでしょう。やはり貴女は狂っている」
「まさか、あんたは……」
「無用な問答でした。その狂気が他へと感染する前に、貴女には退場して頂く」
射命丸達は両手を構え、それぞれ違った印を組んだ。これだけの量の影分身をしながら、しかもそれぞれが別々の術を放つなど、あり得ない術力だ。射命丸文は幻想郷でも最大級の力を持つ、八雲紫はそう評価していたが、それも頷ける。
「では、さようなら。アリス・マーガトロイド」
アリスはゆっくりと首を回し、景色を眺める。
天より降り注ぐ赤光はまるで、大地に突き立てられた断罪の剣だ。千切れ飛ぶ雲、吹き荒れる烈風、木霊する有象無象の阿鼻叫喚。妄想の中で見慣れた、終末の光景。悲しいくらいに、美しい。
世は事も無し。何もかもが狂っている。
今、ようやく、アリスは気付いた。
自分はいまだ、不思議の国を彷徨っている最中なのだと。
「……何故、魔法を止めるのです？」
虹色の龍の輝きは、縺れた糸が解けるように柔らかな光の帯に変わり、空気中に散乱して消えた。天を貫かんばかりに猛った光の奔流は、鼻を突くオゾン臭へと変わり、空を覆っていた極光はもはや跡形も無い。
アリスは糸に魔力を込め、断ち切った糸を再び繋ぎ直した。飛び上がった人形達を武装解除させ、魔法で小さくする。ポシェットの中に入るよう命令すると、従順な人形達は整然と所定の場所に戻って行った。たった一人、上海だけは、アリスのボロボロに破れたケープに捕まり、ポシェットの中に収まろうとはしなかった。それでいい、そう、アリスは思った。
「何故です？　答えなさい、人形師！」

珍しく声を荒げて、射命丸が言う。
「つまんないのよ。あんたのスカート、いくら動いてもチラリともしないんだもの」
「はあ？」
「鉄壁過ぎるのよ」
それ以上何も言わず、アリスは地面に散らばった糸や服の切れ端などを拾い集めた。地球に優しい、それはシティ派のステータス。
射命丸は暫く警戒していたようだが、アリスの様子が変わらないと見ると、影分身を解除したようだ。射命丸達の姿は一陣の風とともに掻き消え、たった一人に戻った。
「勝ち目が無いことを悟って降参したというわけですか。しかしそれでも、貴女には縛に就いて貰わねばなりません。幻想郷の秩序のために」
納得が行かない顔をしつつも、射命丸は言った。千年生きた天狗としての使命感だろうか。
しかしそれは、足りないのだ。圧倒的に。
憤りを通り越して、憐れみをすら覚える程に。
「もう天狗なんかに興味は無いわ」
「ハッ。天狗を滅ぼすなどとうそぶいたのは法螺だったのですか」
「いいえ、嘘じゃないわ。遠からず、天狗は滅びる。でもそれを為すのは私じゃあないと分かった。だから私は、もう興味は無いの」
「馬鹿げた事を」
「滅ぼすのはあんただ、射命丸」
人差し指で、射命丸の神を突く。
射命丸は、突き付けられた指を見て、しばらく息を止めていたようだ。
やがて、震える声で、射命丸は声を絞り出し、
「――馬鹿げた事を」
自動人形のように繰り返した。
「これは予言よ、射命丸。天狗共は、あんた自身の手によって滅ぼされる」アリスは、ありったけの感情を込めて、言った。「いつかあんたが、

真実にたどり着いた時に」
「そんな戯言に付き合うつもりはありません」
怒鳴るようにして、射命丸はそれを一蹴した。
「さあ、おとなしく就縄されなさい」
射命丸は迫るが、アリスは背を向けて、ボロボロのケープを羽織り直し、さっさと山を降り始めた。
こんな場所に、これ以上用は無い。
「アリス！　煩わすな！」
射命丸が、彼女には珍しく、感情を剥き出してヒステリックに叫んだ。
アリスは、振り返って言った。
「煩わしているのはあんただ、射命丸」
「な、何！」
「あんたは命を掛けて戦うにも値しない。穢れた真実に喰い殺されるのが、あんたにお似合いの死に方よ」
「何を言って……」
「意味が知りたければ、自分で探しなさい。私はもう、あんた達に構うつもりは無い。自分達の業に溺れるがいいわ。……帰るわよ」
「待て……ッ？」
射命丸は身を乗り出しかけたが、寸前、静止した。
その喉元に、いつのまにか、鈍色に光る短刀の切っ先が突き付けられているのに気付いたからだ。
あの射命丸が今の今まで存在に気づかないほどに、その妖は気配を消すことに長けていた。
まるで路傍の石のように、さり気なく、無邪気に。
「なぁんだ、つまんないの。もっと派手なの見たかったのになー」
そいつは、古の血に赤黒く濁ったその凶器をぽいっと放り投げると、とすっ、と手にした白鞘に収まった。そして、とてとてとアリスに近寄って、屈託の無い笑顔を見せる。
「ね、ね、さっきのかっこいいやつ、もっかい見せてよ」
「駄目よ」

「いーじゃん、ケチ」
「ケチで結構。倹約は美徳よ。お姉さんにそう教わらなかった？」
アリス達はそのまま談笑しながら山を降りて行った。
背後で射命丸が何か叫ぶのが聞こえる。しかし、それはアリスには届かない。届く必要はない、聞く耳も持たない。
山を降り切った頃、ポツポツと雨が降り始めた。
梅雨の残り香がする。
これから、憂鬱な暑い夏が始まるのだ。
射命丸文は、何も知らなかった。
アリスは、堪らなく徒労感を覚えた。

その存在に気が付いたのは、本当に偶然だった。
梅雨の晴れ間の昼休み、人里の子ども達に寺子屋の庭で、人形劇を披露していた。あの日は蒸し暑く、子ども達は団扇片手に観劇していた。
演目は、アンデルセンの「人魚姫」。悲劇的で陰気なラブロマンスで、アリスは大嫌いだが、子ども達、特に少女達へのウケはいい。古今東西、悲劇のヒロインというのは、少女たちのあこがれの的だ。愛に命をかける情熱的な生き方が魅力なのだろうが、そこにはやがて来る老いへの恐怖、もしくは美しいまま死にたいという欲求が隠れている気がする。だから、その恐怖や欲求が無くなった人外の自分には、理解ができないのだろう。そうアリスは考えている。
劇が終わった後、多くの生徒は教室に戻って行ったが、劇の余韻が冷めやらぬ女児たちは、庭にある砂場でままごと遊びをしていた。劇の舞台装置、と言っても小さな机に布を被せて小物を飾った程度のものだが、それらを旅行鞄の中にしまいこみながら、女児達の遊びをぼんやり眺めていた。
最初に違和感を感じたのは、匂いだった。バラ科の植物の、脳を突き貫かんばかりの甘ったるい香りがした。匂いは強烈なのにその印象は酷く曖昧で、いつからしていたのか、さっきからなのか、もっとずっと前からしていたのか分からない。その匂いを嗅いでいると意

識が朧げになってくる。鼻腔の奥に麻薬を塗りたくられているかのようだ。しかし不思議と、嫌悪は覚えなかった。

そのうち、ぼんやりと眺めていた女児達のままごと遊びが、少しおかしいことに気づく。女児たちは誰も居ない方向に向かって手を叩いたり、泥で作った団子を差し出したり、話し掛けたりしているのだ。すわ拐かしの妖かと身構えるが、どうも気配を感じない。幻視をしても何もおらず、アリスは首を捻るばかりだった。ただ、きゃっきゃっと嬉しそうに笑う女児達の笑顔は眩しく、心底楽しそうであった。その声に毒気を抜かれ、ただその様を無心に眺めていた。

そのうち、寺子屋の教師である上白沢慧音が庭に出てきて、子ども達を寺子屋の中へ戻らせた。慧音は律儀にアリスへお辞儀をして、子ども達の後に続いた。慧音は真面目すぎるきらいがある。アリスが好きでやっている事なのだから放っておけば良いのに、そう思う。あまり気を遣われると、逆に警戒されているようで不快な場合があるから。まあ、慧音に限って、それはあり得ないのだが。

一人残されたアリスは、何気無く砂場へ近寄った。子ども達の様子が気になったのか、それとも単に遊びっぱなしの砂場を片付けしようと思ったのか、今となっては分からない。

砂場に近づくにつれ、薔薇の匂いは一段と強まった。蒸せ返るような、しかし不思議と息は詰まらない、得体の知れない甘い香り。

女児達が描いたのだろうか、砂絵が描いてあった。塗り潰された大きなマルに、手を伸ばす人々の絵。手のひらを太陽に、だろうか。それにしてはマルが黒く潰れている。きっとこれは月だ、ぼんやりとそんな事を考えた。

戯れに上海を取り出し、砂の上でステップをさせる。月に手を伸ばす人々の上で、くるりくるりと舞う上海。この絵に、権力に群がる人々の浅ましさを見出していたアリスは、上海がそれを超越したかのようで、満足した。我ながら子どものようだ、そう思った。

命令してもいないのに、上海はスカートの裾を少し持ち上げ、誰も居ない方向に向かってぎこちなくお辞儀をした。完全自立稼働にはまだ研究が足りていないが、こういう事はままあった。其の時アリス

は、特に気にもしていなかった。
ふと目を上げると、いつの間にか、目の前に少女がぺたり座りしていた。
黄色いラインリボンが目立つ大きな黒い帽子を深く被って、顔が見えず、やや緑が掛かった灰色の髪が覗くばかり。胸元には、青い、何か丸いボールのようなアクセサリがついており、その丸い物体から伸びる管が、彼女の体を束縛するがごとく捻じれ巻き付いていた。バラのような花が描かれた緑色のスカートが、花のように砂の上に広がっている。体の左右脇に拡げられた足や、浅黄色の衣の袖から覗く手は驚くほど白く、雪のよう、というより、光を浴びない深海生物のようですらある。
蜉蝣みたい。
それが第一印象だった。今も、その印象は変わっていない。清く、儚く、美しい、薄羽蜉蝣。
気が付くと、少女が手を叩いていた。
「わあ、すご〜い」
耳に残るその音も、はしゃぐ黄色い声も、不思議に不気味に朧げで、一体全体、いつから耳に届いていたものか、見当がつかない。たった今始まったようにも思えるし、もっと昔からずっと聞こえていたようにも思える。
「お人形さん、お上手ね」
少女はその夏の終わりのような白い手を伸ばし、上海の頭を撫ぜた。くすぐったそうに、上海が身を捩った。
少女が顔を上げた。
大きな緑色の瞳に、少し上気した桃色の頬をした、美しい少女だ。細い眉毛を快活そうにくゆらせ、ニコニコと屈託の無い笑顔を浮かべている、が。アリスと目を合わせているはずなのに、その瞳は虚空を揺れていて、焦点が合っていないようにも見えた。
「人形師さんは、どうしてそんなに人形劇が上手なの？」
いきなり質問をされて、なんとなく惚け気味だったアリスの脳は慌てた。

「え、そりゃあ、まあ。好きだからね」
「ふーん、好きだと上手になるのか。じゃあ私はお姉ちゃん上手って訳ね」
「お姉ちゃん？」
「お姉ちゃんの作るフレンチトーストは美味しいのよ～。甘くってフワフワで、おそらの太陽みたいな味がするのよ～」
「へえ」
「今日はいいお天気よね～。ちょっとジメジメするけど、おそらも高いし」
「はあ」
「あ、お空もお燐も元気かなぁ。心配だわー。あの子達、おばかだからな～。あ、昨日会ったばかりだった」
「ん？」
少女の話は飛び飛びで、少しズレている。アリスと会話をするというより、心に浮かんだ事をそのまま口に出しているようだ。言葉の滝である。
少女は上海をくわっと掴むと、持ち上げて眺め回した。手を引っ張ったり、髪を手漉きしたり、スカートの中を覗き込んだりしている。アリスは慌てた。
「ちょ、ちょっと、止めなさいよ。上海が嫌がってるじゃないの」
少女の手から上海を引っ手繰った。
ボサボサになった髪を櫛で梳き、乱れた着衣を整える。関節の具合を確かめ、肌に傷が付いていないかチェック。問題は無かった。
上海を肩に乗せ、顔を上げると、少女の姿が消えていた。
何処へ行ったのかと首を回して探しても、とんと見当たらない。
「あのさ」
すぐ隣りから声がして、目玉を真横に向けると、少女が立っていた。アリスは驚き、持っていた旅行鞄を取り落としてしまったので、慌てて拾った。
少女には、気配が無かった。
思い当たる妖怪を一人、思い出す。

地底の管理者、古明地さとりの妹にして、覚妖怪の証であるサードアイを自ら閉じた少女。その影響で、覚妖怪の十八番である「心を読む」力を失い、代わりに「無意識を支配する」力を手に入れた妖怪。
「貴女、古明地こいし？」
彼女のサードアイは、未だ固く閉じられたままだった。
以前、魔理沙を地底へ潜入（と言うか乱入）させた時、妖怪の山の神社で会ったことがある。と言っても、魔理沙に持たせた遠隔通信用人形越しで、顔を見たことは無かった。声から幼い印象を受けていたが、古明地こいしは思った以上に少女であった。
「怒ったってことは、人形師さんは、そのお人形が好きなんだね」
ふらりふらり、陽炎の様に揺れながら、古明地こいしはとめどない言葉の滝を吐く。
「好きな人に嫌な事されたら、自分も悲しいもんね。分かるよ、こんな私でも」
後手を組んで、拗ねたように、パッと砂場の砂を蹴り上げる。
砂煙が舞って、気付いた時には、こいしはアリスの後ろに背合わせで立っていた。ほんの一瞬でも視界から消えたら、次の瞬間には全く別の所に居る。
「じゃあさ。人形師さんは、嫌いな人が誰かにいじめられてたら、なんて思うのかな？」
「そりゃ、ざまあみろって思うわ」
即答したのを覚えている。
こいしは腹を抱えて笑っていた。
「人形師さん、正直だね」
「嘘付く必要無いじゃない」
「面白〜い。地底の鬼さんも正直だけど、人形師さんも負けてないや」
こいしはの翠玉ような瞳をキラキラ輝かせながら、アリスを見ている。その様に、何故か、一抹の不安と恐怖を感じた。
「ねえ。じゃあさ、もし……」
あっけらかんと野放図に笑っていたこいしが、その時だけ、顔を曇らせたことが、今も印象に残っている。

「もし、人形師さんの全然知らない人が、目の前で誰かに辛い目に遭わされてたら……貴女は、どう、思うかな」
「そう、ね……」
古明地こいしが何を思ってそんな事を口走ったのか、そのときのアリスには分からなかった。
だから、負けじと、というわけではないのだが、アリスも頭に浮かんだ言葉をそのまま、素直に口にした。
「多分、不快に思うでしょうね」
結果的にその言葉が、アリスが探索を始める切っ掛けになってしまったのだ。
「不快……不快……」
こいしはその言葉を反芻するように、何度も口にしていた。
曇った顔は、みるみる明るくなってゆく。
「そうか、これは不快なんだ。私、ちゃんとイヤだって思えるのね、ふふっ」
一人でうんうんと頷くこいしを見ていると、なんだかほのぼのとしてきてしまう。
「まあとりあえず、止めるんじゃないかな、多分。でも勘違いしちゃダメよ。あくまで不快だから止めるんであって、人助けじゃあないわ。シティ派にとって偽善は恥よ。人間素直が一番」
「うんうん」
ニコニコこいしは、前触れもなく、いきなりアリスの手を掴んだ。
「うぇ、な、何よ?」
「人形師さんにね、見てもらいたいものがあるんだ。一緒に来て」
言うなり、どんどんとアリスを引きずって歩いて行ってしまう。足がもつれて転びそうになり、アリスは叫んだ。
「ちょ、ちょ、ちょ、待ってよ！　こいし！」
「ばあ！」
振り返ったこいしの顔には、真っ白い子どものアルカイックスマイル。
アリスは面食らって、後ろにのけぞった。

能面だ。
面がずれると、元のこいしの太陽笑顔。
「あっはっは、いいでしょ、この間、拾ったんだ～」
「貴女ホント、マイペースね……」
こいしは歩きながら天に手のひらを突き出して、それを仰いだ。
その先の空には、白い上弦の月がかかっていた。
「あの月を掴み取ろうだなんて、思いあがりも甚だしいよねぇ」
つぶやくようにこいしが言ったその言葉の意味を、数刻後、アリスも知ることになる。
あの日。
古明地こいしに連れられて行った妖怪の山の中で、アリスは真実を見、そして、この妄想の世界から抜け出すことを決めたのだ。
希望の面を手にし、感情を取り戻した古明地こいしは、真実を前にし、それでもこう言っていた。
「これから良くして行けばいいんじゃない？　此処は、みんなの幻想郷なんだしさ」

神の城

くるくると嬉しそうに宙を舞う上海。一人で住むには広いとは言え、飛ぶには狭い室内、器用に物を避けて上海は踊る。繋いだ糸が絡まる事もない。安定した飛行だ。

ようやく、上海の修理が完了した。地底であの悍ましい妄想の化け物に傷付けられて以来、魔法の森の自宅で、アリスは上海の修理に専念していた。上海には何故か耐性があり、あの禁断魔法によるダメージすらも大した事は無かった。しかし、上海は元々、高度な技術によって作成された、至高の芸術品である。今のアリスの技量では、一朝一夕に直す事は出来ない。一つ一つの部品に、それこそ魂を込めるほどの気魄で整備を行う必要がある。そうしなければ、人形は美しくならない。上海は、美しくなければならない。美しくなければ、力を発揮する事が出来ないのだ。

美しく、美しく。

アリスの父が何時も言っていた言葉である。そう呟きながら、上海の髪を梳る大きな背中。それが、唯一覚えている父の姿であった。

上海は最も究極の人形に近い存在だ。最近では、極単純な命令と行動用の魔力を与えさえすれば、驚くほど高度な行動を長時間取り続けることが出来るまでになった。……最近。いや、もしかしたら、最初からそうだったのかもしれない。アリスの父は、最高の人形職人であったのだから。上海は父の作品なのだから。

嬉々として部屋の中を飛び回っていた上海は、やがて専用の小さなプライベートルーム、とは名ばかりの、化粧台の引き出しの中に入っていった。そして何やら、ごそごそと始める。アリスの意を汲んだのだろう。

上海が直った以上、アリスは探索を再開するつもりだった。

「悪いわね。最近、構ってやれなくて」

棚の中に整然と並ぶ人形達に声を掛ける。

人形達への愛を失った訳ではない。ただ、またこの道を行くために、今は引き返す。それだけだ。

アリスはその日、人形達の埃落としを行うと、装備の点検整備に取り掛かった。ボウガンの矢には新たに致死性の神経毒を塗り、仕込みブーツの白刃を研ぐ。狭い場所でも使えるよう、手榴弾の火薬の量を減らした。香霖堂で無理矢理交換させたポシェットは、もちろん防水性のもの。携帯食料、応急キットなどは新品を用意する。偽造させた儀礼刀の残り一振りと、上海に付けた青い宝石は、パチュリー手製のものだ。新調した小さなランタンは、橋姫からもらったもの。

翌朝、昼食用のサンドイッチと衣玖から差し入れて貰った小さな水筒を装備一式に加え、上海を肩に乗せると、アリスはぶらりと家を出た。もちろん、アリスの胸元には、てゐから貰った人参型のペンダントが光る。

あいも変わらず、魔法の森はどんよりとしていた。空は青く澄み渡っているというのに、ここの空気は陰気に微睡んでいる。ここに生息する数多の茸が、年がら年中飽きもせずに胞子を飛ばし続け、空気の循環と日光消毒を遮っているせいだ。おまけに、飛ばす胞子には幻覚作用があり、少し身体の弱い人間なら五分で足腰が立たなくなる程である。この瘴気は、人間はもちろん、妖怪にとっても辟易するようなもので、だから魔法の森に近づくような物好きな妖怪はいない。ただ、アリスのような魔法使いにとっては、襲い掛かってくる様な身の程知らずの愚かな人妖もおらず、魔法の材料集めにも事欠かずと、薄気味悪い点にさえ目を瞑れば、割と住みやすい土地ではある。

朝の陽射しは弱々しく、天井に曇りガラスを張っているかのよう。背の高い針葉樹で作られた森の迷宮は、里の人間には意外なほどの起伏に富み、歩くアリスは、散歩と言うより登山していると言った方が近い。右手で木の根に捕まり、左手で土を掻き掴み、両足で湿る石に踏ん張り、腹筋に力を込めて、身体の全体で登って行く。魔法を使っていないと、流石のアリスも息が詰まる。思い出すのは、天界の花果山だ。あそこのほうが空気が綺麗で良かった、いや雨の降るあの山よりはマシだ、いや胞子の舞う此処よりマシだ、脳内を駆け巡るは、そんな無意味な葛藤である。ぼやきの一つでも出そうも、口は酸素の出し入れで忙しい。結論としては、どっちも辛くて、でも楽しいのだ。

でもやはり、道連れがいた分、花果山のほうがアリスは好きだ。あの時の衣玖は、今思い出しても、妬ましい程に美しかったし。
何度目か、何十度目かの起伏を越えると、ようやく、目指す入り口が見えた。
胞子が濃くなり、辺りは誰そ彼時思うほどに薄暗い。ドーム型に映え連なった樹々が太陽を、いや、天道を覆い隠す様に争って枝葉を伸ばし、地面には黒い陰のモザイク模様の洒落た絨毯が出来上がっている。ぐわり、とそびえる、開けっぱなし岩の口からは、古代カビの鼻を突く臭いが轟々と低い音を立てて吐き出されている。湿気と冷気がアリスの身体にまとわり付き、露となって肌が濡れる。まるで全身を舐めまわされているように感じ、アリスは悪寒に身震いした。
「待ちくたびれたぜ」
洞窟の入り口前に、魔理沙が立っていた。
予想していたことなので、アリスは驚かなかった。
この娘は、どういう原理か、人がやろうとしていることを察知して先回りする力を持っている。機を逃さない、とでも言えば良いだろうか。さらに俗っぽい言い方をすれば、主人公補正がかかっているのだ、こいつは。
「来たのね。全く、あんたには敵わないわ」
「お前が面白そうな事をしてそうだったんでな。今度は前のようにはいかないぜ」
魔理沙は帽子のつばをくいっと下げて、粋を気取った。今日の魔理沙はいつものように白黒だが、羽織った分厚い黒コートの分、黒が優勢のようだ。愛用の箒を担いでいるが、その他は見るだに軽装である。流石、魔理沙らしい。
「決闘の方はもういいの？」
里では少し前、決闘を見世物にするのが流行っていたらしい。
「一体何時の話をしてるんだお前は、もうとっくにそんなブーム終わってるぜ」
「そうなの？　最近、あちこち出歩いて、あんまり里に行ってなかったからね」

「ああいうもんは一過性さ。投資としちゃ、悪くなかったが。ま、私は選手になっちまったから、関係無いがな」
「投資なんかしてたの？　そっちの方が驚きだわよ」
「前はしてたよ。神奈子がダム作ろうとしてた時とか。河童の奴等がやってるんだ、よく玄武の沢証券取引所で株券買ってさぁ」
「聞くだに胡散臭いんだけど……」
　無駄話をしながら、ガッポリと口を開いた洞窟の中へと踏み込んで行く。前と同じだ。
　霧雨魔理沙という女は、アリスにとって所謂悪友であった。魔理沙に対しては、どんな時でも軽口を叩かなければならない気がしている。きっとお互いそうなのかもしれない。お互いがお互いを見下して、でも何処かで一目置いて、つかず離れず、馬鹿をやる時は結局、一緒になってしまう。この腐れ縁は断ち切れそうも無い。
　しかし、魔理沙がアリスの白兎ということはあり得ない。魔理沙は兎と言うより女豹だ。しなやかに軽やかに強かに獲物を狙う肉食獣、しかし足は地に着き、時には傷つき大地に倒れ伏す事もある。それでもまた立ち上がり、闇の中を一人、旅して行く。
　一人、行く。
　それが、アリスは怖い。
「魔理沙。付いて来るのは構わないけれど、一つ、約束をして」
　緑の蛍光を発するランタンを掲げ、どことなく均整を欠いた魔理沙の顔を照らした。
「守れない約束は腐るほどしても、守るつもりの無い約束はしない主義でな」
　どの口が言うのか。出掛けた嫌味を飲み込んだ。
「魔理沙。貴女は知らないだろうけど、これは危険な事なのよ。死ぬかもしれないし、死ぬよりももっと恐ろしい目に遭うかもしれない」
　……自分のように。
「八雲紫に殺されるってか」
　くっ、とアリスを見つめる魔理沙の目に、力が篭ったのが見える。
　意外、とは思わない。アリスが引きこもっている間に、その足跡を

調べるなど、魔理沙にとっては魔法でもなんでもない。
好奇心は猫を殺すというが、豹はどうか。魔理沙はどうか。
「……遺跡の中の物は、決して持ち出さないと約束して」
大きく口を開け、魔理沙は笑った。洞窟の中で反射したその残響が、沈黙に包まれてからも暫く続いた。
魔理沙は、アリスの意図を理解したようだった。
「それからもう一つ」
「なんだよ、一つじゃなかったのかよ」
「何事も楽しむのがシティ派のモットーよ。この探検も楽しむ事」
「ハッ」
魔理沙は、今度は鼻で笑った。
「言われなくても」
魔法の森の洞窟は一本道である。白く滑らかでぬるぬるとした岩肌がぬめり、生物の胎内を想起させる。その道が、上へ下へ右へ左へのたりくねりうねって進む内、まるで胎動しているかのような錯覚を覚え、生理的な嫌悪感が催されてくる。
そんな道を何十間と進むうち、自然、アリスと魔理沙の顔は険しくなった。酔いに似た感覚を覚え、二人の足取りはふらふらと千鳥足に近くなった。
「相変わらず、気色悪いぜ、いらいらするなあ」
魔理沙の性分は、洞窟探索になど向いていまい。霧雨魔理沙には星空を駆けるほうが似合っている。幻想郷は、彼女が住むには狭すぎるのだ。
しばらく進むと、アリス達は急な下り坂に差し掛かった。前回と同じ道程である。
ランタンをかざすと、ギリギリ光の届く距離、道の真ん中にポッカリと開いた穴があった。丁度、人が二人くらいが通れそうな大きさの穴である。前回はよくもまあ、あんな穴に落ちたものである。下らないことを言い合っている間に足を滑らせ、二人仲良く落ちたのだった。
「飛ぶか」

既に魔力封じトラップの影響圏内に入ったようで、箒に跨った魔理沙は、飛び立てなくてきょとんとしていた。馬鹿だ。
「別の手で行きましょう」
周囲の壁に両指の糸を打ち込み、それをロープ代わりにして、下り坂をそろりそろりと降りる事にした。魔理沙がランタンを持ち、アリスの身体に掴まって一緒に降りる。二人分の体重が両指に掛かり、少し痛む。
穴の少し手前まで来た時、アリスは片足を上げた。
「魔理沙、スカートの中に手榴弾があるから、それ取って」
「えー、嫌だぜ、なんかキモい」
「私だって嫌よ、でもしょうが無いじゃない、両手が塞がってるんだから。裾の辺りにホルダーがあるから、信管抜かないように注意するのよ」
渋々、魔理沙はアリスのスカートの中に手を突っ込んで、ゴソゴソと弄った。すぐに手を引っ込めると、その指先には手榴弾が握られていた。……手榴弾の、ピンだけ。
「……取れちゃったぜ」
ポカンとして、魔理沙は行った。
「馬鹿、何やってるのよ!」
素早く飛び出した上海が、信管の抜けた手榴弾を取ってくる。アリスは急いでそれを穴の中へ投げ込んだ。
「あんた、ワザとやってるでしょ？　安全装置ごと信管引っこ抜くなんて普通あり得ないわよ」
「んなこと言われたってなぁ。大体、最初っから上海にやらせりゃいいじゃねーかよ」
「そんなしょーもない事で上海を動かしてたらキリがないわ」
数秒後、爆裂音とともに振動があり、穴の中から土埃が上がった。その中に、バラバラに千切れた頭足類の触手も混じっている。穴の中に潜んでいたのだ。
「ひでぇことしやがる」
「自業自得って言うのよ」

「やってる事がテロリストだぜ」
「馬鹿言うんじゃないわよ、こんなに気高く上品で慈愛に溢れた美しいテロリストなんているわけないわ」
「その口上は耳にタコだぜ、まったく」
なんのひねりも無い只の待ち伏せなど、頭の弱い野良妖怪の考えそうな手である。勿論、アリスも魔理沙も察知していた。潜むのなら、その生臭さをどうにかしてからにすべきだったようだ。
穴に近づき、そこから中を覗き込む。既に頭足類本体は逃げ去っていた。
「……行くか？」
「冗談！」
悍ましい頭足類の潜んでいた穴へ飛び込むなんて、ゾッとしない話だ。
魔理沙はニヤリと笑うと、
「じゃ、行くか」
上海を掴んで、いきなり穴に飛び込んだ。
「ちょ、え、マジ？」
アリスは唖然とした。
魔理沙は半分以上、嫌がらせ目的で飛び込んだに違いない。そう考えると腹が立ったが、上海を人質にされている以上、行かざるを得ない。
ランタンも魔理沙が持って行ったので、真っ暗になってしまった。両指の糸を切断し、穴を覗き込むと、幽かな灯りと、生臭い臭いがした。
嗚呼、悍ましい。アリスは身体を震わせたが、息を止め、目を瞑り、覚悟を決めて飛び込んだ。
縦穴を落ちる途中で、何かとぶつかる。
目を開けると、ランタンの括り付けられた魔理沙の箒だ。
箒から魔力を噴出し、飛ぶ事は出来ずとも、落下速度を落としていた。
「アホか、目ぇ瞑ったまんま飛び込んでくるか、普通」

片手で箒にぶら下がり、ぶつかってズレた帽子を直しながら、魔理沙はアリスの方を見上げた。
「だって嫌なんだもの」
全身で箒にしがみつきながら、情けなくアリスは言った。
「それにしたって、やりようあんだろ。せめてゆっくり落ちて来いよ」
「だって、嫌なんだもの」
やがて底に着く。地に着く魔理沙の靴音が、びちゃり、と湿った音で濁る。あの頭足類のウジュルウジュルした粘性の体液を思い浮かべて、アリスは子猫のように震えた。
「おい、いい加減降りろよ。重いぜ」
「絶対嫌っ」
「駄々っ子かお前は」
魔理沙が箒を振りかぶったので、アリスは止む無く飛び降りた。靴音が乾いた音を立て、安心する。直後、手をついた版築の城壁がグジュリとぬめり、血の気が引いてバランスを崩したアリスは、魔理沙にもたれ掛かってしまった。
あの時とは逆の形だ。
見上げた魔理沙の一瞬の横顔は、緑の蛍光に照らされ、妖精のように見えた。霧雨魔理沙という女は、信じられない程に多様な面を持つ。まったく、不思議な女である。
「おい、もういいだろ、自分で立てよ」
魔理沙はアリスを突き離した。アリスは、嘆息した。
「あと少しで拭き終わったのに」
「おま、何ヒトのコートで手ぇ拭いてんだ！」
気色の悪い頭足類の体液の残りをチリ紙で拭き取った。
ランタンを魔理沙からもぎ取ったアリスは、舞い降りた古城の通路を見回した。頭足類の這い回る悍ましい軌跡が、あちこちに付着している。異臭を放つそれは、アリスの想像の通りの方向、すなわち二つの方向へ伸びている。行き止まりの扉へと続く通路と、地底湖へと続く通路である。痕跡が真新しいのは、やはり、扉へと続く道の方だった。

「まあ、そんな気はしてたがな」うんざり、と言った顔で魔理沙が言う。
「野郎も存外、しぶといぜ」
アリスは無言でスカートの中から折り畳み式のボウガンを取り出し、矢を番えた。魔理沙も懐から何がしか筒のようなものを取り出し、手の中に隠している。
「こういうお約束って、大嫌いだわ」
「いや、お約束は大事だぜ」
「スマートじゃないのよ、まったく」
ランタンを掲げて、扉へと続く道を一歩、踏み出す。
「泥臭いのが嫌なら、都会とやらに引きこもってな」
油断なく辺りを見回しながら、魔理沙も続く。それを背中で感じながら、アリスは歩を進めた。
静寂の闇の中。女二人が、武器を構えてゆっくりと歩み行く。嫌悪感で、アリスの胸のムカつきは最高潮だ。無意識に呼吸が早くなる。無音の海に響き渡る自身の吐息が耳に痛い。いや、これは魔理沙の吐息だろうか。二つの鼓動が一つになり、渾然としている。二つを個と考えるのが、愚かしくなってくるほどに。
扉まで辿り着くと、魔理沙もアリスも歩みを止めた。
扉、いや、かつて扉だったものは、力ずくへし曲げられ、通路内に散らばっている。朱塗りの扉には、例の悍ましい体液がびっしりとついていた。
「まあ、努力は認めるがな」
魔理沙は帽子を深くかぶり直した。
「いちいち付き合っていられないんだけど……」
振り向きざま、アリスはボウガンを連射した。
天井から音もなく背後に忍び寄っていた頭足類の、半透明に透き通るその胴体に命中し、アリス達に迫っていた触腕が、雷撃に撃たれたように痙攣する。
「発想は悪くなかっけど、扉が通路側に散らばってれば、魔理沙でも分かるわよ」
「なんだその魔理沙でも、ってのは……おっと!」

痙攣から回復した触腕は、魔理沙を狙って打ち下ろされ、間一髪、魔理沙はそれを避けた。
ボウガンの矢には神経毒が塗ってあったが、頭足類には耐性があったようだ。アリスはブーツに仕込んだ白刃で、追いすがる触腕を斬って散らしたが、元気にうねる触腕がまだまだ残っているのを見て、溜め息を吐いた。
「まったく、面倒ね」
「アリス、おとりになれ」
「はあ?」
魔理沙はアリスの手からランタンとボウガンをもぎ取ると、筒状の物体をボウガンの矢に括りつけた。手にしたもう一つの筒状物体を握り潰すと、ボウ、と黄色く光る霧状の粒子が魔理沙を包みこむ。
「おとり、って言われても」
「いいから行けよ」
ドン、と魔理沙に背中を押され、アリスは触腕の只中に踏み込んでしまった。
途端、四方八方から触腕が殺到する。
「まったく!」
アリスは怒気混じりに、素早くステップを踏むと、白刃で周囲を薙ぎ払いつつ、天井からぶら下がる頭足類の真下へと滑りこむ。頭足類はその巨大な体をぐるりとねじり、その醜悪な視線のまん真ん中に、アリスを捉えた。
「見失えば、そりゃあ探すわよね」
おそらく、頭足類が最後に見た光景は、手製の閃光手榴弾のピンを抜いたアリスの姿だったろう。
宙空で爆発したそれは、洞窟内では明るすぎるほどの閃光を発し、頭足類の眼球から光を奪った。苦しむ頭足類の悍ましい粘液音がして、その巨体が地に落ちる。
「十分だ」
魔理沙の声が、天井から降り注ぐ。
飛行箒の上に仁王立ちした魔理沙は右手と八卦炉と左手のボウガ

ンを、それぞれ真下に構えている。
「お前には新作の実験台になってもらうぜ、光栄に思いな」
ボウガンを発射し、筒状の物体を頭足類に打ち込む。途端、頭足類の巨体は、黄色く光る霧に包まれた。そこへ、八卦炉から発射された極太のレーザー、魔理沙のマスタースパークが炸裂した。
先ほどの閃光手榴弾よりも数倍、数十倍強い光が降り注ぎ、洞窟内が真昼になった。
純粋な力の放出。弾幕はパワー、その魔理沙の信念の、まさに体現と言うべき魔法。圧倒的な光の洪水は、あらゆる奇も正も邪も押し流し、そこに道を作り出す。霧雨魔理沙が行く道を。
やがて光の奔流が収まると、頭足類の姿は消え、散り散りになった触腕の切れ端だけが残った。光を受けて消滅したのだ。この魔法を正面から受ければそうもなろう。しかし、力の強すぎるマスタースパークを使ったにしては、なんら破壊の跡も残っていなかった。
「どうだ、新作のマジックアブソーバーだぜ。ここの魔力封じ対策に考えたんだが、なかなか使えるだろ」
箒から降りた魔理沙は、得意気に鼻を擦った。
「なるほど、魔力相殺魔法か。悪く無いわね」
こればかりは、アリスも素直に感心した。
この城の魔法妨害は、微弱な魔法を放出し続けるタイプのトラップである。魔力自体を無効化することで、ある種のマーカーを持った魔法だけ使用出来るようにしたのだろう。
しかし、その出力試験を此処で、しかもマスタースパークで行うとは、さすがに魔理沙である。
「無効化の出力が足りなかったら、洞窟が崩れて死んでたわよ、私達」
「まあ、上手くいったんだからいいじゃないか」
あんたと一緒にいると、失くしたはずの寿命が縮まる思いがする……アリスはそう言いかけて、やめた。遠回しにでも、魔理沙が、失くなりかけた生の実感を与えてくれているだなんて、言いたくなかったのだ。
「先へ行きましょう」

代わりに、アリスはランタンを掲げ、前を向いた。
アリス達は破壊された扉をくぐり、未探索地域に突入した。
「なんだ、こりゃあ。すごいな」
魔理沙が驚くのも無理はない。
扉の中は、広大な空間が広がっていた。どれくらいの広さかは精確に分からないが、染み入るような静寂が、この空間の巨大さを肌で教えてくれている。天井も高く、小さなランタンの明かりが届かないほどだ。地面は、朽ち果てているが、舗装されていた跡があり、アリスたちの両側には、建物の残骸と思しき瓦礫の山が連なっている。どうやら、アリス達は街道の上に立っているらしい。街を包む埃と黴の臭いが、重ねてきた年月を想像させた。
魔理沙は手を口に当てると、思いきり叫んだ。
「弾幕はパワーだぜーっ！」
山彦は、聞こえない。相当に広いらしい。街一つ分くらいはありそうだ。
どくん、とアリスの心臓が跳ねた。
予感が、体中を震えさせる。
「こりゃあ、魔法の森全体くらいありそうだなぁ」
魔理沙はスタスタと街道を歩いて行ってしまう。
震える足を動かし、アリスはその後に続いた。
街道は広く、まっすぐに伸びている。幾つかの横道と直角に交差し、この街がかなり計画して造られ、整備されていたことが伺えた。
「里にも負けてないぜ。昔は目貫き通りだったのかな」
箒を担いだ魔理沙の後ろ姿が、揺れる視界の中で唯一つ、確かなもの。アリスは必死に、それを追った。
やがて、アリス達は巨大な建物に到着した。
その建物は荒廃し、あちこち崩れ、この闇の中ではかつての姿を想像することすら難しいほどだった。
「栄枯盛衰、ってか。諸行無常だな。私はロマンを感じるけどな、お宝の気配、ロマンだぜ」
魔理沙は無造作に炭化して崩れかけた扉を押し、建物の中に入って

いった。
建物の中は広く、がらんどうの室内は風通しがいいのか、何故か埃もカビ臭さもなかった。そのせいか、部屋は神々しい雰囲気に包まれていた。
アリスは、息が荒くなるのを感じた。
「アリス？」
魔理沙が、アリスの異変を感じ取ったようだ。
部屋の真ん中に立ち尽くすアリスに駆け寄ると、その肩を掴んだ。
「どうしたんだ？」
魔理沙の困惑した顔が、今が現実で、妄想の世界などではないと教えている。
アリスは、胸元に手をやり、てゐのペンダントを握りしめた。
必死に息を整え、ランタンを頭上に掲げる。
光が、天井まで届いた。
見上げた魔理沙の目が、驚愕に見開いた。
「な、なんだ……、ど、どうして、魔法の森の地下の……こんな所に……」
魔理沙が、明らかに動揺している。
アリスが天井を見上げると、そこには見知った顔があった。
後光を背負い、紫雲に乗って、手に笏、腰に七星の剣を佩く、半眼の、豊聡耳神子の姿……神霊廟の天井画が、あった。

血

「つまりは、だ。ここは千年前、聖徳王の存命中に建てられた城で、あの壁画は在りし日の豊郷耳神子って訳か？」

アリスが手渡したサンドイッチを頬張りながら、魔理沙は言う。多人数でいるときはつとに豪快に振る舞うが、アリスや霊夢の前では歳相応の女の子らしく振る舞う魔理沙だ。下品に食べ散らかすようなこともせず、普通にもくもくと食べている。さすがに口元を隠すような雅な仕草はしないが。

見上げると、豊聡耳神子の腹の立つドヤ顔が、アリス達を見下している。

魔理沙はここが神霊廟であると認識していない。

魔理沙は神霊廟であの天井画を見ていないのだろう。アリスとて、神霊廟の成り立ちを聖徳王から聞いていなかったら、そう考えていたかもしれない。実際、魔理沙の予想のほうが現実的であろう。

しかし、アリスは確信していた。

ここは、神霊廟だ。

そう考えれば、紅魔館での風見幽香の言動も辻褄が合う。

風見幽香は、地下遺跡の城壁から採取した土粒を、この世界の物質では無いと言った。実際、そこから幽香が咲かせた花は、見たこともない姿形をしていた。

神霊廟は、幻想郷の隙間に神子が創りだした空間である。つまりそれは、神霊廟が幻想郷の存在するこの世界とは別の場所に造られた世界であるということを意味している。風見幽香が咲かせた、あの見たことも無い花は、神霊廟のある世界、時空で元々咲いていた花なのだろう。

――あるいは。

あるいは……あの花は、これから咲くのかもしれない。

アリスもサンドイッチに口をつけた。具はシンプルにベーコンとレタスにトマトだけだが、振った黒胡椒の効き具合といい、パンに塗ったバターの加減といい、美味い。自画自賛に足る出来だ。魔理沙

が美味いと言わないのが納得行かない。
この場所で昼食をとっているのは、ここが唯一、古代カビの嫌な臭いがしない場所だったからだ。天井画の神子の放つ鬱陶しい威厳がそうさせるだろうか。そう考えれば、あのドヤ顔もまあ許せるというものだ、ギリギリ。
水筒のフタをカップ代わりにして、魔理沙に勧める。
「なんだよオイ、やけにサービス良いな、今日は」
注がれた液体に口をつけた魔理沙は、次の瞬間、顔をしかめた。
「あっま！　なんだこれ？」
「濃縮した桃のジュースよ」
「ぐええ、確かに美味いけど、胸焼けしそうだぜ……」
「たんと飲みなさい、精がつくから。さっきマスタースパーク使って、魔力使いきったんでしょう。糖分は重要よ」
「それはそうだけど……」
嫌がる魔理沙に無理矢理飲ませて、ついでにサンドイッチをもう一つ、その小さな口に押し込む。探索に腹ごしらえは重要だ。特に、未だ捨食の魔法を覚えておらず、ただの人間である魔理沙には。
昼食を終えて、アリスは再び装備の整備を始める。魔理沙はストレッチしながら、その様を横目で眺めていた。
「マメだなぁ、ホント」
「当たり前の事でしょう。あんたみたいにその身一つで、なんて度胸、私には無いわ」
「臆病モンだな」
「皮肉、分からない？」
頭足類の体液が付着したブーツの白刃を磨き、ポシェットから出した予備のボウガンの矢を補充する。使いきった手榴弾の代わりに、信管と発煙筒を持っておくことにした。
そうしていると、魔理沙が例の「マジックアブソーバー」の筒を差し出してきた。
「お前も、持っておけよ」
「いや」アリスは首を振った。「私はいらないわ」

「そうか」
魔理沙は素直に魔法筒を懐にしまった。
「――聞かないのね。なんで私が魔法を使わないのか」
アリスが虚空に向かって問うと、魔理沙は帽子のつばをくぃと下げた。
「いいや。聞くぜ」
魔理沙は一呼吸置くと、問うた。
「辛いのか。魔法使いとして生きてゆくことは」
ふっ、とアリスは笑みを漏らした。
下らない質問である。しかし、人間らしい質問だ。アリスの姿に、魔理沙は未来の我が身を重ねているのだろう。
「私も貴女も、生きていることに変わりなんてないわ」
生きてゆくことに高下は無い。そこには、人間と妖怪の垣根も無い。全て平等に過酷で、平等に幸福であるのだろう。その価値は彼岸の閻魔にすら決められるものではない。人生を測る絶対的な物差しなど、存在しないのだから。
「でも、自分の家に帰れないことは、辛いことじゃなくて？」
そう言うと、魔理沙は肯定とも否定ともとれない複雑な表情を浮かべた。
人里にある実家から家出して、魔理沙は魔法使いをやっている。遠くない未来、魔理沙も決着をつけに一度は戻らなければならないだろう。それは、一人前の大人になるためには必要なことだ。自分の在るべき場所を定める事は。
そう考えると、魔理沙とアリスは似ているのだ。アリスもまだ子どもだった。自分の在るべき場所が分からないのだから。
それを探す為に今、此処にいる。
「やっていることなんて、誰もみんな、変わらないものだわ」
それは、魔理沙に言った言葉ではなかった。
整備を終えると、アリス達は探索に戻った。霊堂に散乱する瓦礫をひっくり返して回り、何か手掛かりや先へ進む道が無いかどうか調べて行く。

この神霊廟に何があるのか。それは分からない。
しかし、古の探索者、水橋パルスィの言によれば、此処は最初に幻想郷に併合された地であると言う。ならば、在るはずなのだ。博麗に関する手掛かりが。
各地の神社には、それぞれ様々にルーツがあるものだ。それは形を失くしても、口伝や人々の慣習の中に形を変えて残っていたりする。そこには信仰があり、信じる人々がいるからだ。人の口に戸は立てられぬ。忘れ去られた存在は数多くあれど、其処に人間が介在する限り、辿れない道は無いはずだ。増して、幻想郷には人間よりも長く生きる、妖怪という種族がいる。宇宙総ての知識が集まると司書が豪語する、ヴワル図書館がある。時代を超えて記述される稗田の幻想郷縁起や、上白沢慧音が編纂する歴史書もある。
その全ての記録から抹消された、博麗神社のルーツ。歴史上のある時点から突然現れたそれ。その手掛かりがあるとすれば、同じく歴史から抹消され、忘れ去られた場所にあるはずだ。それを求めて、アリスは探索をして来た。
定期的に起こる異変も。妖怪の山で見た真実も。パチュリー・ノーレッジの予想も。幻想郷に生きとし生けるもの全てが。その言葉を中心に回っている。
博麗。
幻想郷の本当の「賢者」は、何を求めてこのシステムを作り上げたのか。少しずつ、アリスには解りかけて来ている。
そう。
きっと同じなのだ。
誰も、彼もが。
「おい」
魔理沙の声が、脳内で駆け巡る推論を止める。夢から覚める思いで、蛍光に照らされる魔理沙の顔を見た。魔理沙の顔は、いつもと変わらず、何処と無く均整を欠いていた。魔理沙は、超人だ。何時如何なる時、どの瞬間を切り取っても、それは等しく均一な魔理沙なのである。少なくとも、アリスにとっては。

「なんかあるぜ」
霊堂を抜け、本堂の中、かつては祭壇と思しき残骸がそこにあった。
「神式、か。この祭壇は」
魔理沙は祭壇の残骸をバシバシ叩きながら言う。貴重な文化遺産になり得る物だと言うのに、魔理沙は頓着しない。魔法使いとしての常識を疑う。
神子の神霊廟で見た本堂は、神式の造りではなかった。この矛盾。時代の流れを感じさせる。祭壇の装飾は経年劣化により崩れ、紋章は掠れ消えて判別が出来ない。
「お。階段だぜ」
魔理沙が指し示す先、祭壇の残骸の陰に、さらなる闇へと伸びる、石造りの下り階段があった。
無意識に、アリスと魔理沙は引き合った。寄り添いながら、階段を降りて行く。
かつん。
かつん。
歩調を合わせて。
かつん。
かつん。
呼吸を合わせて。
かつん。
かつん。
ごとん。
響く頼りない足音に、鈍く重い音が重なる。
振り返って見上げた先は、闇。
階段の入り口が、閉ざされた。
ごくり。魔理沙のか細い喉が嚥下に蠢くを見た。魔理沙は懐へ手をやり、例の魔法筒を取り出す。アリスも取り出した折り畳み式ボウガンに矢を番えた。
アリスは異常な気配を感じていた。魔理沙もだろう。先ほどの頭足類などとは比べ物にならない程の害意が、眼下の闇の先の先から放

たれている。
「紫か」
　魔理沙はそう言うが、
「違うわ。これはあいつのやり方じゃあない」
　いつだったか、藤原妹紅が言った言葉が思い出される。あの時は理解出来なかったが、これはアリスにも分かる。逃げ道を塞ぐなど、八雲紫ではあり得ない。紫ならむしろアリス達が逃げ惑うのを愉しむだろう。このやり方は、八雲紫のルールではなかった。
「歓迎されてはいないらしいな、どうも」
「シーフを歓迎するファラオもいないでしょう」
「違いないぜ」
　魔理沙は笑みは向日葵に似ていた。
　再び、歩みを再開する。
　前触れなく、ランタンが砕け散った。
　闇のうろの中で、それは信じられないくらい大きな音を立てた。
　魔理沙もアリスも、動じる事は無い。低俗霊の良くやる手、子供騙しに過ぎないからだ。むしろ、拍子抜けしたほどである。これだけの害意を放つ存在が、こんな間抜けな事をやろうとは。ただ、魔理沙にもアリスにもその予兆を感じ取る事が出来なかった事は、正直言って脅威であった。
　ランタンは砕け散ったが、勿論対策は講じてある。
　砕けたランタンから飛び出したのは、緑の光を発する大きな蛍だ。地底の橋姫からの借り物。ランタンなど、最初から不要だったのだ。
　二対の蛍はアリス達の周りを衛星の様にくるくる回りながら、光を放った。
「ありがとよ、こんな綺麗なモン見せてくれて」
　虚空に向かう魔理沙の挑発に、アリスはクスクスと笑みをこぼした。
　相変わらずの、吹き付ける様な害意の烈風の中、アリス達は階段を下った。ゆっくり、ゆっくりと。長い長い、永遠にも思える様な時間を掛けて――実際は三刻も無いだろうが――底に着いた時には、魔理

沙もアリスもうんざりしていた。色も何も無い闇の中を、ひたすら下って行くというのは、中々に神経に堪える。単調で面白く無いのだ。見た目に美しい橋姫の蛍に、どれだけ救われたことか。

だから、それが目に入った時には、変わった景色を無邪気に喜び、笑った。

地底湖だ。

天井は異様に高く、今まで下って来た分よりも高い様にすら思える。ひょっとしたら、天井は無いのかもしれない、そう思える程に。蛍の光は例によって届かないが、肌に触れる湿り気を帯びた風が、明らかに今までと異質な場所である事を示す。この風は、何処から吹いているのか……。

博麗の社のあった地底湖とは違い、光届かぬ場所にあるが故か、より厳かな雰囲気が漂う。水面は夜色に染まり、その中を窺い知ることは出来ない。ゆらめく風で水面には極小さく細波が立っている。

中心には細長い八角形の建物が暗天を突き抜ける様に聳えており、見る者もいないだろうに、周囲に威圧を与えるように佇んでいた。

生命の気配は全く無い。ここは死の世界だ。

喜びも笑いも、束の間のものでしかなかった。

「大祀廟……なぜ、ここに……」

魔理沙がポツリと呟いた。

かつての聖徳王の墓、大祀廟に侵入したことのある魔理沙にとって、その景色は見覚えがあったらしい。

中央、石造りの土台の上に建つ夢殿は木造ではなく、なめらかで錆の無い金属で建造されている。いや、それはもはや夢殿、聖徳王の供養塔では無いのかもしれない。別の、何か禍々しいものを封じるために設置された、呪い塔のようにも見える。表面には見たことも無い無数の術式が刻まれ、その傷跡から、止めどなくなんらかの液体が流れ出していた。さながら流れる血のように。

湖面へ近づくと、表面に何かが浮かんでいるのが見えた。蓮の葉だ。薄桃色の蓮の花も咲いている。しかし、不思議なことに、この水芙蓉からは生きている気配を感じない。色艶は正に生の植物そのも

のなのに、生気を全く感じないのである。それに、こんな時期に、こんな闇の中で蓮の花が咲いているというのもおかしい。
「一体なんだ、これは……この蓮の花、時間が止まっているんじゃないのか」
　蓮の花は、輪廻転生の象徴である。その時間を止めるとは、つまり。
「これは……呪法だわ」
「やはりか」
「でもこんな大規模なもの……一体、何を目的に建てられたのかしら」
「さあな。鬼が出るか邪が出るか」
　水面に浮かぶ蓮の葉の道は、八角塔の下まで続いている。魔理沙は蓮の葉の上に無造作に体重を預けた。巨大な蓮の葉は、人一人の体重を受けても、ピクリとも動かない。アリスもその後に続いた。
　八角塔に近づくにつれ、害意の波動が二次関数的に強まる。
「魔力干渉が濃くなっているわね」
「試作のアブソーバーじゃ、十秒と持ちそうにないぜ」
「魔理沙！」
　アリスが鋭く叫んだのと、魔理沙が飛び退くのとは同時だった。
　前触れ無く振り下ろされた刃が、魔理沙のスカートの裾を僅かに切り裂く。
「あぶねえ！　……あっ」
　悲鳴が、驚愕へと変わる。
　緑銀色に揺らめく剣を振り下ろした者。その姿を見た瞬間、アリス達に衝撃が走った。
　紅白の衣を纏い、頭に大きな赤いリボン、長い黒髪をたなびかせた女の影。
「霊夢？」
　魔理沙が言い終わらぬ内に、それの姿は虚空に掻き消えていた。
「霊夢じゃないわ」
　その顔は、黒塗りされた落書きのように、不自然に歪んで判別がつかなかった。しかし、明らかに、顕界の存在ではない。害意そのものの様な存在。幽霊とも違う。亡霊とも違う。怨霊とも、もちろん神霊

とも違かった。これまで相対した事が無い存在。
「純粋な魔力の塊……」
そうとしか形容のしようがない。
「ならあれも、弾幕だってのか」
「弾幕……」
なるほど、とアリスは思った。魔理沙らしい形容の仕方だが、正鵠を得ている。あれは一種の弾幕といえるだろう。例えば、アリスが人形達を弾幕に使う様に。魔力を込めた人の形、その依り代を取り除いたものが、あの存在であろう。
「なら、この先に、あの弾幕を放った存在がいるわね」
「宣言も無しにスペカを使うなんて、いい度胸だぜ。しかもあんな美しくもない弾幕を使うとは。決闘のイロハを叩き込んでやらなにゃ」
魔理沙は箒を担ぎ直した。
「しかし、何故、霊夢と同じ巫女装束を着ていたんだ……」
魔理沙は首をひねったが、アリスには得心が行っている。此処にあるのだ。幻想郷を形作る博麗というシステムのルーツ、その一端が。
蓮の葉の道を暫く行くと、石造りの土台、その上に建つ八角塔の下に着いた。
近くまで来ると、その異様さに改めて息を呑む。聳える八角塔は、真下から見上げてもその全高が分からない。塔の先が見えないのだ。塔から滲み出ている液体は紅、紛れもなく血液だった。そのため、石造りの土台は常に鮮血に濡れている。流れ出る血液は普通の血液ではなく、どろりと黒く濁り、すえたような臭いが鼻を突く。
「悪趣味な意匠だぜ。しかしこれは、なんの血だ？　……知りたくもないけどよ」
アリスは気づいたが、口には出さなかった。この臭い。きっとこれは、人間の女の血、それも経血だろうと。何処から流れているのか、如何して流れているのか。想像して、肌理が粟立つのを感じた。口元に手をやったのは、こみ上げる吐き気に耐えるためだ。
「ま、お宝があればなんでもいいけどな」
悍ましい鮮血の塔の扉へ、またもや無造作に突撃する魔理沙。きっ

とそういうサガなのだろう、物怖じや躊躇というものが無い。これだけ不気味でおどろおどろしく、当の魔理沙本人すらも顔面蒼白になっているというのに。この女は脊髄反射で行動しているのではなかろうか。

魔理沙は八角塔の入り口の、ぬらりとした金属製の扉を押した。数秒後、それは体当たりに変わり、蹴りに変わり、頭突きに変わり、今度は引っ張ってみようとばかりに、意匠の隙間に爪を立ててガリガリ引っ掻いたりした。

やがて振り返った魔理沙は、神妙な顔で言った。

「開かないぜ」

アリスは声を上げて笑ってしまった。広大な空間を満たすが如く、アリスの笑い転げる声が響き渡る。そして、キョトンとする魔理沙の顔。嗚呼、なんて場違いな光景だろう。

「あんたはもう、本当に……凄いわね」

ハンカチで涙を拭きながら言う。

魔理沙と一緒で良かった。

口には出さないが、はっきりと言葉で思った。

「そんな笑う所か？　お前の笑いのツボ、おかしいぜ」

「はいはい」アリスは信管を取り出して、扉の番に埋め込んだ。「爆破するから、ちょっとどいてて」

可燃性の糸を伝って走る小さな炎が、信管を起爆させ、極小規模の爆発が起こる。番が破壊され、金属の扉が傾いた。二人掛かりで扉を引っぺがすと、中の闇から、強い冷気が吹き出してきた。

意を決し、中に入る。

まず気付くのは、その凄まじい冷気。頓着の薄いアリスですら震えを覚えるほどだ。人間の魔理沙は、自分の肩を抱いてせめてもの暖を取っている。吐く息が白く輝いた。

二対の地底の蛍は、温度変化を感じると、アリス達それぞれの肩に止まり、光の色を変えた。緑から赤へ、そしてほんのりと熱を発し始める。

「流石は橋姫ね」

「ありがてぇありがてぇ」
鼻水を垂らしながら、魔理沙が蛍を拝んでいる。アリスは笑いを堪え切れず、くつくつと笑ってしまった。そんな場合ではないというのに。
次に気付くのは、もちろん、その臭いだ。外の臭気を何倍も濃くしたような、生臭い臭い。ポシェットから取り出したハンカチを魔理沙にも渡し、それで口元を押さえた。
見上げる。
光は無い。
天井も見えなかった。そのまま事象の地平にまで続いているのではないかと思われる程だ。
幽かに見える八角塔の内壁には、くねくねとしたヒトガタの意匠が施されていた。無数に点在するそのヒトガタ達の双眸が、アリス達を見下しているかのように感じる。
ふと、遠く、耳鳴りのように、赤ん坊の泣き声が聞こえたような気がした。
魔理沙の方を見ると、魔理沙はアリスの顔を見てハテナマークを浮かべている。魔理沙には聞こえなかったらしい。あるいは、アリスの空耳なのかもしれない。
もう一度ヒトガタを見上げると、今度はそれが裸婦像であると理解できた。かなり抽象化されているが、間違いない。そう思ってみると、酷く艶めかしいそのくねくねとしたポーズは、苦悶に悶える様であるように思えてくる。
「出産、か」
同じく見上げた魔理沙が言う。なるほど、裸婦達の中には腹を抱えているものもいる。
「止まった輪廻転生、中心にある封じられた妊婦達。これは誕生を操作しようという術式のようだ」
「何の、誕生よ」
「博麗、だろう」
「霊夢が此処で生まれたとでも？」

「いや、この術式はもっと業が深い。これは……きっと、神を創ろうとしているんだ」
動揺を隠そうとしているのか、魔理沙はしきりに右手で顔を撫でながら、言葉を続けた。
「いや、いや……違う。既に創ったんだ。これは残骸だ、神の。ここは墓だ。神を創るための、創った後の……」
これだから、霧雨魔理沙は怖ろしい。魔理沙の空言に対し、アリスは否定する材料を持たなかった。
神を創る。
創られた神は、忘れ去られた神か。
「なんだ、あれは」
真っ直ぐな魔理沙の視線を追うと、影の先に、丸く並べられた台座が見えた。紫布が拡げられた台座の一つ一つには、小さな丸い物体が安置されている。近づいて覗き込もうとしたとき、アリスの腕が強く引っ張られた。
「何よ……」
発した言葉は、剣が空を斬る音で掻き消された。
唐突に。
まるで絵空事のように。
巫女姿の弾幕、純粋なる魔力の塊、害意の嵐が姿を現す。
魔理沙の反応は、素早かった。手にしたマジックアブソーバーの筒を投げつけながら、一歩下がって八卦炉を構えていた。ワンアクションでそれをやってのける魔理沙は、天性の戦闘センスがある。
マジックアブソーバーの筒は、同時にアリスが放ったボウガンの矢と空中で激突し、巫女姿の前ではじけ飛ぶ。アブソーバーの黄色く光る粒子が、巫女姿を包み込んだが、その中でも巫女姿は悠々と剣を振りかぶった。
「なんだと!」
魔力それ自体を無効化するはずのアブソーバーが、魔力それ自体の塊である筈の巫女姿に対して、まったく効果を為していない。
「魔理沙、こっちよ!」

魔理沙の腕を引っ張り、アリスは闇を駆けた。明らかに旗色が悪い。
扉へ向かって走ろうとするも、破壊したはずの扉は元に戻り、閉じられていた。無貌の巫女姿は、ここでアリス達を始末するつもりらしい。
「アリス、階段だ！」
闇の中、魔理沙が見つけた階段を駆け下ってゆく。途中、振り返ったアリスは、後方へ発煙筒を投げつけ、気休めの煙幕を張った。
階段を走り降りると、石壁に四方を囲まれた螺旋通路に出た。螺旋通路はぐるぐると回りながら徐々に深度を増しているようで、進めば進むほど空気が淀み、重くなった。アリスた達は戦闘態勢を崩すことなく、走った。
「新作が効かんとは」
魔理沙が歯噛みする。
「あれは、夢想天生だわ」
霊夢のラストワード、切り札。博麗の巫女の奥義の一つである。
「人が分かってて言わないようにしたことを」
「霊夢の夢想天生とは、完成度が桁違いだわ。幻視でも影も欠片も残滓すら見えないなんて」
「霊夢のは透けるだけだからな。弾もあたらんが」
「あれは消える度に、己の存在を完全にこの宇宙から消し去っている」
「自由に消えて自由に現れる、自動追尾弾幕かよ。チートにも程がある」
「どうする、今の私達じゃ打つ手が無いわ」
「ハッ、決まってら」
こんな状況でも、魔理沙は不敵に笑う。
「弾幕なら、避けりゃいいんだぜ。それが基本ってもんだ」
魔理沙はいつでも変わらない。いつでも同じ魔理沙だ。アリスにとって、魔理沙は悪友であり、みっともない意地っ張りの小娘であり、ただの無策無謀な馬鹿であり、英雄だった。
アリスが笑いかけたそのとき、視界の中で鈍い銀色が煌めいた。

突如として現れる、紅白の巫女姿。握る刀剣の切っ先が、アリスへ一直線に殺到する。
避けられない。
アリスが目を見開いた時。アリスの体が、強い力で押し退けられた。
魔理沙だ。
魔理沙が、アリスを突き飛ばした。入れ代わりになった魔理沙の胴を、巫女姿の切っ先が捉えていた。
「魔理沙！」
魔理沙がその場に崩れ落ちる。
激情に狩られたアリスは、我を忘れ、顔無しの巫女姿に跳びかかった。無意識に、その体からは虹色の極光が迸っていた。
巫女姿は落葉のようにゆらゆらとアリスを躱すと、ギラリと光る白刃を、体勢を崩し無防備なアリスの脇腹をめがけて突き出した。
瞬間、まばゆい光が通路内を駆け巡る。
顔を上げた魔理沙が、金色の粒子を撒き散らしながら、八卦炉を上方に向けてマスタースパークを放っていた。圧倒的な光量に押されて、石造りの通路がガラガラと音を立てて崩壊してゆく。魔理沙の姿が、光と瓦礫に飲まれていった。
降り注ぐ瓦礫を前に、まるで生きた人間のように、無貌の巫女姿は狼狽した。
アリスは、その隙を逃さなかった。
手にした血塗れの短刀――博麗の儀礼刀――を巫女姿の心臓に正確に突き立てる。
夢想天生によって逃れられたはずの巫女姿にしかし、吸い込まれるようにして儀礼刀は突き刺さった。何かの力に導かれるが如く。
傷口から鮮血のように赤光が迸り、苦悶に呻く巫女の形をした弾幕は、そのまま瓦礫の豪雨に飲まれていった。
アリスは、走っていた。
「魔理沙……」
瓦礫の雨を逃れきった先。

相応の空間を持った部屋に突き当たった。
灯の消えた燭台に囲まれた大きな祭壇が、部屋の中央にぽつんと置かれている。その周りには、階上で見たものと同じ台座が並べられ、紫布の上には小さな丸い物体、紅白の陰陽玉が設置されている。陰陽玉の陰と陽の継ぎ目からは、塔表面のそれのように、血が滴り落ちていた。
祭壇の上に、何かがある。
人の形を、している。
アリスは、ゆっくりと祭壇に近づき、巫女装束を着た人型の、その相貌を覗き込んだ。
それを目撃したアリスは呼吸を失い、全身総毛立つのを感じた。
見知った顔が、そこに在った。
「そうか……だから……」
アリスが呟いたとき、「それ」が目を見開いた。
底知れぬ狂気と、一つの存在だけでは抱えきれない程の憎悪に、淀み濁り穢れきった血瞳でアリスを睨む。時間を止められたかのように、アリスは動くとができなかった。その感覚は、畏怖にも似ていた。
其処に在ったのは、ある種の神と呼称するに足りた。
視界が炎のように揺らめいている。一斉に灯った燭台の火が、アリスと「それ」を照らしている。
妄想か、現実か。今、判別する事は出来ない。白昼夢か、暗黒がもたらす幻想か、それとも「それ」こそが、アリスを迎えに来た白兎なのか。
「それ」の影のような腕が伸び、アリスの顔へと迫った。
狂気の触手が届くその寸前、バカリと目の前の空間が割れた。その隙間から、白い長手袋をした華奢な手が伸び、時の凍てついたアリスの手をとって、アリスは空間の割れ目へ引っ張りこまれた。
覚めやらぬ夢を見ているような感覚で、アリスは見慣れたそいつの顔を見ていた。
「危なかったわね」
八雲紫の涼し気なニヤけ面が、呆けたアリスの心に苛立ちを思い出

させた。

優雅なる窓辺

細波の音が優しく響く、このコテージ。
夕焼けの天幕に、浜辺のステージ。観客は穏やかな海とアリス。
舞台女優は、八雲紫。白いビキニ姿で、少女にしては完璧過ぎるそのプロポーションを惜しげも無く晒し、涼しい顔をしている。正直、見たくもないものを見せつけられても迷惑以外の何者でもないのだが、水平線の向こうに沈み行く赤い太陽を背に、肩越しに微笑むその姿は、悔しいけれど絵になっている。
藤の蔓を編上げたロッキングチェアに座り、アリスは海を眺めていた。ここはおそらく、八雲紫の別荘だろう。物事の隙間に自分の居場所を作ることが出来る、それが八雲紫の力である。こんな別荘の一つや二つ、隠し持っていてもなんら不思議ではない。
濡れたブロンドの長い髪を揺らしながら、紫はアリスの方へ足跡も残さず歩いて来ると、向かいの席に座った。曲がりくねったストローに口を付け、いつの間にか、手にしたトロピカルジュースを飲んでいる。トロピカル……何の果実の絞り汁なのかサッパリ分からないが、兎に角トロピカルな色をした怪しげな液体を飲んでいる。
紫は悪戯子猫のようなそのキラキラした瞳をアリスに向け、この上なく楽しそうに言う。
「退屈ね」
付き合うのは、馬鹿馬鹿しい。
アリスは口火を切った。
「魔理沙は？」
紫は視線を少し落とすと、首を振った。
「間に合わなかったわ」
アリスは奥歯を噛み締めながら、紫の言葉を待った。
「あの場所はね、私の力も及びにくい場所なのよ。それにあの子、なんだか妙な魔法を使っていたみたいだし……」
試作のマジックアブソーバーの事だろう。確かに、魔力自体を霧散

させるあの魔法は、紫の力にも影響を及ぼすかもしれない。
「もう少し早く、気付いていればね……」
視線は海の彼方。友人を喪い、流石の紫も笑顔でいられる訳ではないようだ。その瞳は潤んでいた。
涙である。
何処かで、ホッとしている自分がいる事に気付いた。友人として、八雲紫に期待をしていたのかもしれない。嘘か誠か、それすらも得意のペテンの内なのかもしれないが、少なくとも、無神経な反応をしなかったことで、アリスは八雲紫という人物に失望せずに済んだ。
「魔理沙……」
強張った頬からは、呻きにも似た言葉しか出ない。てゐのペンダントを強く、握りしめた。
「止しましょう。覆水盆に返らず。起こった事実に手を加えることは出来ないのよ。過ぎた事を言っても詮無いことだわ」紫は眉を開き、笑顔を作った。「ねえ。何か楽しいお話してくれない？」
「お話？」
「退屈じゃない」
「そう、ね」
アリスはロッキングチェアに深く坐り直し、紫を見据えた。
「なら、こんな話はどうかしら？」
「何かしら」
「帰るお家を探す、哀れな女の子のお話」
ふっ、と紫は優しく笑った。
「聞きましょう」
その瞳は、相変わらず、遠く海を見つめていた。
アリスは、ロッキングチェアを揺らした。
「昔々、人間が歴史を記憶に刻み始める、その少し前」
ゆっくり、ゆっくりと。
軋むその音が、ささくれ立った神経に心地良い。細波の音に、それは似ていた。母のメロディ。生命の音楽。
「一人の女の子が、不思議の国から堕ちて来た。白兎を深追いして、彼

の作った大きな穴に、転がり込んでしまったのね」
今でも思い出す事が出来る。あの白兎の大きな背中。歩く仕草。喋り方。
現実なのか、妄想なのか。
嘘なのか、誠なのか。
善なのか、悪なのか。
果たして、それは兎だったのか。
「女の子は、哀しくて毎日泣いたわ。此処には大切なお友達もいなければ、大好きなパパとママも居ないんだもの。身勝手な白兎は、何処かに行ってしまった。だあれも居ない世界で、一人ぼっち」
孤独。
星の無い夜空を飛ぶ、ひとひらの蝶の様に。
月も無く、飛び込む炎すら見えない。
暗黒と絶望の世界を唯一人、彷徨う少女「アリス」。
「女の子は、如何しても帰りたかった。パパとママのいるお家に。大切なお友達がいる場所に」
孤独は、毒だ。
人の心を強めもするし、弱めもする。そして、殺す事も。毒は己の奥深くにまで入り込み、心だけでなく、その肉体をも汚してゆく。
「女の子は、帰りたかった。だから、死ぬ訳にはいかなかった。生きる為に奪い、喰らい、殺すうち、女の子はいつしか、こう呼ばれるようになった。妖怪、と」
絶望の中に堕とされたヒトは、容易く、考えるよりもずっと簡単に、幻想になってしまう。血を吸ったヒトは、容易く、想像するよりもずっと簡単に、日常を捨ててしまう。
「妖怪に成り下がっても、女の子は帰りたかった。いつか、帰る道を見つけ出すために。女の子は、世界に自分の居場所を創り出した。自分が自分として存在出来る場所を」
それを繋ぎ止めるには、場所が、仲間が、そして力が必要だ。孤独を克服し、己を律し、ヒトとして日常に在る為に。
古の人々は、その為に宗教を創った。

「その場所の名は、幻想郷。その女の子の名前は」
アリスは、彼女の顔を見つめた。
その顔に、動揺は欠片も見られなかった。
「八雲紫、貴女よ」
紫の横顔には微笑すら浮かんでいた。
八雲紫が自らと同じ存在であると気付いたのは、魔法の森の地下遺跡で、豊聡耳神子の天井画を見た時だ。
正確に言えば、八雲紫だけではない。この幻想郷に生きる全ての者が、アリス・マーガトロイドと同じく、不思議の国に迷い込んでしまった存在なのである。何故なら、其処は不思議の国そのものなのだから。
幻想郷は、八雲紫が創った不思議の国だ。白兎に連れられて、帰る道を失くした「アリス」は、いつしか自らも白兎と成り果て、人々を導くのだ。永遠に続く家路へと。
結局、誰も彼もが同じなのだ。
在るべき場所を求めて、出口の見えない旅をしている。
八雲紫が只の白兎でない所以は、彼女は自ら、迷い込む為の不思議の国を創ってしまったところである。其処に自らと同じ「アリス」達を呼び集め、生きる術を与え、力も与えた。
場所、仲間、そして力。
その全てを備えた、八雲紫というか弱き存在を繋ぎ止める為の揺籠。それが、幻想郷なのである。
力の名は、博麗。
古に忘れ去られた、人造の神の名。
「外界を呼び込み、異変を起こしていたのは、貴女ね。スペルカードルールの原案を創ったのも、貴女」突き付けた人差し指は、微風の様な微笑に流されてしまう。「博麗の巫女、霊夢に異変を解決させる、その為に。博麗の力を、忘れられないようにするためかしら」
「面白いおとぎ話だこと。元ネタはルイス・キャロルかしら？」
紫はせせら笑う。否定も肯定もしない。
「白兎さんは、私も見た事ありますわ。本当よ？　丸くてフワフワの

大きな尻尾に、長〜い耳が可愛いかったわ。でもあいつ、性格がホント最悪なのよねぇ」
紫は嘯くが、眉唾である。
実際の所、アリスは自身の予想の全てが当たっているなどとは考えていない。現時点では憶測に過ぎないのだ。情報は断片的過ぎて、推論を成すには足りない。
また、推論を成す事、それ自体に意味が無い。八雲紫か何処で何を成そうと、アリスには関係の無い事だからだ。その行いの善悪も過去も未来も、アリスには大して重要ではない。
アリスにとって大切な事は、唯一つ。
八雲紫が、自らと同種の存在であるという事。それだけなのだ。それだけは、確信がある。
「なるほど」
「え？」
アリスが言うと、紫は眉を上げた。
「異変を呼び込むのは、博麗を忘れさせないためじゃないのね。考えてみれば、わざわざ創ったあの神を地下の墓に埋めて、博麗を忘れさせたのは、他ならぬ貴女だもの。なら、何の為かしら」
「別に私が作ったんじゃないけどね。埋めたのも私じゃないし」
「異変を起こしているのは、闘争が無ければ、妖怪の力が衰えてしまうからかしら。それとも、兵隊が欲しいからかしら？」
「つまり、軍事力ってわけね。そんな軍隊を創って、私は一体、何をしようって言うのかしら」
「あの月を、侵略したいんでしょう？　……いや」アリスの目は、鋭く紫を捉えている。「取り戻すと言った方が正しいかしら」
紫の表情から、一瞬、笑みが剥がれ落ちた。
「昔々、一人の少女が、この世界に堕ちてきた。そう。堕ちて来たんだわ。貴女は」アリスの指が、天上を指す。「あの月から来たんでしょう？」
トロピカルジュースに口を付け、すぐにその顔にまた笑みを貼り付ける紫。

「あんたはあの月から、罪を犯して追放された。あんたの罪がなんなのか、それは分からない。しかしあんたが月から来たと考えれば、辻褄が合う」
「へえ？」
「だからあんたは、月への異常な敵対心を持ち続けているんでしょう？　自分の居場所を取り戻したいから」
　紫は腹を抱えて笑った。
「なるほど、八雲紫は月の姫君だったと？　面白いお話ですわ。実は私が、月の支配者、嫦娥だったとか？　だとしたら、もっと面白かったんだけど」髪をかき上げる仕草が雅である。「残念だけど、その論には致命的な穴があります。私は月人じゃないもの」
「最初に月の都に迷い込んだのだったら？」
「故郷でもないのに、あんなところに戻りたいなんて思う人間が、いると思う？」
　天上を見上げて、紫が言う。なまめかしい喉元のラインが露わになり、アリスは鬱陶しく感じた。自己主張が激しいのか、存在自体が煩い。霞のような隙間妖怪のくせに。
「それもそうね。じゃあ、違かったみたいね」
　簡単にアリスが言うと、紫は盛大に吹き出した。
「なら貴女は、実は外の世界の人間なんでしょう？　博麗大結界を守ると見せかけて、実は外界から幻想郷を乗っ取ろうとしている。そのために、異変を起こしているんじゃなくて？」
「支離滅裂だわ。やめましょう。これ以上聞くと、私の腹筋が持たないわ。よくもまあ、口から出まかせを、次から次へと。時間稼ぎがバレバレよ？」
　紫は立ち上がり、砂浜から少し高くなっているコテージの、その手すり部分から手を突き出した。
　その妖艶に濡れる人差し指で、っっっ、と空間をなぞる。途端、空間がぱっくりと割れ、何処か別の場所に繋がった。紫の力、隙間を支配する能力である。紫はそこへ無造作に右手を突っ込んだ。
「あっ」

すぐに引き上げたその手は、別の腕を掴んでいた。
その肌は、蜉蝣のような白い色をしている。
「ごめ～ん。見つかっちゃった」
腕を掴まれて宙吊りにされたまま、てへ、と古明地こいしは舌を出して笑う。
「貴女が探索で私の目を引きつけて、その間、隠密に長けた彼女が、私の調査をする。そういう算段だったんでしょう？　だから、時間稼ぎのでまかせ話までした」
「さすがね。察知されているとは」アリスは両手を広げ、降参の意を示した。「でも最初に言ったのは貴女でしょう？　楽しいお話をして、って」
アリスの調査対象は、最初から八雲紫個人だった。紫が何処で何をしようと、アリスには関係が無い。重要なのは、彼女の持つ情報と、力だった。アリスを幻想郷に引き入れたのが紫なのだとしたら、そこへ帰る方法を知っているはず。よしんば知らなかったとしても、彼女の力と集めた情報を使えば、帰る道が開けるかもしれない。しかし、あの八雲紫がそう簡単に協力してくれるはずもない、交渉の材料が必要である。彼女が負い目と感じ、その弱点となるような材料が。そうして始まったのが、この探索だった。
そう。紫は負い目を感じている。
だから紫は、こいしもアリスも、殺さないのだ。
だから、アリスは今も、紫を友人だと思えている。
「私の屋敷まで見つけ出すとは、大したものだわ」
八雲紫の本拠には、彼女の忠実な式神である、八雲藍が居る。九尾狐の大妖怪である藍が守る屋敷は、幻想郷と外の世界の狭間に存在し、おいそれとは見つからない。見つけられたとしても、藍の目を掻い潜るのは難しい。そんなことが出来るのは、無意識の死角を突ける古明地こいしをおいて他にはいまい。
古明地こいしは、天狗の里で見つけた「真実」にショックを受け、この探索に協力してくれている。
「あの狐さんに見つからないようにするの、苦労したわ～。でも油揚

げのトラップを仕掛けておいたら、簡単に引っかかってくれたわよ～。かっわい～」
紫は左手でこいしの頬をはたいた。スパン、と綺麗な音がする。
ぶらりぶらりと、こいしの小さな体が左右に揺れる。
「いった～い！」
こいしはケラケラと笑っていた。覚妖怪の証である「第三の目」を閉じてから、彼女には怒りや憎しみといった感情が欠落しているのだ。彼女には喜怒哀楽の楽しか存在しない。それでも、拾った「希望の面」とやらでかなり感情を取り戻してはいるが、まだまだ希薄である。
こいしはきっと、自分の感情を取り戻そうとして、アリスに協力してくれていたのだろう。天狗の里で見つけた「真実」。それに明確な怒りを覚えられなかったことが、古明地こいしにとって、重大な事態だったのだろう。こいしもアリスと同じだ。在るべきカタチを求めて、探索をしている。そこから未来へ進むために。
「まったく、藍にはお説教が必要ね」
紫は溜め息を吐いて、こいしをぽいっと放り投げた。
「あ～れ～」
宙を舞ったこいしは、待ち構えていた隙間に飲み込まれて消えた。
紫は再びロッキングチェアに座り、ストローを咥えた。
「地霊殿に送り返したの？」
アリスが問うと、紫は口角を上げ、不気味に笑った。
「いや、地獄に送ってやったわ」
しかし、アリスには、確信があった。
「あんたは、そういうことはしないわ」
「なんでそう思うのよ」
「その甘さは、あんたの武器だからね」
「甘さ、ねぇ……、へえ、欠点じゃなくて？」
「武器でしょう。それをやっていたら、私を完全に敵に回している。古明地こいしの姉も。胡散臭い割には敵を作れない、そういう性質は、あんたの寿命を確実に伸ばしているでしょう」

喜怒が混じった複雑な表情をする。
「つまらないわ、からかい甲斐が無くて」
紫はストローでトロピカルジュースをぐるぐるとかき混ぜ始めた。
アリスへと瞳を向ける。その表情にいつもの作り笑いは張り付いていない。大きな目を鋭く尖らせて、刺すような視線である。
「史記を、読んだのね」
アリスは頷いた。
「天狗の里にあったわ」
「そう……」
天狗の里に隠匿されていた「真実」。
その研究資料の中に、史記は在った。
正式名「幻想史記」。八雲紫が編纂した書物である。いわゆる紀伝体の形をとった書物であり、アリスが天狗の里で入手したものは、本紀にあたる巻であった。
本紀には、幻想郷の成立からの歴史が記述されていた。
そして、都度起こった異変の記述も。
魔法の森。
緋想天。
神霊廟。
紅魔館。
旧地獄。
全て、幻想史記に異変発生の記述があった場所である。そして、その他にも。
「史記を読まなければ、儀礼刀の存在に気が付くはずがないものね。社の中に刀があれば、普通は御神刀だと思うもの」
「記述が簡素で、内容の読み取りに苦労したわ。おまけに暗号で書いてくれちゃって。まあ、解読は容易かったけど」
「そりゃ、読んでもらうために書いたのだもの。あれは時期尚早に公開されてしまった場合の意思表示ですわ。これは、今は隠すべきものだ、ってね」
「いつかは公開する気があったというわけ？」

「いずれ……遠い未来に。螺旋が直線になってしまうくらい未来に、かしら」
渦を巻く極彩色の液体。紫はそれを見つめながら、遠い、はるか遠い場所を見つめる。それは、ここではない何処か。
「何故」たまらず、アリスは問うた。「何故あれを放置している」
真実。
八雲紫が異変を起こしている。そうアリスが確信したのは、紫がそれを放置していたからだ。存在自体が天道に背き、幻想郷にとって害悪以外の何物にもならないだろう、それ。やがて大きな異変を起こすことは明確である。
「それはこちらの台詞ですわ。何故あれを解放したのかしら」
初めて、紫は責めるような視線を向けた。
「あれが人里で何をしでかしているか、知らないわけではないでしょう」
上白沢慧音が頭を抱える、神隠し。
十中八九、アリスが解放してしまった真実達が関わっているのは間違いない。
「言い訳にしかならないけれど、あれは事故よ。それに、打てる手は打っている」
協力者達とともに、真実達を捜索している。今もアリスの人形達は捜索を行っているだろう。パチュリー・ノーレッジが提供してくれた、魔力貯蔵を行う「賢者の石」のレプリカは、アリスと人形が一時的に分断されたとしても、自動探索と自動帰還を行える能力を実現してくれている。
「貴女こそ」開き直りだということは自覚していた。「何故、天狗共の行いを放置している。貴女なら簡単に対処できるのではなくて？」
「買いかぶられたものね」
紫はストローをかき回す手を止めた。極彩色の液体は、慣性に従って、渦を巻き続ける。
「一度放たれた運命の矢は、途中で止めることなど出来はしないわ。事態はとっくの昔に、私の手から飛び立っている。もはや私も、舞台

の上の女優の一人でしかない」
「違うわね。あんたは異変を望んでいる。だからこそ、放置しているんだろう。異変を起こし、それを博麗の巫女に解決させる。それこそが、幻想郷を維持存続するために必要なプロセスだからだ。闘争がなければ、人の心は穏やかに死んでゆく。だからあんたは、別の時空から人間を土地ごと呼び寄せて併合を行っている。人為的に異変を起こすために。あんたは神隠しの主犯なんかじゃあない。全ての異変の主犯だ」
アリスの言葉に、紫は悲しそうに笑った。
アリスはそれを肯定の意と取った。
「やはり、そうなのね。魔法の森の地下の遺跡は、未来の神霊廟なのね」
橋姫の語った「併合」。土地の境界すら曖昧にしてしまう、八雲紫のその力。
そんなことが可能ならば、時空の境界すら曖昧にできてしまうのではないのか。なにせ、八雲紫は「白兎」なのだから。時空を超えて別の世界を旅する、「白兎」なのだから。
「アリス。貴女、根本的に勘違いしているわ」
八雲紫は、優しく言う。
「私は全能なんかじゃあないのよ。神霊廟の存在に一番驚いたのは、他ならぬこの私自身なんだもの。これだけは本当よ。過去も未来も、たった一人の人間には支配出来やしないの。だから……」
その哀しい笑顔が、アリスの胸に突き刺さった。
「貴女の望みは、私では叶えられない。残念だけれど、私も貴女のホワイト・ラビットではないのよ」
可能性の一つとしては、考慮していた。因幡てゐも予想していた。
「そう……」
紫自身、帰るべきその場所を、未だ見つけられていないのだから。
パチン。
紫が指を鳴らすと、浜辺の風景はどろりと溶けて、瞬時に室内の風景に変わる。見覚えのある場所、それもそのはず、アリスの家だ。

アリスは暖炉の前の安楽椅子に座っていた。
いつの間にかドレス姿に着替えた紫は、書台の上に置いてあった「幻想史記」を取り上げた。
「これは預からせてもらうわ。今はまだ、公開するべき時ではない」
机の引き出しを開け、中に在ったパチュリー製の博麗の模造刀を隙間に放り込んでゆく。
「古明地こいしが持つ儀礼刀も預からせてもらう。あれは社に安置しておくべきものなのよ。亡くなった人々の魂の安らぎの為に」
「勝手になさい」
全ての品物を隙間に放り込んだ後、紫はアリスの方を向いて、言い訳するように言った。
「アリス。私を恨みたいなら、恨みなさい。それが貴女の生きる糧になるというのなら、私は甘んじて受け入れましょう」
アリスは、首を振った。
「なんであんたを恨む必要があるのよ。これは、私の物語だわ。たまたま、あんたの物語と交差した……それだけのことでしょう。私は必ず、元の世界に戻ってみせる。どんな手を使っても。そうね……そういう意味では、私達、似ているのかもね」
紫は、溜息を一つ吐いた後、言った。
「貴女みたいな毒舌無鉄砲娘と似てるだなんて、心外だわ」
それでも、紫は少し、嬉しそうだった。
紫が去って後。
アリスは夕食の材料を背負い込んで、魔法の森を歩いていた。
空は既に暗く、月が照っている。気温差に鈍くなったアリスには分からないが、外気温は震えるほどであろう。魔法の森の起伏は相変わらず厳しかったが、黙々とアリスは進んだ。
やがて、目的地に着いた。
魔理沙の家。
ノブを回すと、鍵は開いている。不用心な魔理沙のことだ。いつも鍵を掛けていないのだろう。もっとも、こんな場所では必要になることなど、ほとんど無いが。

アリスはまっすぐ台所に向かい、おさんどんを始める。魔理沙の性格を反映したかのように荒れ放題の部屋だが、流石にいつも使う台所周りはわりと綺麗に片付いている。あくまで、割りと、であるが。今朝の朝食の残骸を片付けることから始めるくらい、魔理沙の台所にしては上出来だろう。

料理が出来上がり、片付けたダイニングテーブルの上にあらかた盛り付けた後、アリスは魔理沙の家を出た。

家の前で、腕組みして待つ。

「十、九、八、七、六、五、四、三、二、一……」

目を閉じて数える。

「ゼロ」

アリスがそう言った瞬間、土の中から、何かが勢い良く飛び出してきた。

上海である。

両手に掘削用の魔動ドリルを持ち、胸元に輝く青い「賢者の石」のレプリカをつけている。魔力貯蔵を行うそれは、長時間に渡る上海の自立稼働を実現している。パチュリー・ノーレッジ謹製の魔法具だ。

「えらいわ上海、時間通りね」

アリスが笑いかけると、上海は嬉しそうにアリスの周りをぐるぐると飛び回った。

「おーい」

上海の出てきた穴から、手がひらひらと振られる。アリスはその手を引っ張って、声の持ち主を地上に引き上げた。

「うえっ、口ん中、土入っちまった！」

はしたなく地面に唾を吐き捨てる、白黒の衣を纏った女。

霧雨魔理沙だ。

「よく無事だったわね」

アリスがしれっと言うと、魔理沙は口を尖らせた。

「よく言うぜ。全部計算してた癖に。全く、勝手に人にドーピングするの、やめろよな」

魔理沙に飲ませた桃の濃縮ジュースは、衣玖から提供してもらっ

た、天界の桃を使っていた。天界の桃には、体を頑強にする効果があるという。万一に供え、それを魔理沙に飲ませておいたのだ。
「斬られても平気だった時には驚いたぜ。便利だなこれ、私も使おうかな」
「あ、でも明日、副作用で、死ぬ程筋肉痛が来るらしいわよ」
「マジ？　そんなもん無断で人に飲ますなんて、お前頭おかしいんじゃね？」
「そのおかげで助かったんだからいいじゃない」
「そうそう、助かったと言えば。瓦礫に飲まれた時は、流石にもうダメかと思ったけどなぁ、上海が防いでくれたんだよ。ありがとな、上海」
魔理沙に礼を言われて、えっへん、と上海がふんぞり返った。
上海には魔理沙を守るように命令していたが、予想以上の活躍だ。流石は究極の人形に最も近い存在である。
「魔理沙、すごいじゃない、あの八雲紫に一杯食わせるなんて。大金星だわ」
「へへ、そうかい」
魔理沙は泥の付いた手で鼻の頭を擦った。
今頃は紫も、腹を抱えて笑っている事だろう。
アリスも、上海が傷つけられた借りを返すことが出来て、溜飲が下がった思いだ。
「ほらよ」
魔理沙が放り投げてきたものを受け取って、アリスは目を剥いた。
地下の遺跡で見た紅白の陰陽玉、その内の一つだ。
「なによ、これ」
「お前が言ったんだろうが、なんか盗んで来いって」
洞窟の前で交わした会話を、魔理沙は覚えていたらしい。魔理沙なら止めれば逆にやるはずと踏んだが、果たして予想通りだった。
「それにしても、何時の間に……」
「それにこれもな」
アリスが巫女姿の弾幕に突き立てた儀礼刀を受け取る。
「ポシェットの方は流石に無理だったぜ」

「よくも、まあ……。でも、あんたの取り分が無いんじゃないの？」
「んなこたぁない」
魔理沙は泥だらけの顔でニカッと笑う。
バッ、と着ていた黒いコートの胸元を開くと、その内ポケットにはぎっしりと金銀、宝石が詰め込まれていた。
「途中で宝物庫らしい場所を通ってきたんでな。ちょいと拝借してきた」
アリスは声を上げて笑ってしまった。
流石は魔理沙だ。まったく、こいつには敵わない。
「あんたにはもう、脱帽だわ」
それ以上の形容のしようがない。
笑いすぎて涙が出たのは、衣玖との馬鹿話以来だろうか。
最近、よく笑っている気がする。多くの人々との出会いと交流が、そうさせるのだろうか。
かつて幻想郷は、八雲紫一人の為の箱庭だったのかもしれない。
しかし今は、此処を住処とし、此処を愛する人々がいる。
八雲紫が創った、この美しい世界。
「しかし」
すとん、と魔理沙が腰を落とす。
「腹減ったぜ……もう一歩も動けねえ」
はしたなく笑い転げるアリスを見て、魔理沙はキョトンとしていた。
「そんなに面白いかぁ？」
アリスはハンカチで涙を拭きつつ、魔理沙に手を差し伸べた。
「そう言うだろうと思ったわよ。夕飯、用意してあるわ」
「マジか。なんだよ、気が効くじゃねーか、おい」
月の光に照らされる、魔理沙の満面の笑み。
繋いだその手は、あたたかい。
今更になって、気付いた。
いつの間にか、アリスも此処を、この幻想郷を愛していたのだ。

「何？　アリスが居ない？」
「ええ。慧音、貴女は見ていませんか？」
　人間の里の守護神、上白沢慧音は首を振る。
「いや、悪いが見ていない。いつものように家に引きこもって、魔法の研究でもしているんじゃあないのか？」
「彼女の家には行ったんですがね。居なかったんですよ。人形たちも半ば埃を被っていまして」
「ふむ……そういえば、夏頃に会ったとき、様子がおかしかったような」
「ほう」
　文花帖を取り出し、射命丸文は万年筆を滑らせる。
「具体的には、どのような？」
「頼みごとをしたんだが、にべもなく断られてしまってな。いつものあいつなら、嫌味一つで引き受けてくれるものだが」
「嫌味一つ、ですか」
　アリスの性格を思い返して、文は苦笑する。
「まさか、頻発する神隠しにやられたのではないか。最近は妖怪にまで広がっているそうだからな」
　慧音は顔を曇らせた。心配なのだろう。妖怪の心配をするなど、この女はお人好しを通り越して、まるで馬鹿である。しかし、愛すべき馬鹿だ。
「あのアリス・マーガトロイドが、神隠しごときにやられるとは、とても思えませんが……」
　文が言うのは、慧音を安心させるためではない。
　あの時。
　虹色の光を放つアリスの力は、文の全力を持ってしても打ち破れたかどうか。
「しかし、珍しいじゃないか。お前がアリスに用だなんて」
「少し、貸しがありまして」
　慧音はやつれたその顔を無理に綻ばせた。
「まあ、見つけたら連絡する。しかし、今は捜索に協力出来そうにな

い。客が、来ているからな」
人の気配のしない寺子屋を見上げて、文は溜め息を吐いた。
「そうですか。では、お願いします」
寺子屋を飛び立つ時、上白沢慧音は大きく手を振っていた。
「困りますねぇ。貸しは、返していただかないと」
上空で、独り言ちる。
あの時、アリスが言った「真実」。
文はまだ、見つけられていない。

穏やかなる風が、開け放した窓から入ってくる。
午後の日差しの中、読みかけの魔道書を放り出して、アリスはまどろんでいた。傍らに侍る上海も、うつらうつらと船を漕いでいる。
窓辺には、地下遺跡で手に入れた陰陽玉が置かれていた。
探索はこれで終わりだろう。
八雲紫ですらも、アリスのホワイト・ラビットではなかった。
今は、待つしかない。新たな白兎が現れる、その時を。
次の異変は、いつ起こるのだろう？
その時現れるのは、どんな者なのだろう？
未来を知る術を持たないアリスには、想像するしかない。
アリスは、じっと待っている。あの陰陽玉を持って行く者を。
その者こそが、アリスのホワイト・ラビットなのだろうか。
その者は、果たして異変を起こすのだろうか。
異変を呼びこむことで、紫と同じく、アリス自身も誰かの白兎になってしまうのだろうか。
それは、分からない。
ただ、決定的な何かが起こる。
そんな予感がするのだ。
しかし、今はまだもう少し、その甘い予感に浸って、微睡んでいることにしよう。
この愛すべき、美しい幻想の中で。